

安武遺跡群 3

— 今泉遺跡第8・9次調査 —

— 念仏塚遺跡第8次調査 —

主要地方道久留米柳川線久留米工区改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和6（2024）年2月

久留米市教育委員会

序

久留米市は、将来にわたって、住みやすく、生き活きと生活できる地域であり続けるために、まちづくりの鍵を握る「人」を育て、支えることを大切にしながら、「街を伸ばし、暮らしを守る」取組を進め、専門職種で安定して暮らせる「安心・安全で活力にあふれた、誰もが生き活き生活・活躍できる共生のまち」を実現することを目指しています。その一方で、古くから水路と陸路の要衝だった久留米市には、先人達の残した歴史遺産が数多く残っています。久留米市では『久留米市文化財保存活用地域計画』に基づき、多種多様な歴史遺産を次世代へ継承するため、その究明や活用を進めているところです。

本書は、安武町で実施中の主要地方道久留米柳川線久留米工区改良事業に伴う、3冊目の発掘調査報告書です。本書に掲載した今泉遺跡と念仏塚遺跡では、落とし穴状遺構や弥生時代の竪穴建物群、古墳時代から古代の遺構、地震痕跡などを発見し、安武町の歴史を語るための新たな資料を得ることができました。これらの成果が地域史の普及や究明、久留米の歴史や文化財保護に対する市民の理解に貢献できれば幸いです。

なお今回の発掘調査に際して、福岡県久留米県土整備事務所の皆様をはじめ、近隣住民の皆様にも多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

令和6年2月29日

久留米市教育委員会
教育長 井上 謙介

例 言

1. 本書は、平成30年度から久留米市が福岡県久留米県土整備事務所の委託を受けて、主要地方道久留米柳川線久留米工区改良事業に先立ち実施している、安武遺跡群の発掘調査報告書である。本書には、今泉遺跡第8・9次調査と念仏塚遺跡第8次調査の報告を掲載する。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の西拓巳が担当した。
3. 本書に掲載した発掘調査の略記号と調査番号は、下記のとおりである。

発掘調査名	略記号	調査番号
今泉遺跡第8次調査	IMI-008	202115
念仏塚遺跡第8次調査	NNB-008	202206
今泉遺跡第9次調査	IMI-009	202213

4. 遺構実測図は、国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成した。図面の方位は全て座標北を示す。なお、座標は熊本地震に伴うパラメータ補正を実施した。
5. 本書に掲載した遺構配置図の作成は、西と発掘作業員の川野洋之、原学、日比生勝、舟越朝菜、本荘郁子、宮原眞男、山口誠也が行い、一部を職員の熊代昌之、発掘作業員の野村泰夫、平田広之が補助した。遺構配置図はトータルステーションを用いて測量し、測量データは株式会社CUBIC製の「遺構くんcubic」で編集・保存した。
6. 土層と落とし穴状遺構のピット、遺物出土状況の実測図は、手測り（1/10）で西と熊代が作成し、一部を発掘作業員の川野と原、平田、舟越、本荘、宮原、蒲池稔、原口貞子が補助した。
7. 遺構配置図と個別遺構図の浄書は、西と文化財資料整理員の今村理恵、江藤玲子、発掘調査整理作業員の山元博子、湯川琴美が行った。浄書には、「遺構くんcubic」と米国アドビ製の製図ソフト「Adobe Illustrator」を用いた。
8. 土層の色調は、『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、昭和45年初版）に準拠した。
9. 遺構写真は、キヤノンEOS6D Mk.Ⅱデジタルカメラを用いて西が撮影した。写真は掲載にあたり、米国アドビ製の画像編集ソフト「Adobe Photoshop」を用いて編集した。
10. 今泉遺跡第8・9次調査の全景写真は、有限会社空中写真企画に委託して、デジタルカメラをドローンに搭載して撮影した。
11. 本書に使用した遺構の略記号は、SB-掘立柱建物、SD-溝、SI-堅穴建物、SK-土坑・落とし穴状遺構、SP-ピット、SX-その他の遺構・攪乱を意味する。
12. 本文と遺物実測図、遺物観察表、写真図版の遺物番号は同一である。
13. 遺物実測図は、西と職員の小川原励、文化財資料整理員の今村と江藤、発掘調査整理作業員の江口里織、古賀啓子、佐藤節子、山元博子が作成した。
14. 遺物実測図の浄書は、西と江口、山元、横井理絵が「Adobe Illustrator」を用いて行った。

15. 遺物の拓本は、発掘調査整理作業員の古賀啓子と山口久美子が作成した。
16. 遺物実測図の凡例は、以下のとおりである。
- ・遺物の断面黒塗りは須恵器、斜線は鉄製品、表面のトーンは使用面の範囲を示す。
 - ・調整の線は、直線「—————」が明瞭な稜線を、間隔の長い破線「——— ———」が不明瞭な稜線を、一点鎖線「— - — - —」が回転ナデを、間隔の短い破線「— — — —」がケズりおよびヘラケズリを示す。
17. 出土遺物観察表は西と原口節美が作成し、西が編集した。その凡例は、以下のとおりである。
- ・法量の単位は、特記無い限りcmである。また、[]は還元値を、()は残存値を、— は欠損または該当する部位が無いことを示す。
 - ・色調は、『新版 標準土色帖』に準拠した。ただし、該当する色調が無い場合は、日本標準規格「物体色の色名」に拠った。
 - ・胎土は、0.5mm未満の砂粒を微砂粒、0.5mm以上1mm未満を細砂粒、1mm以上3mm未満を砂粒、3mm以上を砂礫とした。
 - ・遺物番号は、久留米市市民文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

(例) 202115 — 000001

調査番号 登録番号

18. 遺物写真は、リコーPENTAX K-1 IIデジタルカメラを用いて、久留米市埋蔵文化財センターにおいて西が撮影した。遺物写真も掲載にあたり、「Adobe Photoshop」を用いて編集した。
19. 出土遺物や図面、写真等の諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。閲覧や撮影、借用などを希望する際は、事前に久留米市市民文化財保護課に連絡されたい。
20. 本書の執筆と編集は、西が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 令和3～5年度の調査の経過	1
2. 調査の体制	3
II. 位置と環境	6
III. 今泉遺跡第8次調査	10
1. 調査の目的と経過	10
2. 調査の記録	10
3. 総括	32
IV. 念仏塚遺跡第8次調査	37
1. 調査の目的と経過	37
2. 調査の記録	37
3. 総括	42
V. 今泉遺跡第9次調査	44
1. 調査の目的と経過	44
2. 調査の記録	46
3. 総括	51
報告書抄録	巻末

挿図目次

I. はじめに

第1図 主要地方道久留米柳川線久留米工区道路改良事業位置図 (1/10,000)	2
--	---

II. 位置と環境

第2図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	6	第3図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/5,000)	9
------------------------------	---	-----------------------------	---

III. 今泉遺跡第8次調査

第4図 今泉遺跡第8次調査遺構配置図 (1/200)	11	第10図 SK3・5・7実測図・土層図 (1/40)	18
第5図 SD20土層図 (1/20)	12	第11図 SK13・15実測図・土層図 (1/40)	19
第6図 SI1・2・4実測図 (1/60)	13	第12図 SK9・11実測図・土層図 (1/40)	20
第7図 SI6・8実測図 (1/60)	14	第13図 SK12実測図・土層図 (1/40)	21
第8図 SI10実測図 (1/60)	15	第14図 SK14実測図・土層図 (1/40)	22
第9図 SI23実測図 (1/60)	16	第15図 今泉遺跡第8次調査遺物実測図1 (1/4)	24

第16図	今泉遺跡第8次調査遺物実測図2(1/4、1/8、1/2)…	25	第18図	今泉遺跡第8次調査遺物実測図4(1/4、等倍)…	28
第17図	今泉遺跡第8次調査遺物実測図3(1/4、1/2、等倍)	26	第19図	調査区地形図(1/300) ……………	33

IV. 念仏塚遺跡第8次調査

第20図	念仏塚遺跡第8次調査遺構配置図(1/150) ……	38	第22図	念仏塚遺跡第8次調査遺物実測図(1/4) ……	40
第21図	SD1断面図、SD3・地震痕跡トレンチ土層図 (1/40、1/20) ……………	39			

V. 今泉遺跡第9次調査

第23図	今泉遺跡第9次調査北区遺構配置図(1/200) …	44	第27図	SD18断面図(1/20) ……………	47
第24図	今泉遺跡第9次調査南区遺構配置図(1/200) …	45	第28図	SB25土層図(1/20) ……………	48
第25図	調査区基本層序図(1/20) ……………	46	第29図	SI20、SK1・45実測図(1/40、1/20) ……	49
第26図	SB25実測図(1/60) ……………	47	第30図	今泉遺跡第9次調査遺物実測図(1/2、1/4、等倍) …	50

表 目 次

第1表	安武遺跡群発掘調査一覧……………	1
第2表	今泉遺跡第8次調査出土遺物観察表1……………	29
第3表	今泉遺跡第8次調査出土遺物観察表2……………	30
第4表	今泉遺跡第8次調査出土遺物観察表3……………	31
第5表	念仏塚遺跡第8次調査出土遺物観察表……………	41
第6表	今泉遺跡第9次調査出土遺物観察表……………	51

図 版 目 次

Ⅲ. 今泉遺跡第8次調査

図版1	今泉遺跡第8・9次調査全景(南東上空から、合成)	(2) SI4遺物出土状況(北東から)
図版2	今泉遺跡第8次調査全景(南東上空から)	(3) SI4完掘状況(南東から)
図版3 (1)	SD20南部土層(南東から)	(4) SI6木杭出土状況(北から)
(2)	SD20北部土層(南東から)	(5) SI6台石片出土状況(北東から)
(3)	SD20鉄製品出土状況(南東から)	(6) SI6硬化面検出状況(北東から)
(4)	SD20完掘状況(南東から)	(7) SI6完掘状況(南東から)
(5)	SI1石核検出状況(北東から)	(8) SI8土器出土状況(東から)
(6)	SI1硬化面検出状況(北東から)	図版5 (1) SI8硬化面検出状況(南から)
(7)	SI1完掘状況(南東から)	(2) SI8完掘状況(南東から)
(8)	SI2硬化面検出状況(南東から)	(3) SI10焼土検出状況(東から)
図版4 (1)	SI2完掘状況(東から)	(4) SI10硬化面検出状況(南東から)

図版5 (5) S I 23硬化面検出状況 (南東から)

(6) S I 23完掘状況 (南東から)

(7) SK 3土層 (南東から)

(8) SK 3完掘状況 (南西から)

図版6 (1) SK 5完掘状況 (東から)

(2) SK 7焼土・土器出土状況 (南西から)

(3) SK 7土層 (南東から)

(4) SK 7底部完掘状況 (南西から)

(5) SK 15土層 (南西から)

(6) SK 15完掘状況 (北西から)

(7) 落とし穴状遺構群完掘状況 (北西上空から)

(8) SK 9土層 (南西から)

図版7 (1) SK 9ピット検出状況 (北西から)

(2) SK 9ピット礫出土状況 (南東から)

(3) SK 9ピット断面 (南東から)

(4) SK 11ピット検出状況 (北から)

(5) SK 11ピット礫出土状況 (北から)

(6) SK 11ピット断面 (南から)

(7) SK 12土層 (南東から)

(8) SK 12ピット検出状況 (北東から)

図版8 (1) SK 12ピット礫出土状況 (北東から)

(2) SK 12ピット断面 (南西から)

(3) SK 14土層 (東から)

(4) SK 14完掘状況 (北から)

(5) SK 14ピット礫出土状況 (北から)

(6) SK 14ピット断面 (南から)

(7) 調査地点から第1～5次調査を望む (南西上空から)

(8) 調査地点から念仏塚遺跡を望む (南東上空から)

図版9 今泉遺跡第8次調査出土遺物1

図版10 今泉遺跡第8次調査出土遺物2

図版11 今泉遺跡第8次調査出土遺物3

図版12 今泉遺跡第8次調査出土遺物4

図版13 今泉遺跡第8次調査出土遺物5

図版14 今泉遺跡第8次調査出土遺物6

図版15 今泉遺跡第8次調査出土遺物7

図版16 今泉遺跡第8次調査出土遺物8

図版17 今泉遺跡第8次調査出土遺物9

IV. 念仏塚遺跡第8次調査

図版18 念仏塚遺跡第8次調査全景 (南上空から)

図版19 (1) SD 1土層 (南西から)

(2) SD 1完掘状況 (北東から)

(3) SD 3土層 (西から)

(4) SD 3完掘状況 (西から)

(5) 地震痕跡検出状況 (南西から)

(6) 地震痕跡土層 (南西から)

(7) 念仏塚遺跡第8次調査出土遺物1

図版20 念仏塚遺跡第8次調査出土遺物2

V. 今泉遺跡第9次調査

図版21 (1) 今泉遺跡第9次調査北区全景 (南東上空から)

(2) 今泉遺跡第9次調査南区全景 (南西上空から)

図版22 (1) 南区北東隅土層 (南西から)

(2) SB 25完掘状況 (南東上空から)

(3) SB 25P 1土層 (南東から)

(4) SB 25P 2土層 (南東から)

(5) SB 25P 4土層 (南西から)

(6) SB 25P 5土層 (南西から)

(7) SB 25P 7土層 (北東から)

(8) SD 18土層 (北東から)

図版23 (1) S I 20硬化面検出状況 (南から)

(2) S I 20焼土検出状況 (南西から)

(3) S I 20完掘状況 (北東から)

(4) SK 1完掘状況 (南西から)

(5) 今泉遺跡第9次調査出土遺物1

図版24 今泉遺跡第9次調査出土遺物2

I. はじめに

1. 令和3～5年度の調査の経過

本書に掲載した発掘調査は、主要地方道久留米柳川線久留米工区道路改良事業に伴う事前の発掘調査である。主要地方道久留米柳川線（県道23号）の混雑を緩和するべく、上鶴橋から追分交差点に至るバイパス道路を整備する改良事業は、福岡県久留米県土整備事務所を事業者として実施されている。事前の発掘調査は久留米市文化財保護課によって、第1表のとおり平成30年（2018）度から実施している。発掘調査に至る経緯の詳細は『安武遺跡群1』（久留米市文化財調査報告書第424集、令和3年）に、令和2年度までの調査の経過は『安武遺跡群1』と『安武遺跡群2』（久留米市文化財調査報告書第439集、令和5年）に掲載したので参照頂きたい。ここでは、本書に掲載した令和3～5年度の発掘調査と整理作業、および報告書作成の経過について述べる。

令和3年度は、試掘確認調査と整理作業、今泉遺跡第8次調査を実施した。事業者と久留米市長は令和3年5月25日付で「令和3年度埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結した上で、整理作業は6月1日から令和4年（2022）3月14日まで、西町文化財整理事務所で行った。試掘確認調査は4月27日と10月19日に行い、安武町安武本1460-1で遺構を確認した。この成果と10月28日の協議を元に、今泉遺跡第8次調査を11月22日から令和4年1月25日まで実施した。

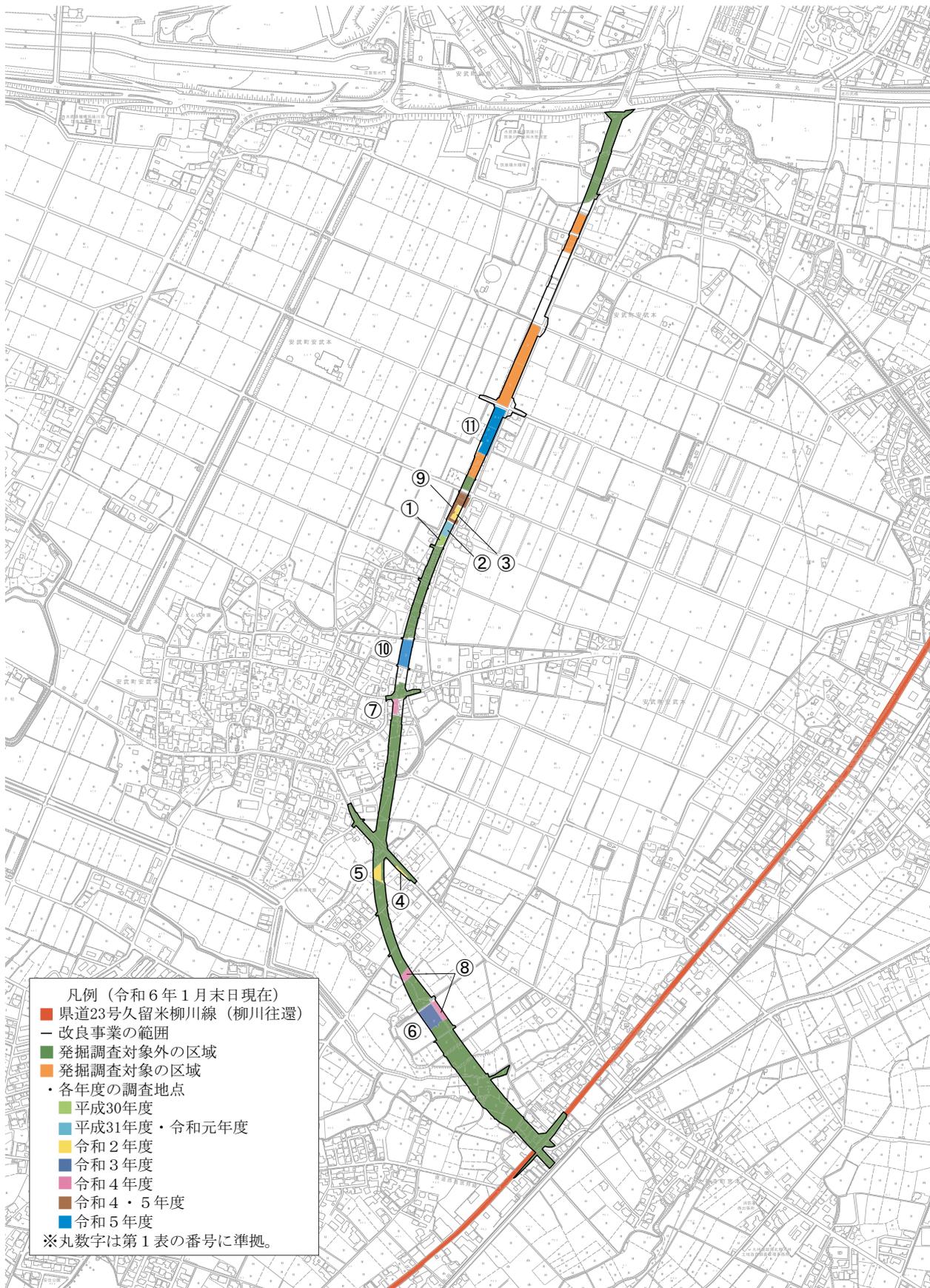
令和4年度は、試掘確認調査と念仏塚遺跡第8次調査、今泉遺跡第9次調査、安武三反野遺跡第7次調査、整理作業、そして報告書作成を実施した。事業者と久留米市長は令和4年5月27日付で「令和4年度安武遺跡群発掘調査委託契約書」を締結した上で、試掘確認調査は6月9・10・

第1表 安武遺跡群発掘調査一覧

番号	調査年度	調査名	遺跡略記号	調査番号	調査期間	調査面積	担当者	久留米市文化財調査報告書
①	H30	安武三反野遺跡第4次調査	Y S T - 0 0 4	201808	20190205～20190222	241㎡	西 拓巳	第424集
②	H31 R元	安武三反野遺跡第5次調査	Y S T - 0 0 5	201902	20190415～20200224	389㎡	西 拓巳	第439集
③	R 2	安武三反野遺跡第6次調査	Y S T - 0 0 6	202002	20200520～20201104	265㎡	江頭俊介	第439集
④	R 2	今泉遺跡第6次調査	I M I - 0 0 6	202004	20200622～20200717	45㎡	大隈彩未	第424集
⑤	R 2	今泉遺跡第7次調査	I M I - 0 0 7	202006	20201027～20201117	160㎡	江頭俊介	第424集
⑥	R 3	今泉遺跡第8次調査	I M I - 0 0 8	202115	20211122～20220125	995㎡	西 拓巳	本書
⑦	R 4	念仏塚遺跡第8次調査	N N B - 0 0 8	202206	20220704～20220729	239㎡	西 拓巳	本書
⑧	R 4	今泉遺跡第9次調査	I M I - 0 0 9	202213	20221111～20221226	611㎡	西 拓巳	本書
⑨	R 4 R 5	安武三反野遺跡第7次調査	Y S T - 0 0 7	202214	20230110～20230526	705㎡	西 拓巳	未報告
⑩	R 5	念仏塚遺跡第9次調査	N N B - 0 0 9	202306	20230605～20231113	853㎡	西 拓巳	未報告
⑪	R 5	安武三反野遺跡第8次調査	Y S T - 0 0 8	202313	20231113～調査中	818㎡	西 拓巳	未報告

※令和6年1月18日現在

I. はじめに



第1図 主要地方道久留米柳川線久留米工区道路改良事業位置図 (1/10,000)

16・17日と10月19・25日、令和5年（2023）1月16日に行い、事業地の発掘調査対象と調査対象外の範囲を確定した。念仏塚遺跡第8次調査は7月4日から7月26日まで、今泉遺跡第9次調査は11月11日から12月26日まで、安武三反野遺跡第7次調査は令和5年1月10日から実施した。整理作業と報告書作成は、令和4年6月1日から令和5年3月23日まで西町文化財整理事務所と久留米市埋蔵文化財センター、久留米文化財収蔵館で行い、平成31年度から令和2年度までの調査成果を収めた『安武遺跡群2』を2月28日に刊行した。

令和5年度は、安武三反野遺跡第7・8次調査と念仏塚遺跡第9次調査、試掘確認調査、整理作業、そして報告書作成を実施した。事業者と久留米市長は令和5年4月3日付で「令和5年度安武遺跡群発掘調査委託契約書」を締結した上で、安武三反野遺跡第7次調査は5月26日まで、念仏塚遺跡第9次調査は6月5日から11月13日まで実施した。さらに、安武三反野遺跡第8次調査を11月13日から開始し、令和6年1月末日現在も実施中である。試掘確認調査は11月7日と12月14日に行い、事業地の中央部と北部で発掘調査対象と調査対象外の範囲を確定した。整理作業と報告書作成は、令和5年4月3日から令和6年（2024）2月29日まで西町文化財整理事務所と久留米市埋蔵文化財センターで行い、令和3・4年度の調査成果を収めた本書を刊行した。

2. 調査の体制

令和3年度（試掘確認調査、整理作業、今泉遺跡第8次調査）

調査委託：福岡県久留米県土整備事務所

所 長：大隈 徹浩

副 所 長：山田 光春

道路建設課

課 長：宮地 伊織

建設第二係長：中島 伸二

技 師：坂井 浩平

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：井上 謙介

調査総括：久留米市

市民文化部

部 長：竹村 政高

次 長：深堀 尚子

文化財保護課

課 長：水島 秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼主査：白木 守、丸林 禎彦

主 査：水原 道範

事務主査：小澤 太郎、江島 伸彦

事前確認担当：熊代 昌之

庶務担当：市村久美子

箔谷 綾（任期付職員）

発掘調査担当：西 拓巳

整理担当：江頭 俊介

I. はじめに

令和4年度（試掘確認調査、念仏塚遺跡第8次調査、今泉遺跡第9次調査、安武三反野遺跡第7次調査、整理作業、報告書作成）

調査委託：福岡県久留米県土整備事務所

所 長：喜多島礼和

副 所 長：山田 光春

道路建設課

課 長：宮地 伊織

建設第二係長：松岡 晃

技 師：片岡 範夫

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：井上 謙介

調査総括：久留米市

市民文化部

部 長：竹村 政高

次 長：深堀 尚子

文化財保護課

課 長：水島 秀雄

課長補佐：田中 健二

課長補佐兼主査：白木 守、丸林 禎彦

主 査：小澤 太郎

事務主査：江島 伸彦

事前確認担当：熊代 昌之、小川原 励

庶務担当：本田 岳秋、辻 貴子

発掘調査・整理・報告書作成担当：西 拓巳

整理担当（文化財資料整理員）：今村 理恵、宮崎 彩香

令和5年度（試掘確認調査、安武三反野遺跡第7・8次調査、念仏塚遺跡第9次調査、整理作業、報告書作成）

調査委託：福岡県久留米県土整備事務所

所 長：山口 甲秀

副 所 長：平井 信之

道路建設課

課 長：坂井健太郎

建設第二係長：口羽 光徳

技 師：片岡 範夫

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：井上 謙介

調査総括：久留米市

市民文化部

部 長：竹村 政高

次 長：古賀 裕二

文化財保護課

課 長：井上 英俊

課長補佐：甲斐田邦彦

課長補佐兼主査：白木 守、丸林 禎彦

主 査：小澤 太郎

事務主査：江島 伸彦

事前確認担当：小澤 太郎、本田 岳秋

小川原 励

庶務担当：本田 岳秋、小川 和範

発掘調査・整理・報告書作成担当：西 拓巳

整理担当（文化財資料整理員）：今村 理恵、江藤 玲子

発掘作業員（会計年度任用職員）

令和3年度

案納 哲夫、池田 隆司、井上 吉清、加藤 登、蒲池 稔、川野 洋之、國武 三歳
久保田英嗣、合戸 喬一、古賀 晴美、原 博文、原 学、原口 貞子、平田 広之
日比生 勝、福田 隆利、舟越 朝菜、本荘 郁子、宮原 眞男、村田 雅巳、横山 満浩

令和4年度

青木佐智子、池田 隆司、石橋 康子、井上 吉清、加藤 登、鐘ヶ江 清、蒲池 稔
川野 洋之、川原 光貴、北島 京子、久保田英嗣、合戸 喬一、古賀 晴美、進上 裕永
高松 登、永野 高弘、野村 泰夫、原 学、原口 貞子、平田 広之、日比生 勝
舟越 朝菜、本荘 郁子、諸藤 稔、山口 誠也

令和5年度

加藤 登、蒲池 稔、川野 洋之、北島 京子、合戸 喬一、古賀 晴美、清水 一則
高松 登、永野 高弘、野村 泰夫、原 学、原口 貞子、日比生 勝、舟越 朝菜
本荘 郁子、諸藤 稔

発掘整理作業員（会計年度任用職員）

令和3年度

田中千佐子、溝上 直子

令和4年度

江口 里織、山元 博子、湯川 琴美、横井 理絵、吉武 大輝

令和5年度

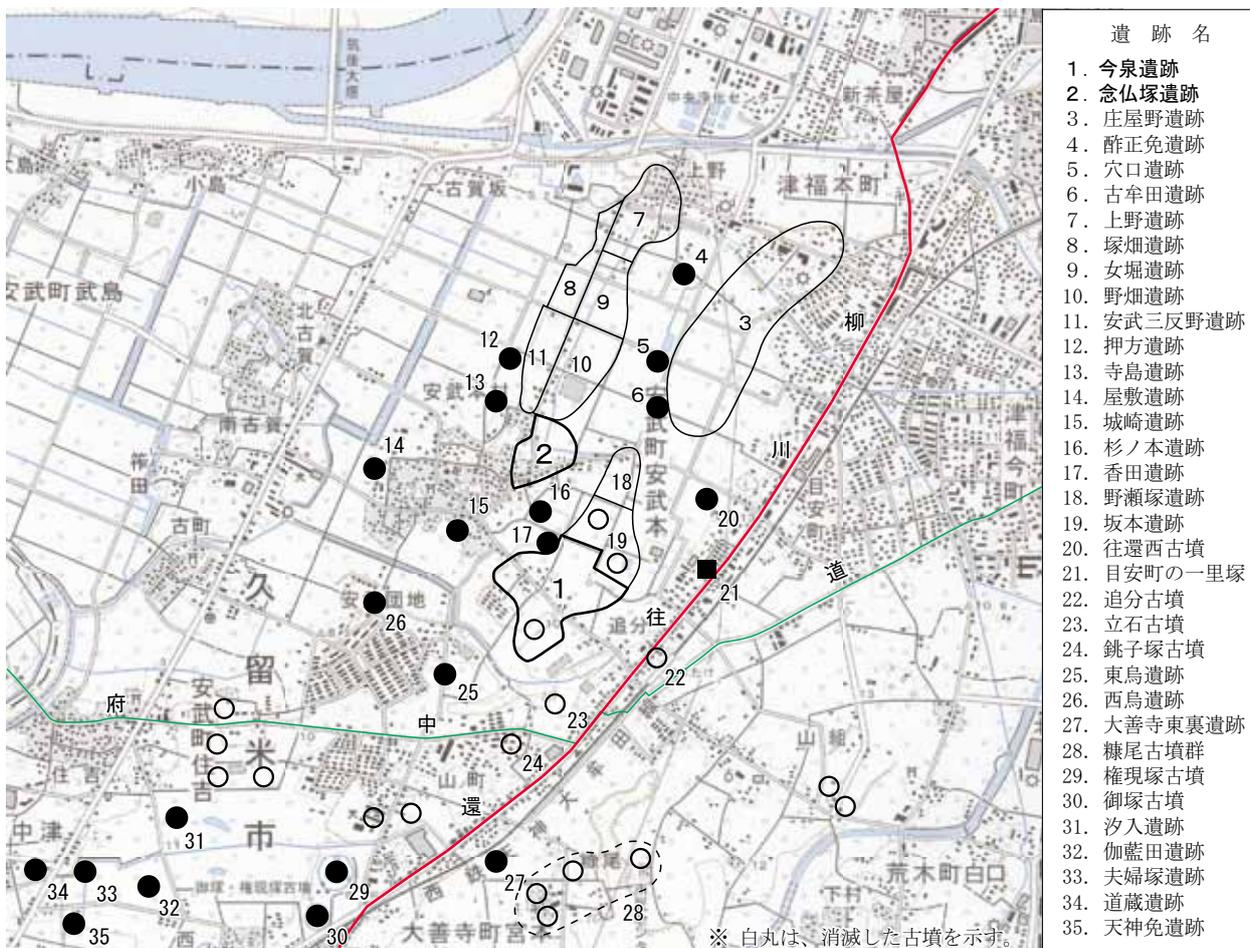
田中千佐子、山口久美子、山元 博子

II. 位置と環境

久留米市は筑紫平野の中心部に位置し、「筑紫次郎」の異名を持つ筑後川の中流域に面する。筑後川は宝満川と合流して流れを南西へと変え、その左岸には筑後川や金丸川、広川によって形成された氾濫平野が突き出る。氾濫平野の東側には、津福本町から大善寺町に延びる標高10m前後の台地が面する。安武三反野遺跡や今泉遺跡を含む安武遺跡群はこの台地上に立地し、今泉遺跡第8・9次調査地点は標高約10mに、念仏塚遺跡第8次調査地点は標高約9mに位置する。

周辺での最古の遺物は、庄屋野遺跡や穴口遺跡で出土した細石刃核や細石刃、城崎遺跡で出土した彫器といった旧石器である。いずれも後世の遺構への混入品だが、台地上が生業の舞台として利用されていたことを示している。

縄文時代の遺構として、落とし穴状遺構が挙げられる。念仏塚遺跡や道蔵遺跡で検出されたほか、庄屋野遺跡と穴口遺跡、古牟田遺跡、野畑遺跡、野瀬塚遺跡、今泉遺跡、坂本遺跡では列状に配置された様子が確認でき、台地上を舞台に狩猟が行われていたと指摘されている。ただし、落とし穴状遺構以外の遺構は確認されておらず、時期が明確な遺物は庄屋野遺跡で落とし穴状遺構や後世の遺構から出土した、早期の押型文土器や後期・晩期の土器の破片のみである。



第2図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

弥生時代に入ると、台地上に集落や墓域が分布する。汐入遺跡で早期の土器が出土し、集落の存在が示唆される。前期には、塚畑遺跡や野畑遺跡、安武三反野遺跡、城崎遺跡、東鳥遺跡、汐入遺跡、道蔵遺跡で平面円形の竪穴建物や貯蔵穴などの遺構が検出された。特に今泉遺跡では、前期末の竪穴住居20基と土坑23基が馬蹄状に配置される大規模な集落が見つかった。同時期の墓域は、酢正免遺跡や安武三反野遺跡、汐入遺跡で壺棺墓や木棺墓、土壙墓が見つっている。

中期初頭には、庄屋野遺跡で台地北端を廻る大溝が検出され、環濠集落の存在が示唆される。中期前半には酢正免遺跡や安武三反野遺跡、道蔵遺跡で土坑群が検出されたほか、東鳥遺跡では22基の竪穴住居と16基の土坑からなる集落が見つかった。中期後半には、道蔵遺跡で溝や土坑が検出されており、集落の存在を示す。また、この時期には北部九州で甕棺墓が盛行するが、安武三反野遺跡では中期中頃から後期前葉にかけての甕棺墓を主体とした列埋葬が確認された。汐入遺跡でも合計で27基の甕棺墓が見つかり、集落周辺の台地周縁部を囲む様相が指摘されている。

後期には、塚畑遺跡と道蔵遺跡で環濠を伴う集落が営まれる。道蔵遺跡は、韓式土器や青銅製ヤリガンナ、銅鏃、さらに大正3年(1914)に出土したと伝わる広形銅戈などから、この地域の拠点集落と考えられている。また、上野遺跡と庄屋野遺跡、押方遺跡で後期の掘立柱建物や竪穴建物などが検出され、塚畑遺跡周辺の集落の様相が窺える。安武三反野遺跡では、大溝と多数の掘立柱建物群に加え、石蓋土壙墓と土壙墓が検出されており、裏面に「+」と刻まれた石蓋が目に見える。

この間、野畑遺跡では前期末から終末期にかけて掘立柱建物や土坑が分布し、塚畑遺跡や安武三反野遺跡と一連の集落が存在したと考えられている。大善寺東裏遺跡では、箱式石棺墓が検出されており、台地南東部にも集落の存在が想定できる。筑後川流域の貝塚の中でも最上流に位置する屋敷遺跡は、ウチガキを主体とする小規模な貝塚として知られる。

古墳時代には、「イロハ塚」と呼ばれるほど多数の古墳が築造されたが、墳丘が現存する往還西古墳や、戦前に発掘調査が行われた追分古墳、発掘調査で6世紀の古墳群であることが明らかになった糠尾古墳群を除いて、その大半が調査を経ずに消滅した。事業地周辺にも、今泉古墳と立石古墳があったとされ、前者は石材が安武本納骨堂の手洗石に転用されたと伝わる。また、酢正免遺跡や坂本遺跡で見つかった円形に巡る溝も、削平された古墳、特に後者は坂本1号墳に伴う周溝という指摘がある。古墳群の中心となる首長墓は、台地の南部に位置する国史跡の御塚古墳(中期後半)、現存しない銚子塚古墳(後期初頭)、御塚古墳に隣接する同じく国史跡の権現塚古墳(後期前半)が挙げられ、『日本書紀』に登場する水沼君の系列墓と考えられている。同時期の集落遺構は、道蔵遺跡で古墳時代初頭の竪穴建物が検出されたほか、城崎遺跡の5世紀前葉～中頃の掘立柱建物と土坑群、西鳥遺跡の5世紀の井戸と土坑、東鳥遺跡の6世紀後半の溝と井戸が挙げられる。さらに、押方遺跡と安武三反野遺跡、夫婦塚遺跡、天神免遺跡では、後期の建物跡や井戸、土坑が確認されており、御塚・権現塚古墳の築造時期に集落が分布した様相が窺える。

『日本書紀』卷第二十九には、天武天皇七年(678)12月に筑紫国で大地震が起きたという記述がある。この「筑紫地震」は、耳納山地北麓の水縄断層が活動したことで起きたとされており、

II. 位置と環境

久留米市内では筑紫地震に伴うとみられる地震痕跡が発見されている。安武町一帯でも、庄屋野遺跡や女堀遺跡、安武三反野遺跡、城崎遺跡、東鳥遺跡、西鳥遺跡で地割れ痕跡や噴砂痕が検出され、広範囲に筑紫地震の影響があった事を物語る。

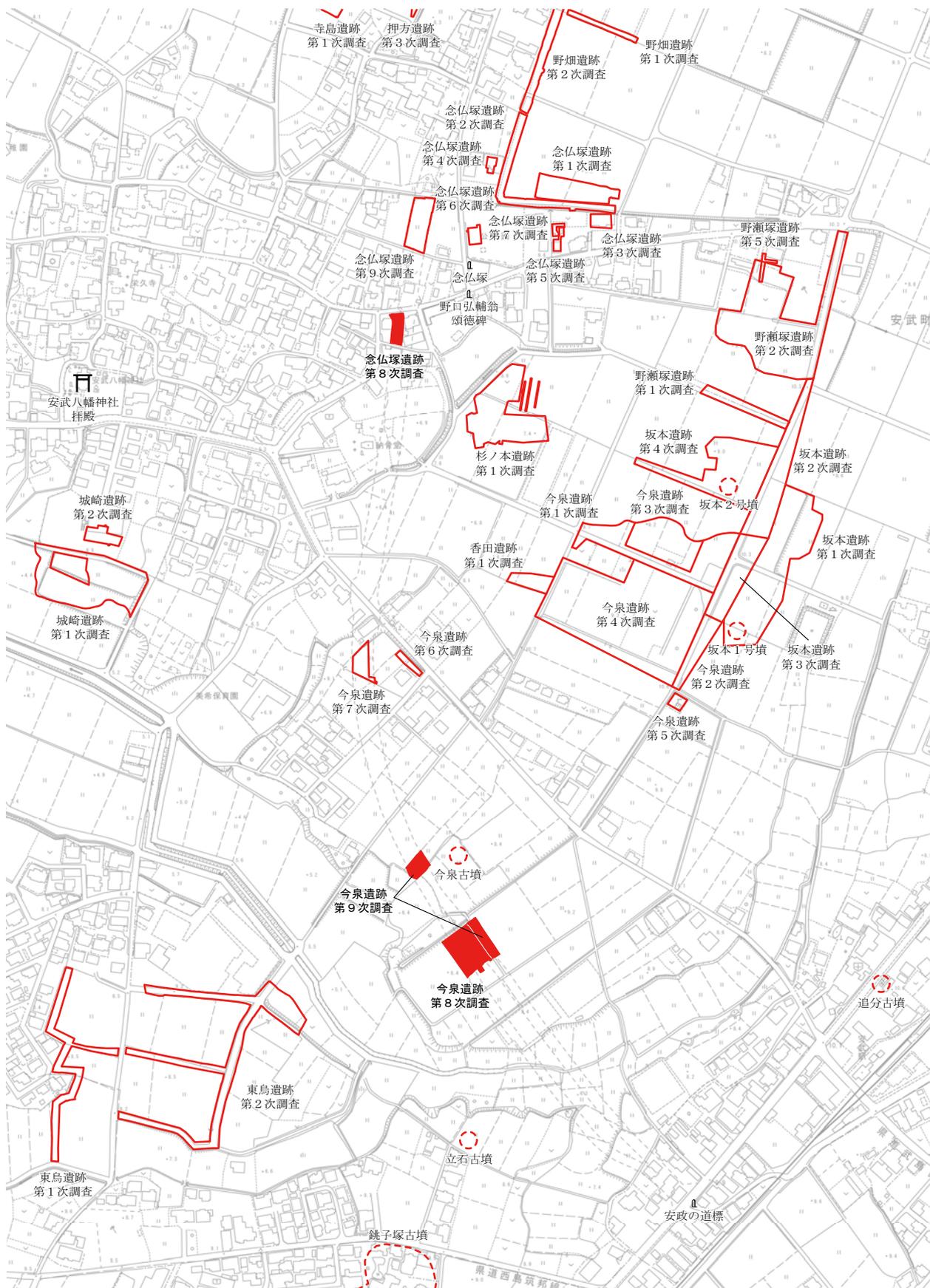
古代の安武町一帯は、『和名類聚抄』の三潯郡に相当し、8郷の一つである田家郷に比定されている。道蔵遺跡では正方位に配置された8世紀後半～9世紀の建物群と8世紀末～9世紀後半の道路遺構が検出され、越州窯系青磁碗や緑釉陶器、陶硯、墨書土器が出土した。市指定史跡である野瀬塚遺跡では、8世紀～9世紀の48棟の建物群が検出され、二彩陶器や刻書土器、墨書土器が出土した。総柱建物を伴う建物群や文字を書いた土器は、野畑遺跡や念仏塚遺跡、今泉遺跡にもあり、これらの遺構と遺物は、田家郷に関連する官衙的建物と想定されている。汐入遺跡では、床面積70㎡以上の大形建物や総柱建物を含む7世紀後葉～9世紀の建物群が検出されており、緑釉陶器や円面硯が出土した。公的な管理・収蔵施設と官人の居宅とみられ、8世紀以降には鍛冶に関する施設の存在も考えられている。8世紀～10世紀には、庄屋野遺跡や天神免遺跡で館跡、酢正免遺跡や寺島遺跡、杉ノ本遺跡、夫婦塚遺跡、伽藍田遺跡で集落遺構が見つかるなど、広範囲に遺構が分布する。

中世には、東寺が所有した最大の荘園である三潯荘が位置し、高良山麓の府中から肥前へ通じる府中道も走ることからも、筑後川沿いの水運・陸運上の要所であったことが想定される。寺島遺跡や杉ノ本遺跡、城崎遺跡、今泉遺跡、汐入遺跡、道蔵遺跡で検出された区画溝や建物跡、井戸、土壇墓などは、古代に引き続き、中世にも屋敷や集落が点在した光景を示唆する。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの翌年、筑後国主となった田中吉政は柳川城へ入城した。吉政は柳川城と支城である久留米城を結ぶ街道として、慶長7年（1602）に柳川往還を整備した。柳川往還沿いに位置する目安町の一里塚（市指定史跡）は、元禄年間（1688～1703）の『久留米藩領図』にも安武本村と共に登場する。田中氏改易後の元和7年（1621）に筑後国北部に入った有馬氏も、御免地として安武本村への移住を奨励したことで、安武本村は農村であると同時に、主要道路が交わる宿場町として栄えた。近世の様相を示す遺構として、庄屋野遺跡の土坑や、杉ノ本遺跡や坂本遺跡の溜池や水路とみられる溝、野畑遺跡の区画溝が挙げられる。

なお、念仏塚遺跡にある念仏塚は、寛永年間（1624～1643）に当地にあった長方寺で、念仏を唱えながら死んだ尼僧を弔った石碑という伝承が残る。また、今泉遺跡には円福寺という字があり、元禄年間（1688～1704）造と伝わる阿弥陀如来像（個人蔵）の伝来や、15世紀後半の環濠が検出されていることから、中世末から江戸時代に寺院があった可能性がある。

廃藩後、藩主有馬家の庭方だった平川嘉蔵をはじめ数人の旧藩士が目安町に移住し、目安町一帯の開拓を行った。安武本村は明治22年（1889）に武島村、住吉村と合併し、安武村が成立したが、水源に乏しいことから、耕作地のうち水田が4,210反、畑地が4,015反を占めた。第4代村長の野口弘輔は代々安武村の庄屋だった野口家の出身で、酒造業を営みつつ明治31年（1898）には土地改良事業を設計するなど、村の発展に尽力した。土地改良事業は大正2年（1913）から7年かけて行われ、水田は2倍以上の9,535反に増加し、今日の安武町に残る風景が形成された。こうした野口弘輔の功績は、大正8年（1919）に建てられた頌徳碑に記録されている。



第3図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/5,000)

Ⅲ. 今泉遺跡第8次調査

1. 調査の目的と経過

今泉遺跡第8次調査は、試掘確認調査で検出した遺構の分布と性格の把握、特に弥生時代の遺構と遺物を把握するために実施した。なお、対象地の北東辺は既に麦の作付けが始まっていたため、今回の調査では除外し、翌年に第9次調査として実施した。

令和3年11月22日に調査区の縄張りを行い、祝日を挟んだ11月24日から重機で表土剥ぎを開始した。地表下約0.2mで遺構面に達し、30日まで表土剥ぎを実施した。11月25日から現場作業員を投入して遺構検出を始め、12月1日から遺構掘り下げと測量、写真撮影などの記録作業に入った。全景の撮影は、令和4年1月14日にドローンを用いて行った。落とし穴状遺構の断割など追加の調査と並行して、1月17日に重機で調査区を南東方向に拡張したが、谷状の段落ちが続き遺構を確認できないため、そのまま調査区の埋め戻しを開始した。1月22日に調査区の埋め戻しを完了し、1月25日に調査器材を撤収して、現地での発掘調査を完了した。対象面積約1,600㎡のうち、調査面積は水路の法面や畔、段落ちなどを除いた955㎡である。

2. 調査の記録

(1) 基本層序

調査地点の現況は水田である。調査区北部（第10図）では、地表を①黄色土ブロックや礫を含む黄灰色の耕作土が0.1m覆い、その直下に②黄色土ブロックや礫、鉄分を含む灰色の水田床土が数cm見られる。調査区の大半では、この水田床土を経た地表下-0.15～-0.2m、標高8.65～8.7mで地山に至る。調査区の南東辺では、水田床土と地山の間に、谷状の地形に伴う黒色土の層を最大0.6m確認し、最も深い場所で地表下-0.8m、標高7.9mで地山に至った。

遺構は地山で検出した。地山は、標高7.25～8.55mから上層が黄色や明黄褐色の粘質土、下層が鉄分や礫を含む灰黄色砂質土である。いずれも締まりの弱い、比較的柔らかい地山だった。

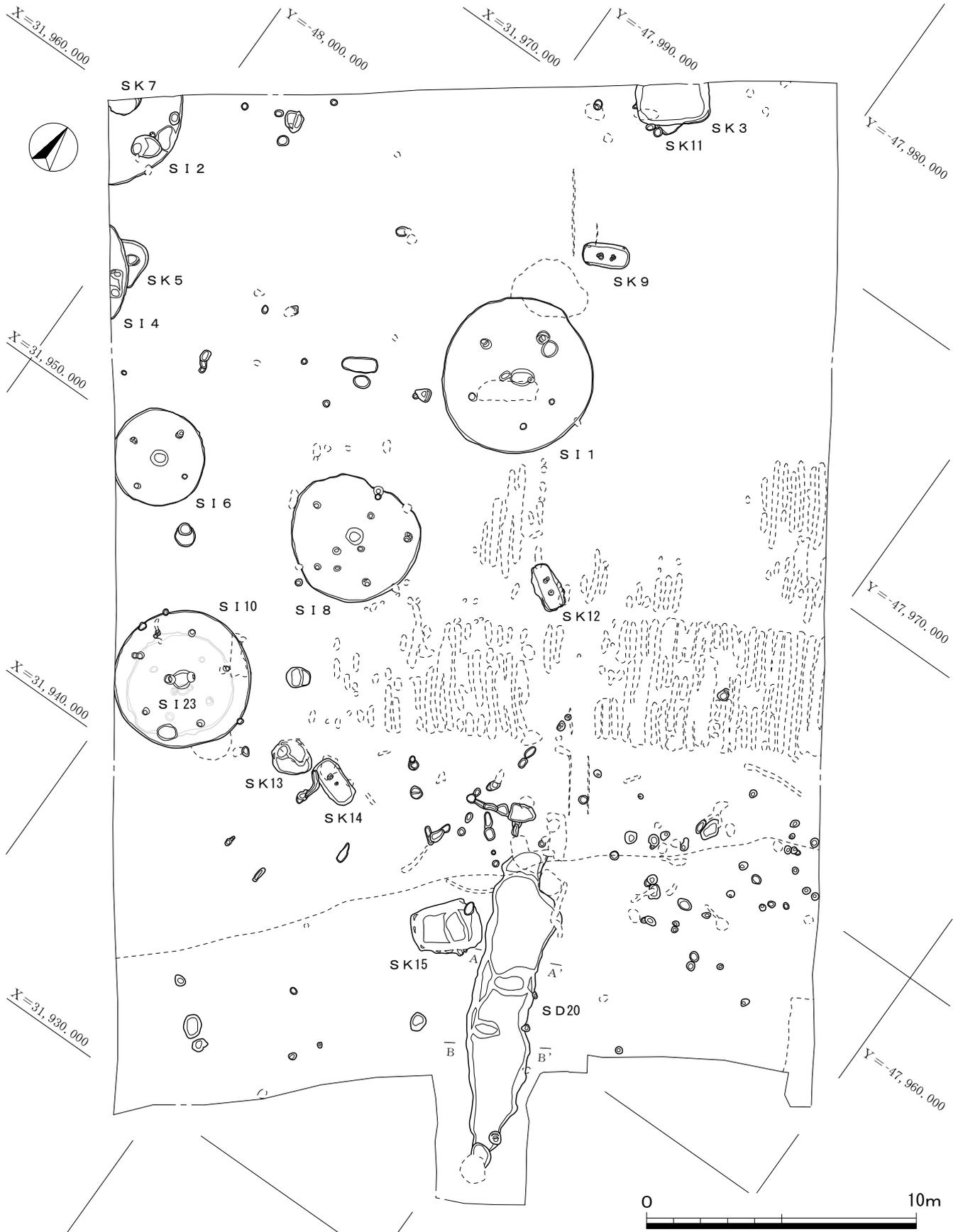
(2) 検出遺構

遺構密度は低く、主な遺構は溝1条と竪穴建物7基、土坑5基、落とし穴状遺構4基である。

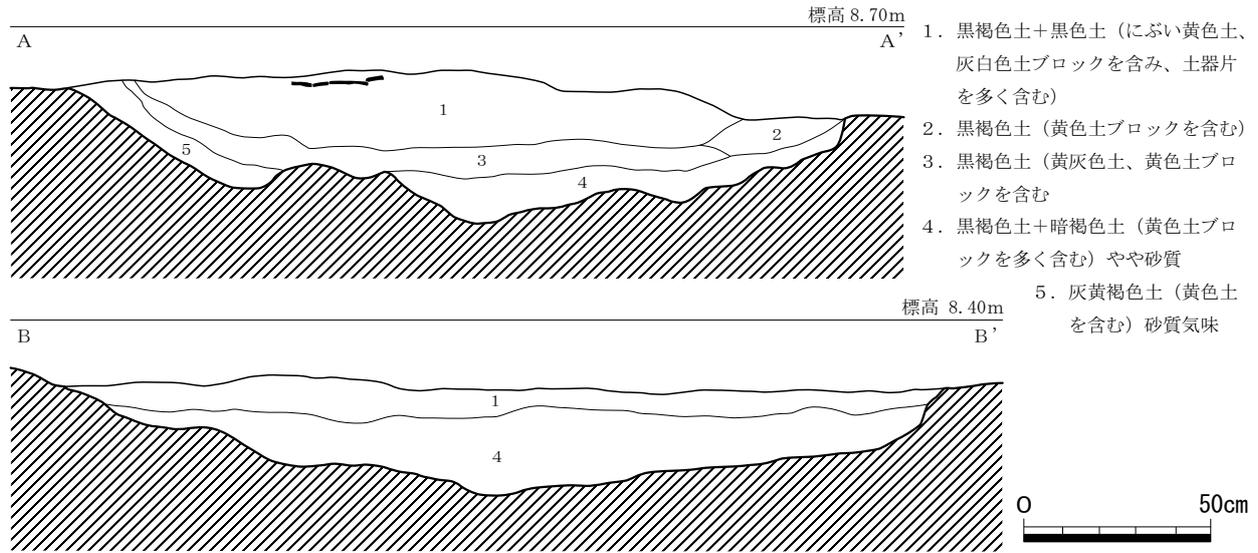
溝

S D 20（第4・5図、図版3）

調査区南部中央で検出した溝である。遺構の南端は攪乱やピットが後出する。残存長は11.4mで、主軸はN-25°-W、上端幅は最大で2.58m、下端幅は最大で2.10mを測る。底面は段や複数のピットを有し、段落ちに合わせて南東に向かって深くなる傾向にある。深さは最大で0.56mを測る。埋土は第4図のとおり黒褐色土を主体とし、暗褐色土や灰黄褐色土、黄色土ブロックを含む。遺物は、弥生土器の甕に加えて、土師器の坏や盤、高坏、壺、須恵器の坏蓋や坏、高坏、碗、壺、甕、平瓶、横瓶、甕など、黒曜石や安山岩、赤チャート、軽石などの破片、鉄製品、ガラス小玉が出土した。



第4図 今泉遺跡第8次調査遺構配置図 (1/200)



第5図 S D20土層図 (1/20)

竪穴建物

S I 1 (第6図、図版3)

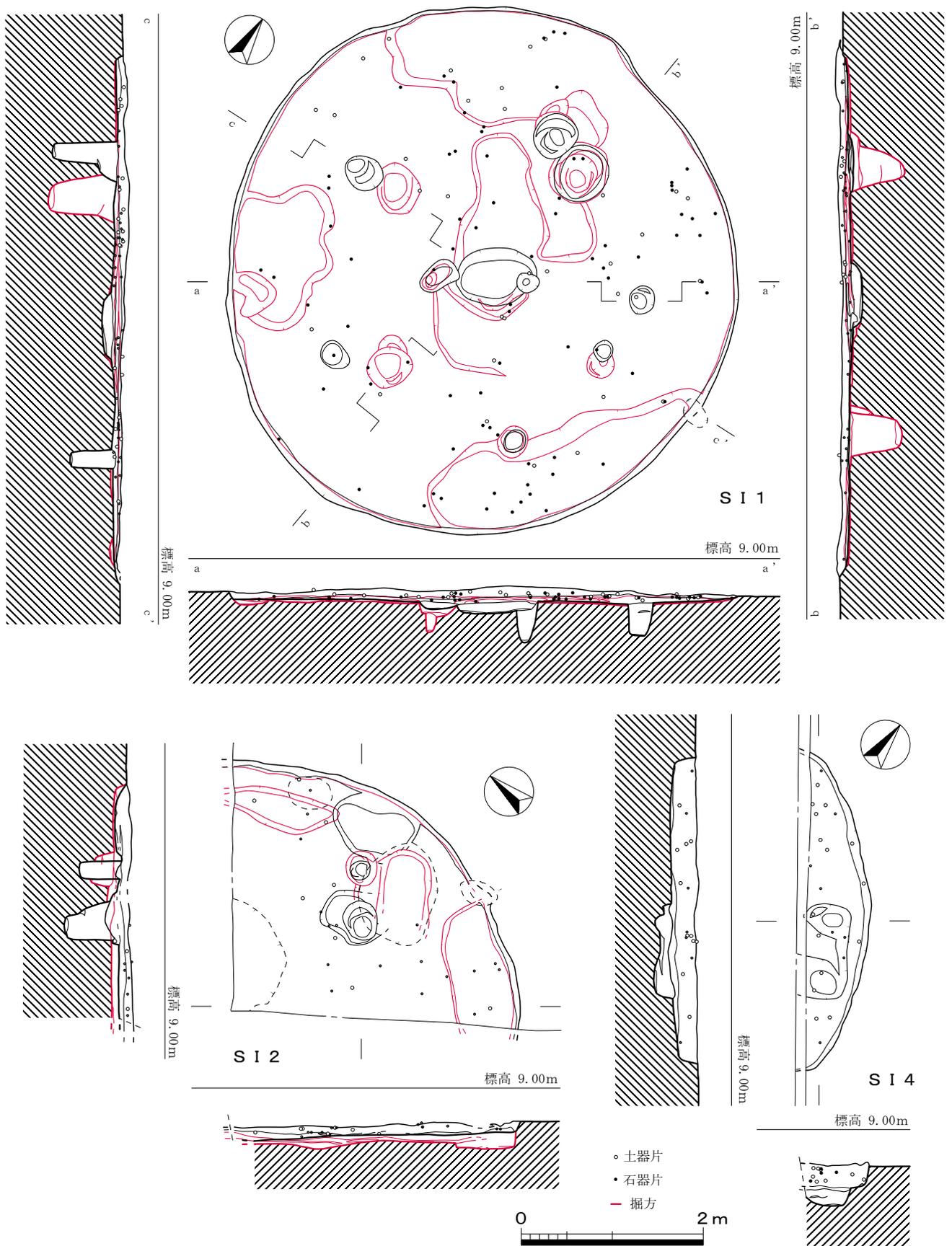
調査区中央部北寄りで検出した、試掘調査で確認した竪穴建物である。円形の平面を有し、直径5.55~5.90mを測る。底面には硬化面があり、深さは硬化面までが最大で0.17m、掘方を含むと最大で0.24mを測る。柱穴は直径0.23~0.50m、深さ0.30~0.70mの5基と、硬化面の下で検出した直径0.39~0.78m、深さ0.32~0.73mの4基に二分され、明確な建て替えの痕跡を有する。建物の中央には、2基の小ピットを伴う直径0.64~0.88m、深さ0.14mのピットがあるが、焼土や炭化材は確認していない。埋土は黒褐色土で、黄橙色土ブロックや礫を含む。出土遺物は、弥生土器の甕や壺の破片と安山岩製の打製石鏃や石錐未成品、黒曜石や安山岩の石核と剥片がある。

S I 2 (第6図、図版3・4)

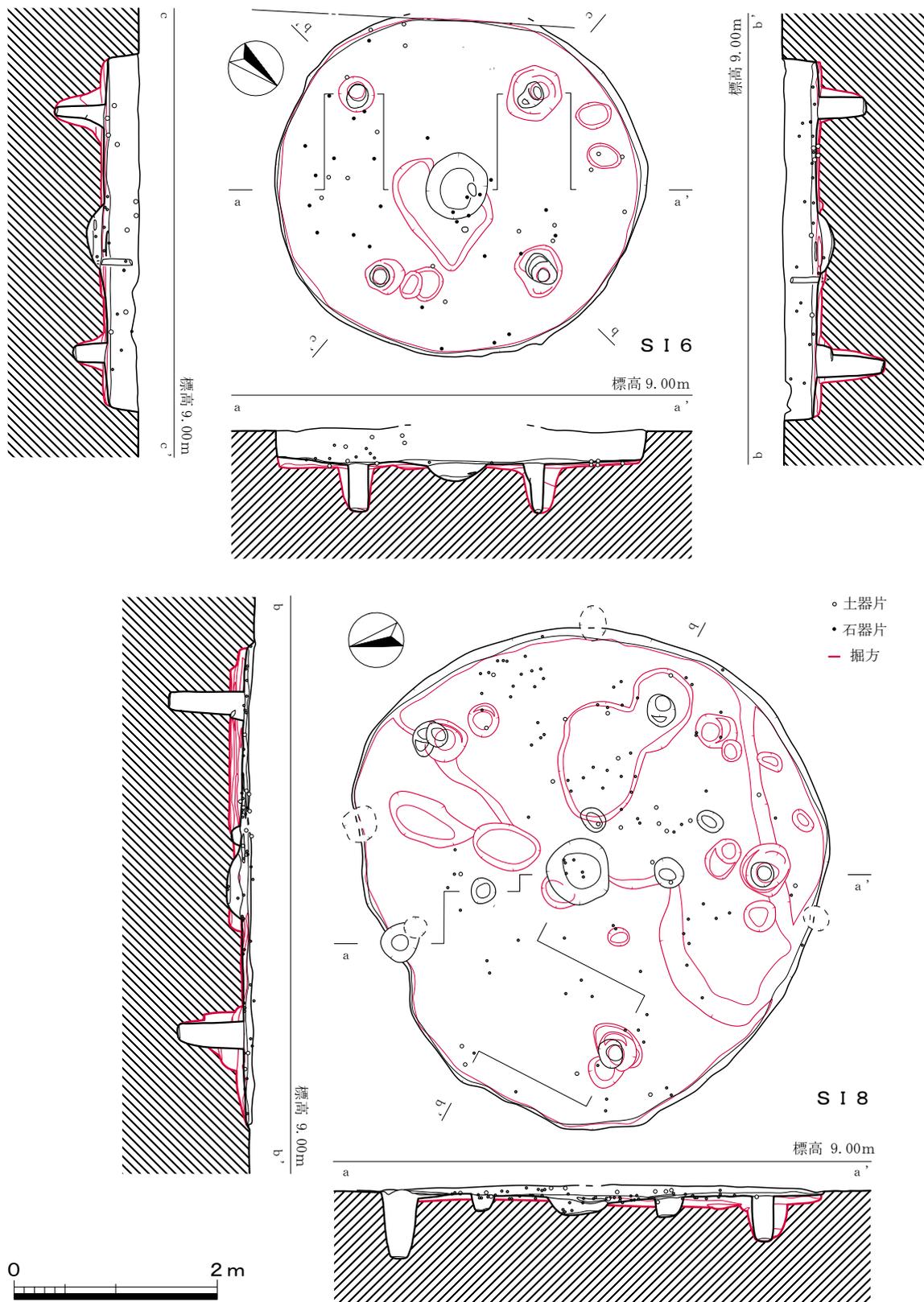
調査区北西隅で検出した竪穴建物である。遺構の大半は調査区外に及ぶが、円形の平面を有するとみられる。検出したのは東西2.97m、南北4.28mで、直径は5.4~5.6mに復元できる。底面には硬化面があり、深さは硬化面までが最大で0.23m、掘方を含むと最大で0.31mを測る。柱穴は、遺構の中央に直径0.20~0.23m、深さ0.47mの掘方を有する1基と、直径0.61~0.81m、深さ0.61mの1基がある。埋土は、灰白色土ブロックを含む褐色土である。遺物は、弥生土器の甕や壺の口縁部片に加えて、安山岩の石鏃未成品、黒曜石や安山岩の剥片が出土した。

S I 4 (第6図、図版4)

調査区北西部壁際で検出した竪穴建物である。遺構の大半は調査区外に及ぶが、円形の平面を有するとみられる。検出したのは長軸3.51m、短軸0.70mで、直径は4.9~5.0mに復元できる。硬化面は確認できず、底面までの深さは最大で0.31mを測る。底面には複数の段を有する深さ0.22mのピットがある。埋土は、灰褐色土と淡黄色土ブロックを含む暗褐色土である。出土遺物は、弥生土器の甕の破片や、黒曜石の石鏃、黒曜石や安山岩の剥片がある。



第6図 S I 1・2・4実測図 (1/60)



第7図 SI 6・8実測図 (1/60)

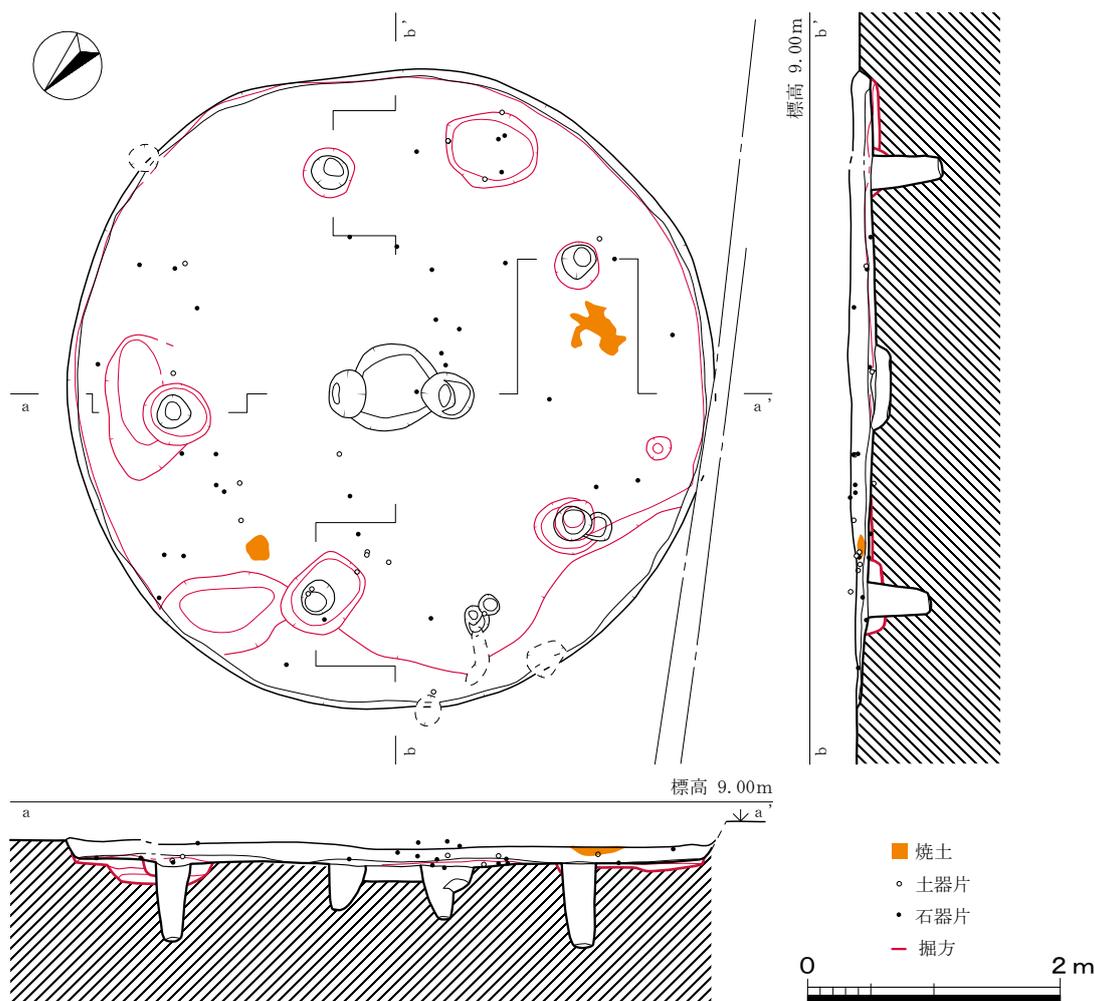
SI 6 (第7図、図版4)

調査区西部壁際で検出した竪穴建物である。遺構の一部が調査区外に及ぶが、明確に円形の平面

を有し、直径3.51～3.64mを測る。底面には硬化面があり、深さは硬化面までが最大で0.36m、掘方を含むと最大で0.40mを測る。柱穴は4基で、いずれも掘方を有する。柱穴は直径0.19～0.35m、深さ0.32～0.67mを測り、掘方は直径0.34～0.60m、深さ0.13～0.67mを測る。建物の中央には、円形のピットがあり、直径0.59～0.64m、深さ0.18mのピットを測る。ピットからは、台石の破片が出土した。埋土はにぶい黄褐色土で、黒褐色土やにぶい橙色土ブロック、黄色土ブロックを含む。遺物は、弥生土器の甕や壺の細片や、黒曜石と安山岩、花崗岩の剥片、台石の破片が出土したほか、木杭が硬化面に突き刺さって出土した。ただし、この木杭は硬化面に10cmのみ刺さっており、検出した箇所も柱穴と離れていることから、竪穴建物と同時期の遺物とは考えにくい。

S I 8 (第7図、図版4・5)

調査区中央部西寄りで見出した竪穴建物である。歪な円形の平面を有し、直径4.54～4.96mを測る。底面には硬化面があり、深さは硬化面までが最大で0.18m、掘方を含むと最大で0.40mを測る。柱穴は5基で、4基は掘方を有する。柱穴は直径0.21～0.34m、深さ0.45～0.74mを測り、掘方は直径0.33～0.56m、深さ0.21～0.41mを測る。このほか、2基の小ピットを伴う楕円形のピットがあり、直径0.40～0.66m、深さ0.18mを測る。なお、両脇の小ピットは中央のピットと柱穴の間の、



第8図 S I 10実測図 (1/60)

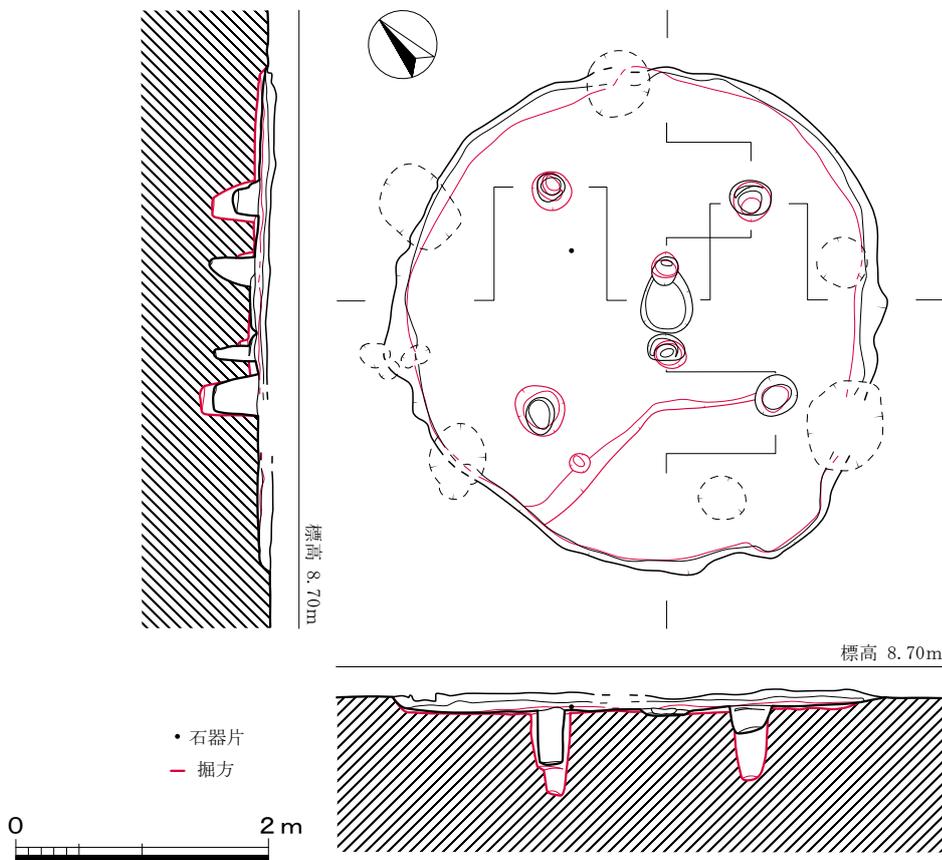
比較的離れた場所に位置する。硬化面までの埋土は黄色土を含む暗褐色土で、一部に黒褐色土を含む箇所があった。出土遺物は、弥生土器の甕の破片や黒曜石と安山岩の剥片、炭化材がある。

S I 10 (第8図、図版5)

調査区西部壁際で検出した竪穴建物である。S I 6と同じく遺構の一部が調査区外に及ぶが、円形の平面で、直径5.08~5.15mを測る。底面の一部には硬化面を有し、深さは硬化面までが最大で0.24m、掘方を含むと最大で0.21mを測る。柱穴は5基で、いずれも掘方を有する。柱穴は直径0.24~0.40m、深さ0.51~0.63mを測り、掘方は直径0.36~0.68m、深さ0.08~0.23mを測る。このほか、建物の中央には2基の小ピットを伴う楕円形のピットがあり、直径0.68~0.73m、深さ0.15mを測る。埋土は暗褐色土とにぶい黄橙色土が混じりあい、黄橙色土ブロックを含む。2ヶ所で焼土を検出したが、いずれも硬化面の直上ではなく埋土に混入したものである。遺物は、弥生土器の甕や壺の細片に加えて、黒曜石と安山岩、花崗岩の剥片、粘土塊、炭化材が出土した。

S I 23 (第9図、図版5)

調査区西部壁際、S I 10の底面で検出した竪穴建物である。当初、S I 10の掘方と誤認して掘削していたが、明瞭な円形の平面を有し、硬化面や柱穴なども検出したことから、別個の竪穴建物と判断した。円形の平面で、直径3.86~4.17mを測る。底面には硬化面を有し、深さは硬化面までが最大で0.15m、掘方を含むと最大で0.18mを測る。柱穴は4基で、いずれも掘方を有するが、掘り



第9図 S I 23実測図 (1/60)

直しの可能性もある。柱穴は直径0.21～0.34m、深さ0.21～0.46mを測り、掘方は直径0.29～0.43m、深さ0.37～0.72mを測る。建物の中央には、2基の小ピットを伴う楕円形のピットがあり、直径0.41～0.47m、深さ0.06mを測る。出土遺物は他の堅穴建物と比べて非常に少なく、被熱した丸礫と安山岩の剥片各1点のみである。

土坑

SK3 (第10図、図版5)

調査区北東部壁際で検出した土坑である。攪乱やピットが後出し、遺構の一部が調査区外に及ぶが、隅丸方形の平面を有する。長軸2.72m、短軸1.51mを測り、深さは最大で0.32mを測る。埋土は土層図のとおりで、黄色土ブロックや砂利を含む黄褐色土に、黒褐色土を含む。遺物は細片かつごく僅かで、弥生土器の壺の口縁部と頸部、器種不明の破片が各1点のみ出土した。

SK5 (第10図、図版6)

調査区北西部で検出した土坑である。SI4が後出し、本来の平面形は判然としないが、検出時の平面形は歪な楕円形に近い。検出したのは長軸1.77m、短軸1.06mで、土坑の中央に直径0.44～0.54mのピットを有する。ピットを含めた深さは0.55mを測る。出土遺物は、弥生土器の甕や壺の細片と、黒曜石や安山岩の剥片のみである。

SK7 (第10図、図版6)

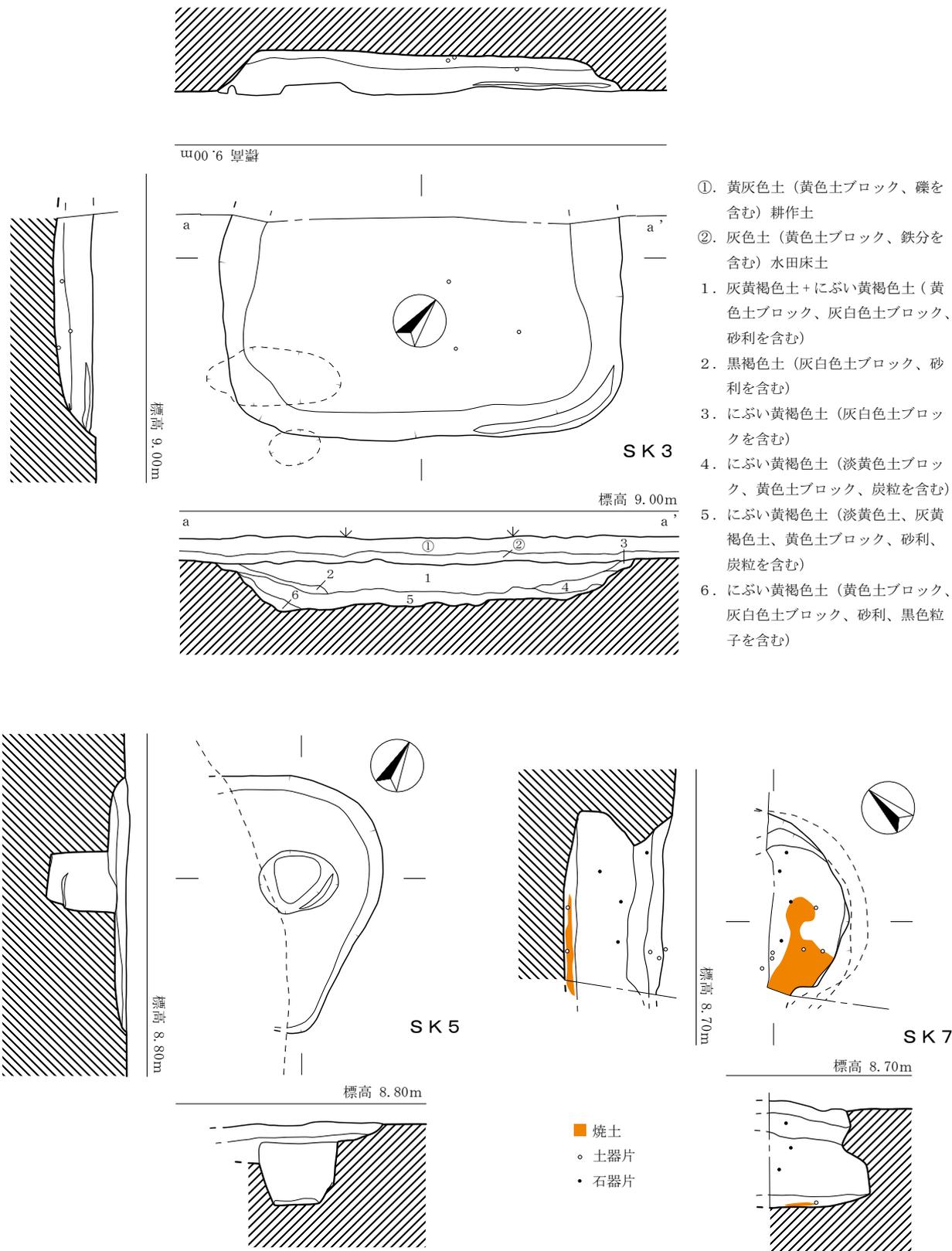
調査区西隅で検出した土坑である。当初、SI2の中央ピットまたは柱穴と想定して掘削したが、堅穴建物の柱穴としては明らかに法量が異なり、土層もSI4に後出する。また、上端より底面が大きいフラスコ状の断面を有することから、別個の土坑と判断した。遺構の大半が調査区外に及び、検出幅は上端で0.54～0.76m、底面で0.66～0.78mで、深さは最大で0.69mを測る。埋土はにぶい黄褐色土を主体とし、底面の約10cmには灰黄褐色土が堆積する。いずれも、黄橙色土ブロックと炭粒を含む。また、底面から約10cmに焼土が分布した。遺物は、弥生土器の甕や細片、安山岩や黒曜石の剥片、粘土塊が出土した。

SK13 (第11図、図版2)

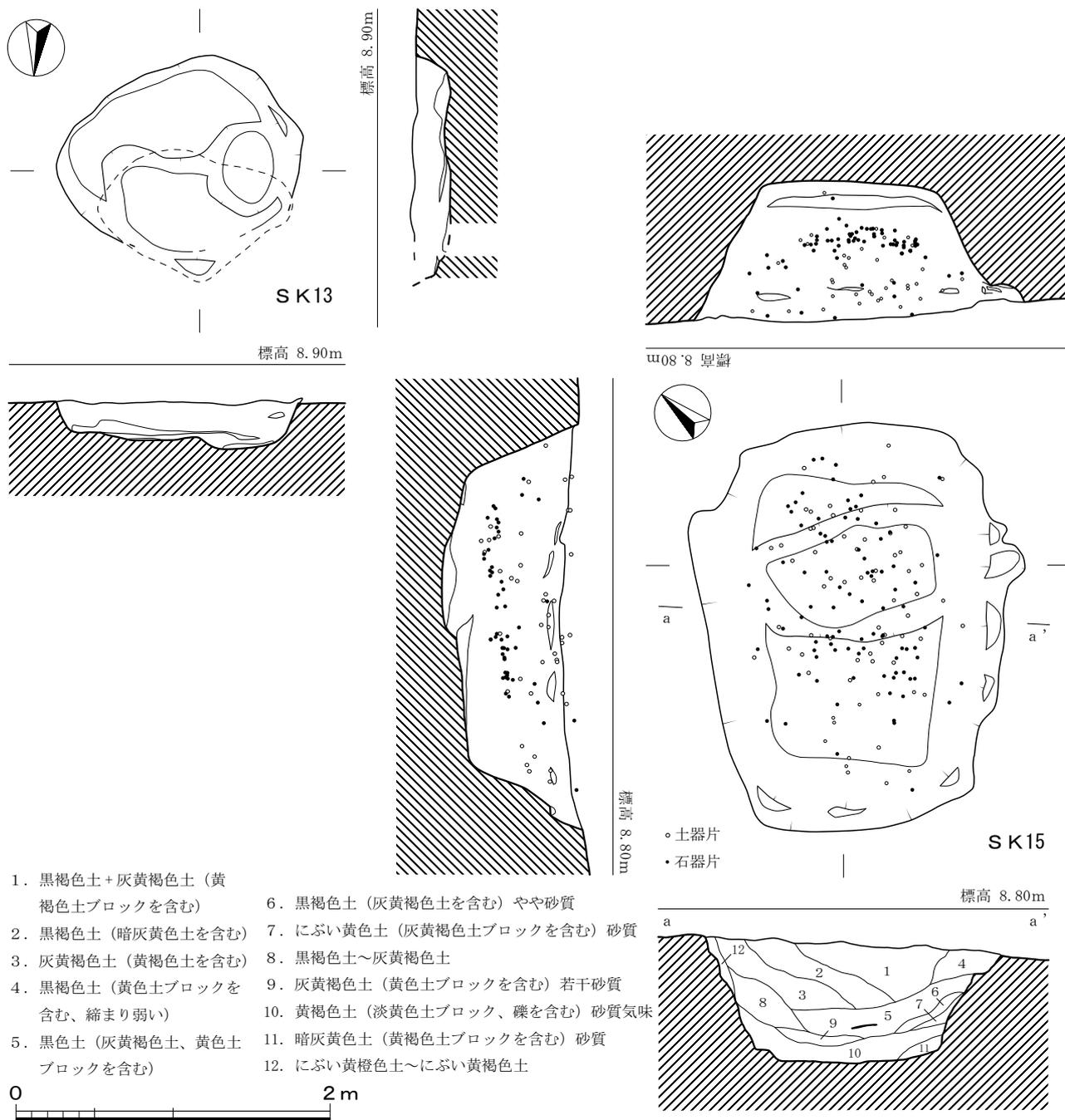
調査区南西部で検出した土坑である。攪乱が後出するが、歪な卵形の平面を有し、長軸1.58m、短軸1.42mを測る。底面は複数の段を有し、深さは最大で0.32mを測る。出土遺物は少なく、弥生土器の甕の底部片と、黒曜石の剥片の各1点のみである。

SK15 (第11図、図版6)

調査区南部中央で検出した土坑である。ピットが後出するが、歪な隅丸方形の平面を有し、長軸2.52m、短軸2.13mを測る。壁面や底面は複数の段を有し、深さは最大で0.94mを測る。埋土は土層図のとおりで、黒褐色土と黄褐色土を主体とし、中層には黒色土が堆積した。また、下層の埋土は砂質を帯びる。遺物は、弥生土器の甕や壺、鉢、浅鉢などの破片や、黒曜石と安山岩の剥片、黒変した片岩の破片、粘土塊が出土した。実測図に示したとおり、土器片が土坑の上層を中心に埋土から万遍なく出土するのに対し、剥片は中層の黒色土から集中して出土する傾向にある。



第10図 SK 3・5・7実測図・土層図 (1/40)



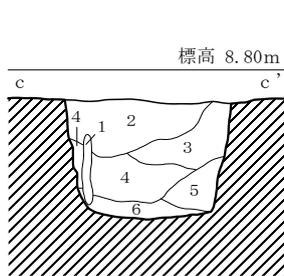
第11図 SK13・15実測図・土層図 (1/40)

落とし穴状遺構

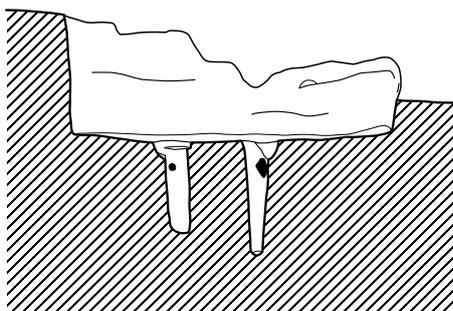
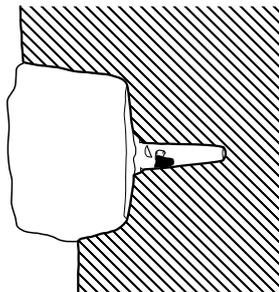
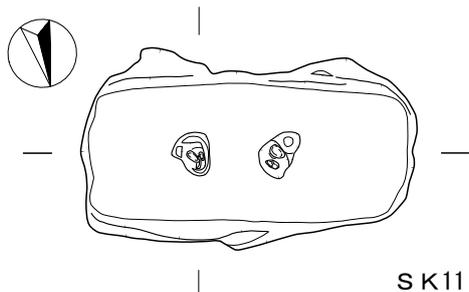
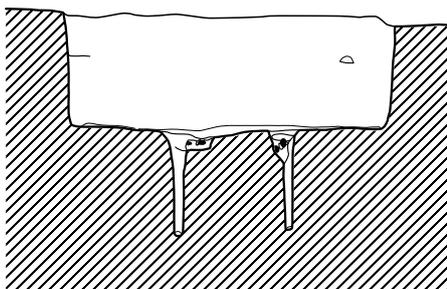
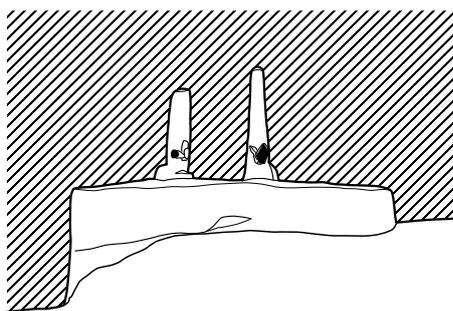
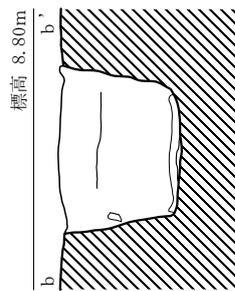
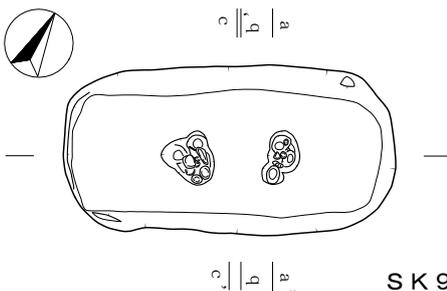
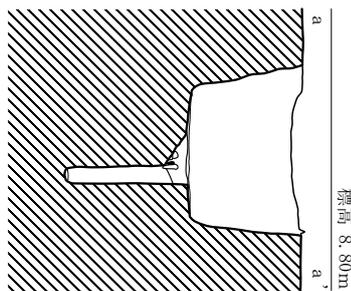
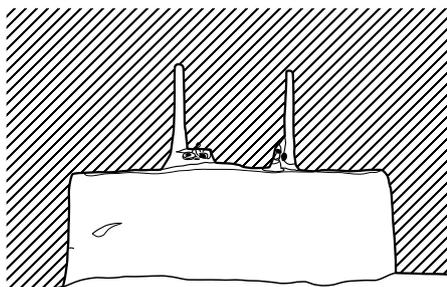
SK9 (第12図、図版6・7)

調査区北部で検出した遺構である。小判形の平面を有し、長軸1.76m、短軸0.90m、深さ0.64mを測る。底面の長軸上2ヶ所に、直径0.12~0.29mのピットから成るピット群を有する。ピット群では礫を検出し、図示していないが底部まで礫が埋まっていた。ピットの深さは、土坑底面から最大で0.55mを測る。埋土は土層図のとおりで、黒褐色土を主体とし、暗褐色土や黄色系のブロック状堆積を伴う。ピット群は、礫を含む砂質気味の黄褐色土が占める。出土遺物は、ピットから出土

III. 今泉遺跡第8次調査



1. 黒褐色土。しまり弱い。樹根痕
2. 黒褐色土（褐灰色土ブロックを含む）
3. 暗褐色土（にぶい黄褐色土ブロックを含む）
4. 暗褐色土（黒褐色土を含む）
5. 黒褐色土（黄色土ブロック、灰黄褐色ブロックを含む）
6. 黒褐色土（暗褐色土を含む）



第12図 SK 9・11実測図・土層図 (1/40)

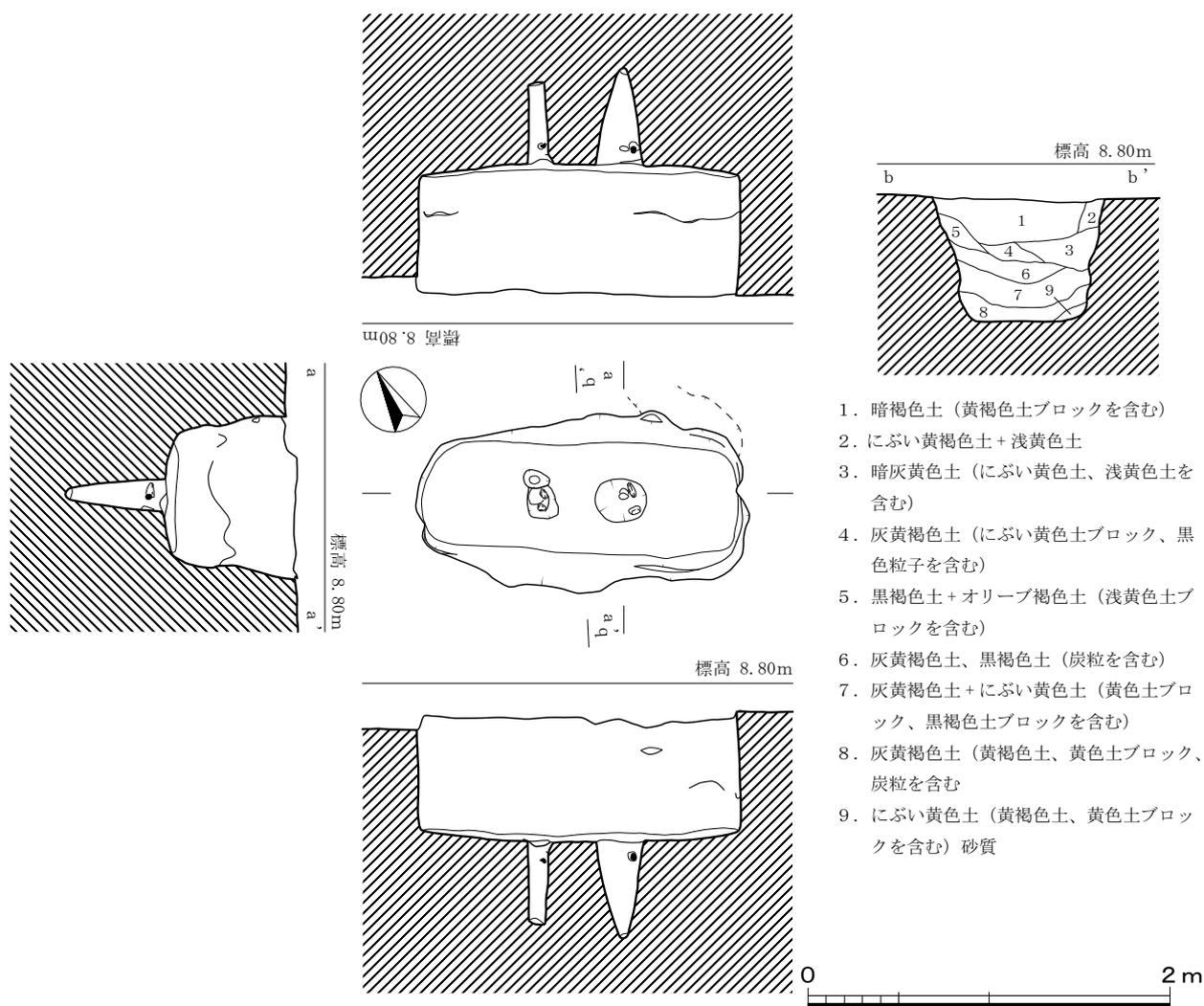
した丸礫のみである。

SK11 (第12図、図版7)

調査区北東部で検出した遺構である。SK3やピットが後出するが、隅丸方形の平面を有する。長軸1.78m、短軸1.07m、残存部の深さは最大で0.68mを測る。底面の長軸上2ヶ所に、直径0.12~0.24mのピットから成るピット群を有する。ピット群の上部では礫を検出した。ピットの深さは、土坑底面から最大で0.59mを測る。ピットの埋土は、砂質気味のにぶい黄褐色土が占める。ピットから出土した丸礫以外の遺物は出土していない。

SK12 (第13図、図版7・8)

調査区中央部北寄りで検出した遺構である。近代以降の畝跡が後出するが、歪な小判形の平面を有し、長軸1.83m、短軸1.02m、深さ0.72mを測る。長軸上の2ヶ所にピットを有するが、西側が直径0.10~0.17m、深さ0.46mのピット群であるのに対し、東側のピットは直径0.24~0.28m、深さ0.56mの1基のみである。いずれも礫を検出し、図示していないが底部まで礫が詰まっていた。埋土は土層図のとおりで、褐色系と黄色系の埋土が占め、一部は黄色土ブロックや炭粒を含む。ピ

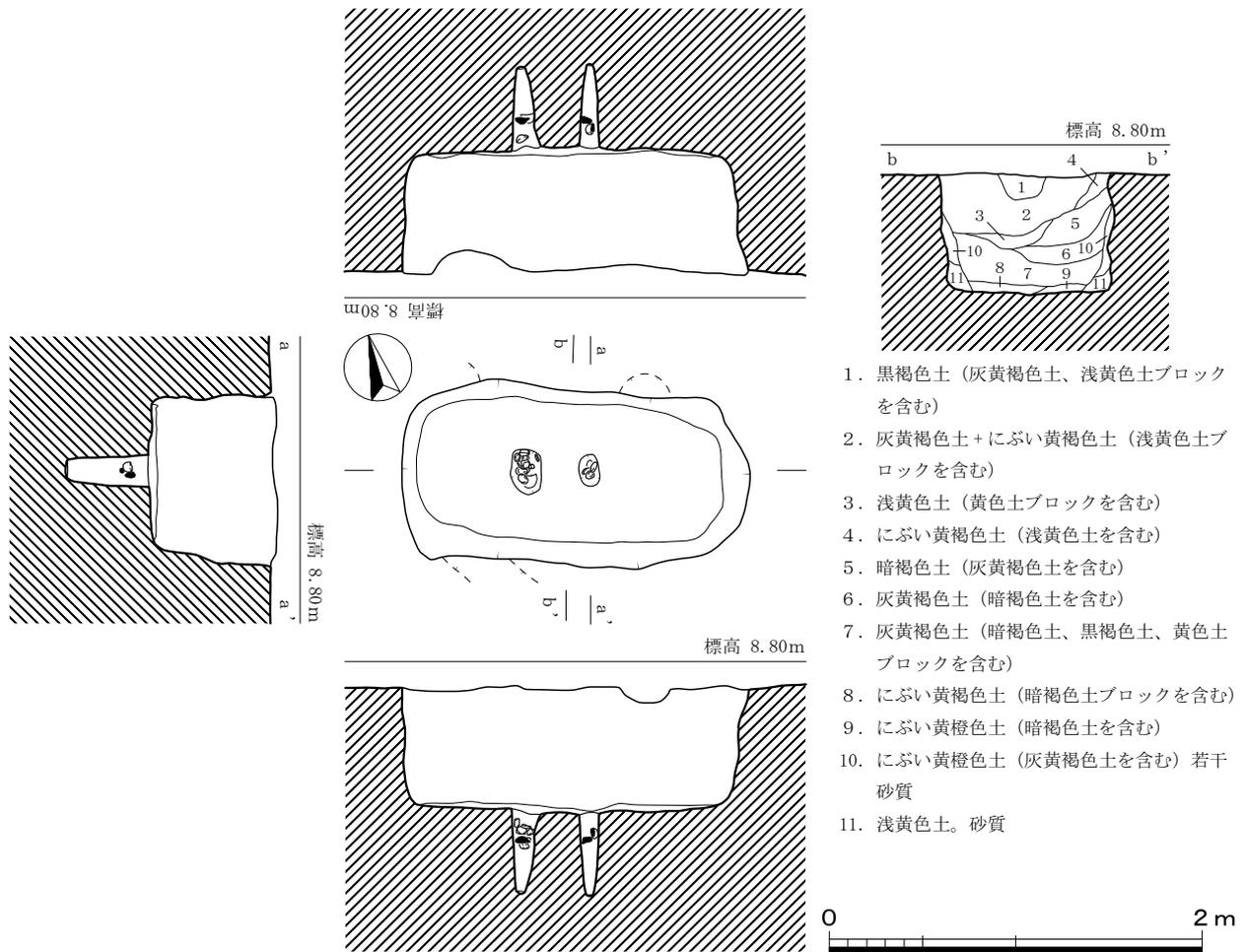


第13図 SK12実測図・土層図 (1/40)

ットの埋土は、褐灰色土や灰白色土ブロックを含む灰黄褐色土だった。出土遺物はピット群から出土した丸礫のみで、59点のうち1点のみ軽石である。

SK14 (第15図、図版8)

調査区南西部で検出した遺構である。ピットや攪乱が後出するが、歪な小判形から隅丸方形の平面を有し、長軸1.85m、短軸0.97m、深さ0.68mを測る。また、SK9・11・12と同様、長軸上の2ヶ所にピットを有するが、各1基のみで直径0.11~0.25m、土坑底面からの深さ0.44~0.46mを測る。ピットでは礫を検出し、図示していないが底部まで礫が埋まっていた。埋土は土層図のとおりで、明確に掘り直した痕跡が見られ、黄色系の埋土が主体である。ピットの埋土は、灰黄褐色からにぶい黄褐色を帯びる粘質土だった。ピットから出土した丸礫以外の遺物は無い。なお、丸礫のうち2点は被熱していた。



第14図 SK14実測図・土層図 (1/40)

(3) 出土遺物 (第15~19図、第2~4表、図版9~17)

遺物の総量はパンコンテナ3箱である。半分以上がSD20から出土した土師器と須恵器が占め、弥生土器と黒曜石・安山岩の剥片、表土から出土した近世の陶磁器、打製石鏃などの石製品、SD20から出土した鉄製品やガラス製品、炭化材や木杭といった植物遺存体が含まれる。個別の法量や

色調、調整などの詳細は、遺物観察表を参照頂きたい。以下、各遺物について簡単に補足しておく。

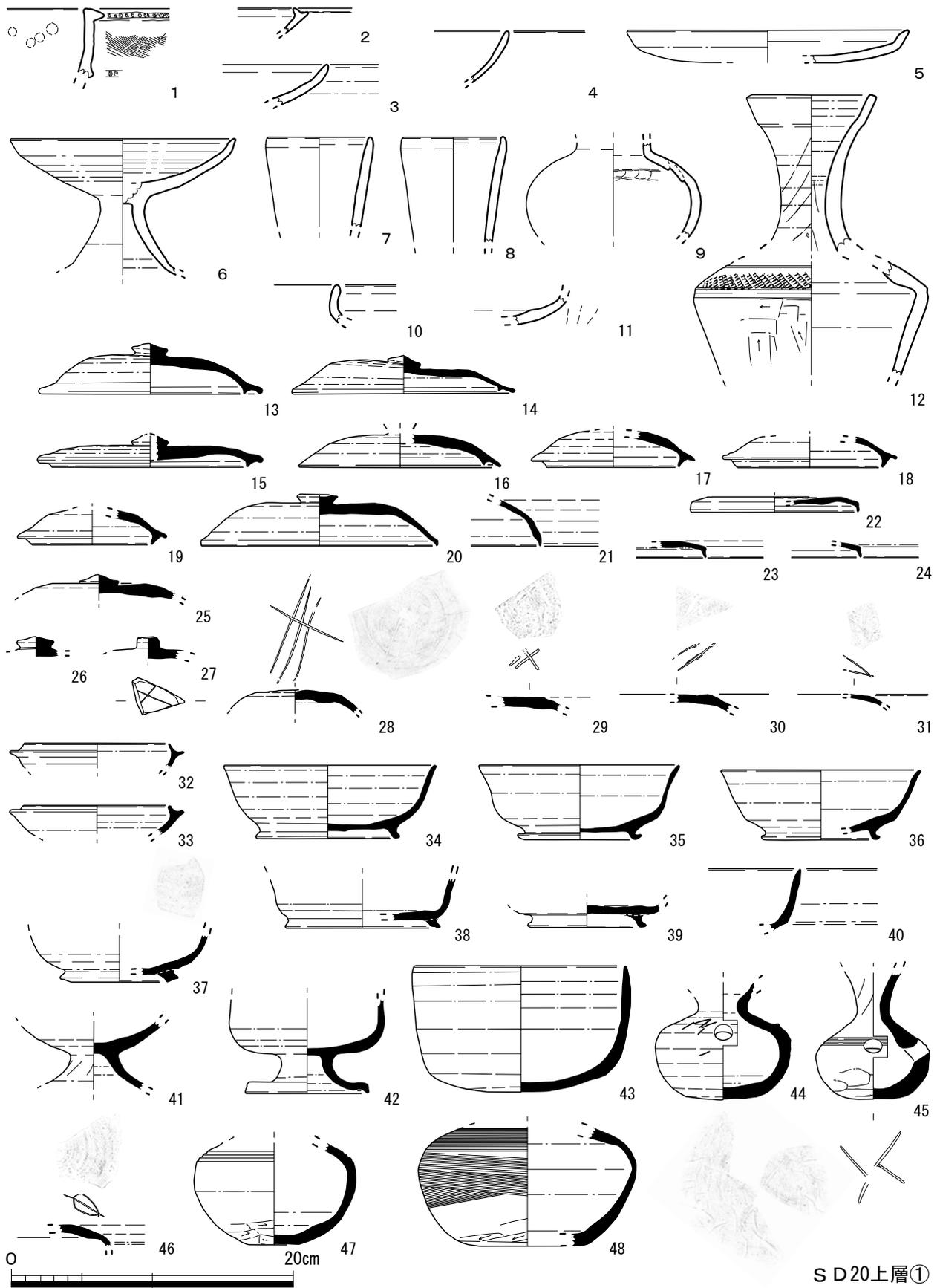
出土遺物で最も多いのは、SD20上層の黒褐色土と黒色土から出土した遺物である。1は混入とみられる弥生土器の甕で、刻目突帯を2条有する口縁部片である。2～12は土師器である。2～4は坏の口縁部で、2は受部を有する。5は盤、6は高坏である。7～12は壺である。7と8は長頸壺の口縁部から頸部で、色調から同一個体の可能性がある。9は胴部で、内面に接合痕が良好に残る。10は短頸壺の口縁部、11は細片だが、9と色調や調整が類似することから、壺と判断した。12は形状から甕の可能性もあるが、穿孔が確認できないので、壺とした。

13～62は須恵器である。13～31は坏蓋で、形状、特に口縁部の断面形状から、受部を有し器高が3cm以上のもの(13～19)、受部は無いが器高が4cm以上のもの(20・21)、受部が無く器高が2cmに満たないもの(22～24)に細別できる。また、口縁部は欠損するが摘みを有する破片(25～27)とヘラ記号を有する破片(28～31)も出土した。32～40は坏身である。32と33は口縁部に受部を有し、坏蓋の可能性もあるが、急角度で立ち上がるため坏身と判断した。37は内面にヘラ記号を有する。41と42は須恵器の高坏で、41は軟質の脚部片、42は外面に自然釉が付着する。43は埴で、内面の一部が黒変する。44と45は甕で、44は胴部に、45は底部にヘラ記号を有する。46～50は壺で、一部の破片は甕や平瓶の可能性もある。46は胴部の破片で、ヘラ記号を有する。48は球形の胴部で、底部は若干上げ底状を呈する。48は底部から胴部の破片で、胴部にカキ目を施す。49は口縁部の破片、50は底部の破片で、法量から平瓶の可能性もある。51～55は平瓶で、胴部にカキ目を施す51と52、回転ナデを施す53、胴部が尖り比較的小形の54と55に細別できる。56と57は横瓶で、56は外面にカキ目を施し、57は内外面に叩きを施す。58～61は甕である。58は器高44.1cmの中甕で、約8割残存する中甕で、赤褐色を呈する。59～61は口縁部の破片である。62は扁平かつ小形で、蓋と考えられるがはっきりしない。63～65は鉄製品である。65は平面や断面の形状から、鉄鏃と考えられる。63と64も断面が方形を呈し、65と類似することから、鉄鏃の茎部と判断した。これらは接合しないが、同一個体の可能性がある。

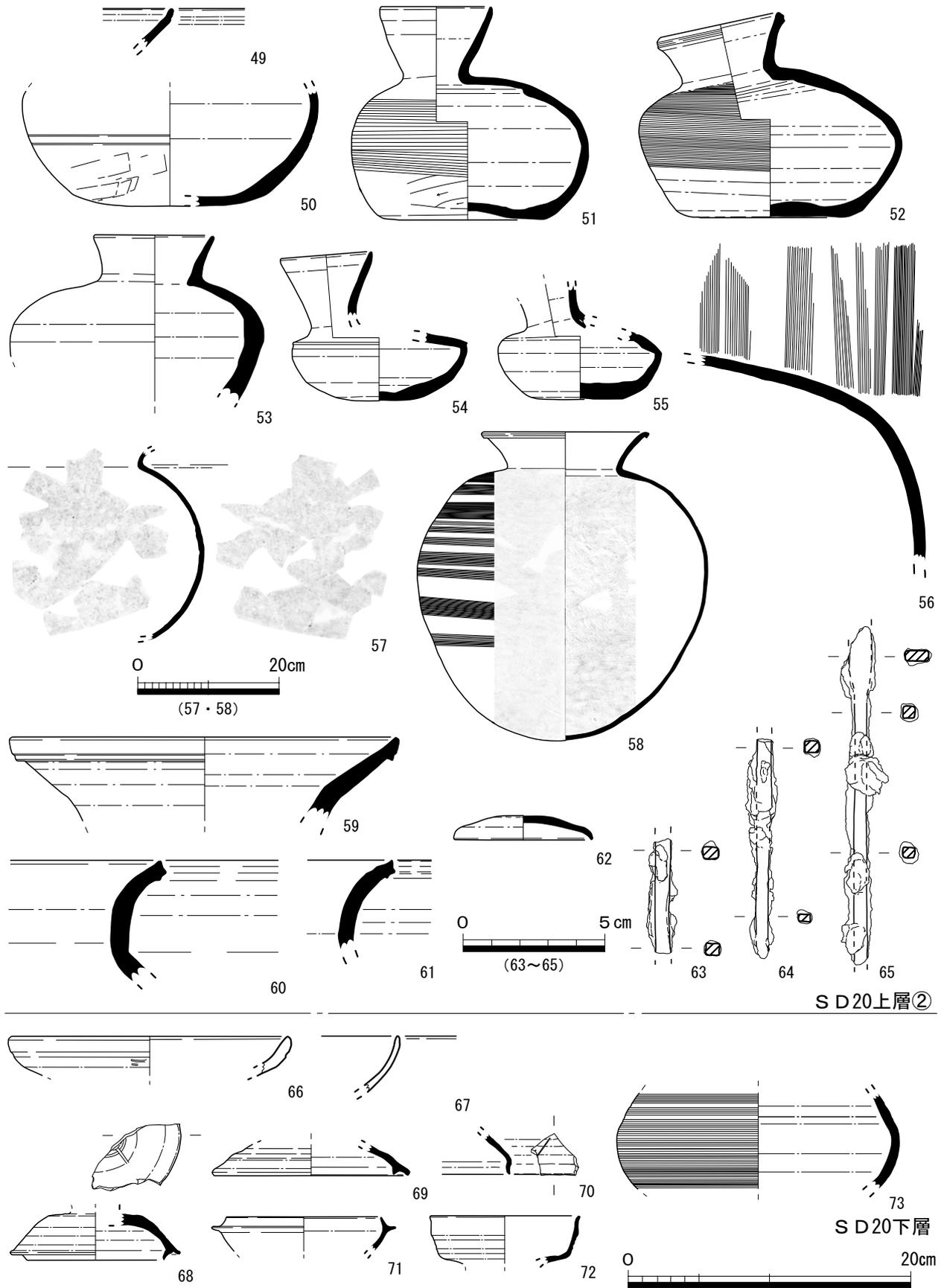
66～73は、SD20下層から出土した土器である。66と67は土師器の埴で、いずれも口縁部の破片である。68～73は須恵器である。68～70は坏蓋で、68と70にはヘラ記号が残る。71は、口縁部に受部を有する須恵器の坏身。72は高坏の坏部である。73は壺の胴部で、外面にカキ目を施す。

74～79は、土層観察のためのトレンチやベルト、および遺構検出時に出土した遺物をまとめた。74は土師器の坏の底部で、回転ヘラ切りを施す。75は土師器高坏の脚部で、外面は赤変するほか、一部は若干煤ける。76は、受部を有しない須恵器坏蓋の口縁部片、77は須恵器甕の頸部片で、77は断面に接合痕が観察できる。78は鉄製品で、直角状に折れ曲がり、楕円形の断面を有する。その直径は63～65と比べて小さく、金具の一部と考えられる。79はガラス製の小玉で、暗い水色を呈する。若干歪んでおり、白色に変色する箇所がある。

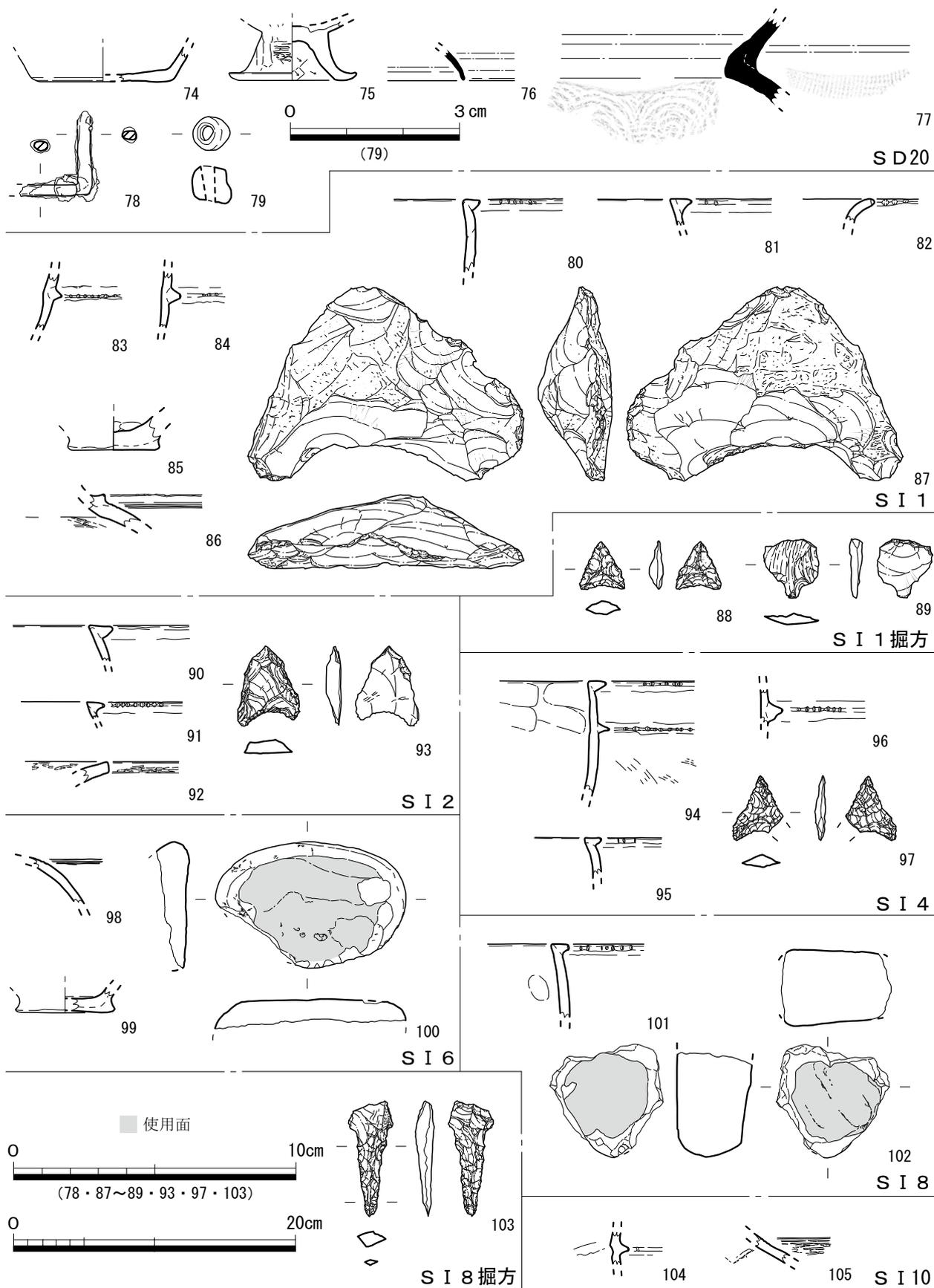
80～87は、SI1の埋土から出土した遺物である。80～84は弥生土器の甕で、80と81は断面三角形の突帯、82は如意形口縁を有する口縁部片で、いずれも刻目を有する。83と84は断面三角形の



第15図 今泉遺跡第8次調査遺物実測図1 (1/4)



第16図 今泉遺跡第8次調査遺物実測図2 (1/4、1/8、1/2)



第17図 今泉遺跡第8次調査遺物実測図3 (1/4、1/2、等倍)

刻目突帯を有する胴部片で、外面は二次被熱により黒変する。85と86は弥生土器の壺で、85は底部片、86は突帯と細い沈線が残る、頸部と胴部の中間部分の破片である。87は安山岩製の石核で、自然面が残る。88と89は、S I 1の掘方から出土した石製品で、いずれも安山岩製である。88は三角形の平面系を有する打製石鏃、89は石錐の未成品である。

90～93は、S I 2からの出土遺物である。90～92は弥生土器で、90と91は断面三角形の突帯を有する甕の口縁部片で、91は刻目を施す。93は壺の口縁部片で、ヘラミガキ調整の跡が残る。93は、安山岩製の打製石鏃である。片面には広い剥離面が残り、比較的厚みがあることから、未成品の可能性はある。

94～97は、S I 4からの出土遺物である。94～96は断面三角形の刻目突帯を有する弥生土器の甕で、94と95は口縁部片、96は胴部片である。97は黒曜石製の打製石鏃で、片方の基部が欠損する。

98～100はS I 6からの出土遺物で、98と99は埋土から出土した弥生土器の壺である。98は胴部片で、外面に細い沈線を施す。99は底部片で、断面に接合痕が残る。100は、建物の中央ピットから出土した台石の破片で、平滑な使用面が残り、若干くぼむ。

101と102は、S I 8からの出土遺物である。101は断面台形の刻目突帯を有する甕の口縁部で、102は2か所に使用面を有する玄武岩製の砥石である。103は、S I 8の掘方から出土した安山岩製の石錐である。剥離面は不明瞭で、使用による摩耗が想定される。

104と105は、S I 10の埋土から出土した弥生土器である。104は、断面三角形の突帯を有する甕の胴部片で、内面に突帯貼付時の調整痕が残る。105は壺の胴部片で、細い沈線を3条施す。

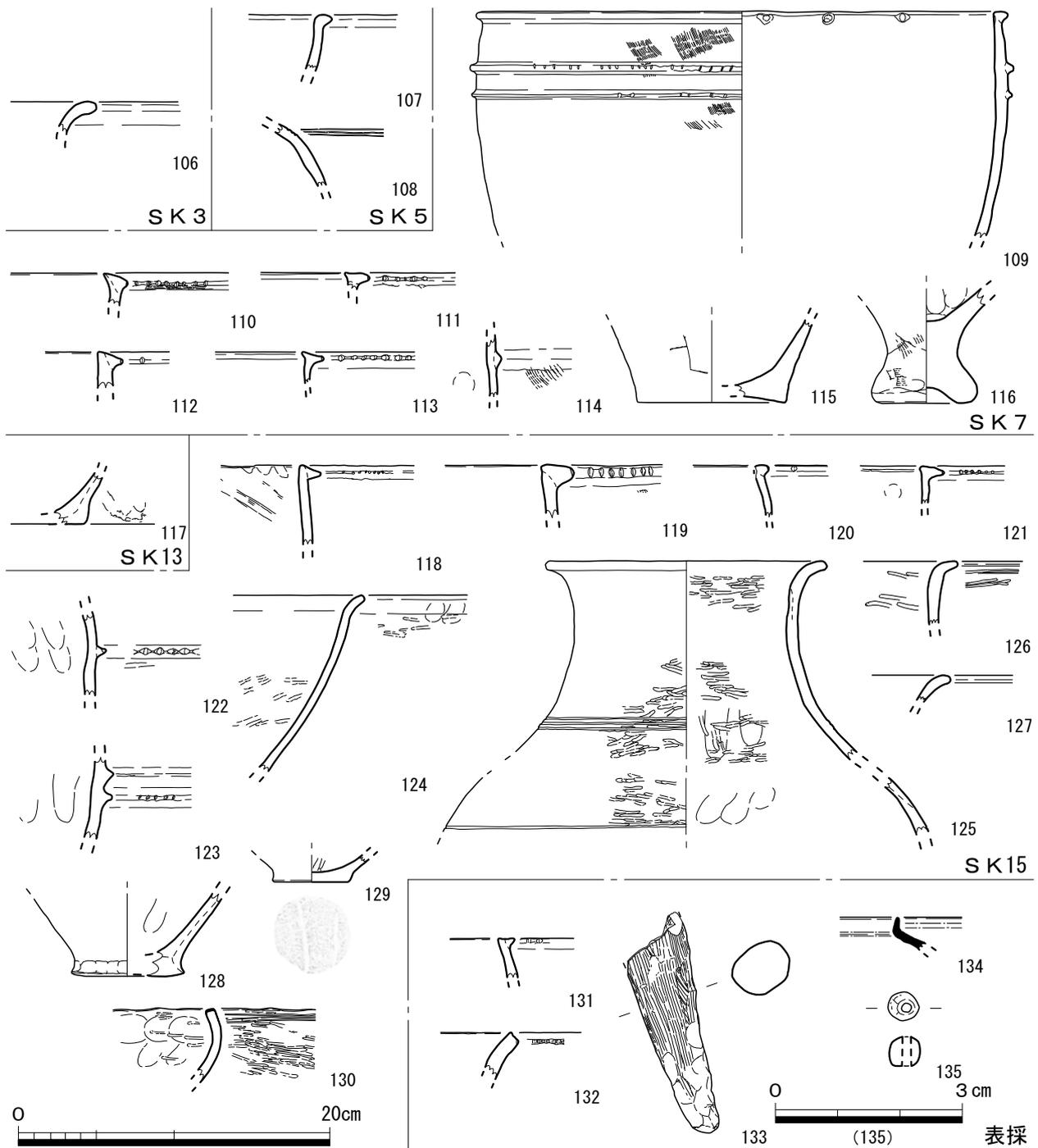
106は、S K 3から出土した遺物で唯一図示できた弥生土器の細片である。壺の口縁部片で、丁寧な横ナデを施す。

107と108は、S K 5から出土した弥生土器である。107は口縁部の細片で、傾きから甕と判断した。108は壺の胴部片で、105と同様、外面に細い沈線が3条見られる。

109～116はS K 7から出土した、いずれも弥生土器の甕である。109は反転復元が可能な破片で、二次被熱により器壁は内外面ともに摩耗する。胴部に刻目突帯を2条廻らせるほか、口縁部内面に等間隔の刺突痕が観察できる。110～113は口縁部片で、いずれも断面三角形の刻目突帯を有する。114は、同じく断面三角形の刻目突帯を施す胴部片。115と116は底部片で、115は弱い上げ底、116は明瞭な上げ底状を呈す。

117は、S K 13から出土した弥生土器の細片である。甕の底部で、断面には接合痕が明瞭に残る。

118～130は、S K 15から出土した弥生土器である。118～121は甕の口縁部片、122と123は甕の胴部片である。いずれも突帯を有し、120以外は刻目を施す。124は鉢の口縁部片で、外面は黒変し炭化物が付着する。125は壺の上半部で、調整や色調が同じ破片を同一個体として報告する。内外面にヘラミガキを施し、頸部と胴部に細い沈線を廻らせる。126と127は壺の口縁部片で、126はヘラミガキを施す。128と129は、壺の底部片である。128は色調が125に類似し、同一個体の可能性が高い。129は内面が黒変しヘラミガキを施すほか、底部には葉脈の痕跡が残る。葉を敷いた上で成形し



第18図 今泉遺跡第8次調査遺物実測図4 (1/4、等倍)

た様相が窺える。130は外面にヘラミガキを施し、細い沈線を2条廻らせるなど、壺の胴部の特徴を有する。しかし、明瞭に口縁部が形成されていることから、無頸壺の口縁部片と判断した。

131~135は対象地や表土、土山で表採した遺物のうち、図示できる遺物を掲載した。131と132は弥生土器の口縁部片で、131は刻目突帯を有する甕、132も刻目を施す壺である。133は土師器の脚部で、ハケ目と指オサエで調整を施す。端部に接地面はみられるが、二次被熱は見られない。134は須恵器の短頸壺の口縁部片で、外面胴部に自然釉が付着する。135は、水田床土の土山で偶然見つけたガラス製の小玉である。79と比べて一回り小さく、やや明るい水色を呈す。

第2表 今泉遺跡第8次調査出土遺物観察表 1

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整			胎 土 石材・重量	備 考	登録 番号
				口縁径 (頂部径)	底径 (受部径)	器高 (厚さ)	外面	内面	外面	内面	底面・高台			
1 第15区	S D20 上層	弥生土器	甕	—	—	(4.9)	明赤褐色～橙色		ハケ目、ナデ、 刻目突帯	ナデ 指オサエ	—	角閃石、砂粒、 細砂粒を含む	口縁部片	202115 000121
2 第15区	S D20 上層	土師器	坏身	—	—	(1.8)	にぶい 黄橙色	橙色～にぶい 黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片	202115 000062
3 第15区	S D20 上層	土師器	坏身	—	—	(2.8)	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。角閃石、 砂粒を含む	口縁部片 内外面やや摩耗	202115 000099
4 第15区	S D20 上層	土師器	坏身	—	—	(3.5)	橙色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良。砂粒若干含 む、赤色粒子含む	口縁部片 内外面摩耗	202115 000100
5 第15区	S D20 上層	土師器	盤	[19.8]	—	(2.3)	明赤褐色	にぶい黄橙 色～褐色	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデか	精良。雲母、砂粒、 赤色粒子を含む	外面丹塗か	202115 000098
6 第15区	S D20 上層	土師器	高坏	[15.8]	—	(9.7)	橙色	褐色	回転ナデ	回転ナデ 絞り痕	回転ナデ	精良。雲母、砂粒、 赤色粒子を含む	外面摩耗 口縁部に黒斑	202115 000101
7 第15区	S D20 上層	土師器	壺	[7.2]	—	(6.4)	褐色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良。砂粒、微砂 粒を若干含む	口縁部～頸部片 内外面摩耗。7に類似	202115 000104
8 第15区	S D20 上層	土師器	壺	[7.3]	—	(7.5)	褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。角閃石、 細砂粒を含む	口縁部～頸部片 内外面摩耗。7に類似	202115 000105
9 第15区	S D20 上層	土師器	壺	—	—	(6.7)	褐色	褐色	ナデ 回転ナデ	ナデ 積上痕	—	精良。雲母を若 干含む	最大径：[10.4] cm 胴部片	202115 000102
10 第15区	S D20 上層	土師器	壺	—	—	(2.6)	褐色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片。内外面摩 耗。短頸壺	202115 000106
11 第15区	S D20 上層	土師器	壺	—	—	(2.0)	明赤褐色 ～褐色	褐色	静止ヘラケズリ	ナデ	—	精良。雲母 を含む	底部片	202115 000103
12 第15区	S D20 上層	土師器	壺	[8.4]	—	(11.1 +8.1)	褐色～にぶい 褐色		回転ナデ、 細目文、ケズリ	回転ナデ	—	精良。雲母、角 閃石を含む	胴部径：[16.6] cm	202115 000122
13 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	2.6	13.4	3.6	褐灰色～ 灰褐色	灰褐色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒を含む	最大径：15.9cm 若干焼け歪む	202115 000069
14 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	2.4	13.4	2.75	灰赤色	赤灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良 砂粒を含む	最大径：15.85cm 焼け歪む	202115 000068
15 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	[2.6]	[14.0]	(2.25)	褐灰色～ 黄灰色	褐灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良 砂粒を含む	最大径：[16.0] cm 焼け歪む	202115 000070
16 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	[19.8]	—	(2.3)	にぶい黄橙色～ 褐色		回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ	—	精良。雲母、砂粒、 赤色粒子を含む		202115 000110
17 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	[9.4]	(11.6)	(2.6)	黄灰色		回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ	—	精良	最大径：[11.6] cm	202115 000072
18 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	—	[10.4]	(2.2)	灰色	褐灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ	—	精良	最大径：[12.4] cm	202115 000074
19 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	—	[8.7]	(2.5)	灰黄色	黄灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ	—	精良	最大径：[10.6] cm	202115 000073
20 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	2.9	[16.8]	3.7	褐灰色	黄灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ ナデ	ほぼ精良		202115 000067
21 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	—	—	(3.35)	褐灰色	灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片	202115 000071
22 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	—	[12.0]	(1.1)	黄灰色 ～褐色	灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	—	精良 砂粒を含む		202115 000075
23 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	—	—	(1.3)	灰色	灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	—	精良	口縁部片	202115 000076
24 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	—	—	(1.1)	灰色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片	202115 000077
25 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	2.8	—	(1.8)	灰色	灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	精良 砂粒を含む	頂部片	202115 000078
26 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	2.65	—	(1.4)	灰白色	黄灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	—	精良	つまみ部	202115 000079
27 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	1.4	—	(1.6)	灰色	黄灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	—	精良	円筒形つまみ。内面に ヘラ記号あり	202115 000080
28 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	5.6	—	(1.7)	灰色	褐灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ記号	精良。砂粒を若 干含む	頂部片 外面にヘラ記号あり	202115 000107
29 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	—	—	(1.1)	灰色	灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	回転ヘラケズ リ、ナデ	精良 砂粒を含む	頂部片 外面にヘラ記号あり	202115 000059
30 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	—	—	(1.3)	黄灰色	灰色	回転 ヘラケズリ	ナデ	ヘラ記号	精良。微砂粒を 若干含む	頂部片 外面にヘラ記号あり	202115 000108
31 第15区	S D20 上層	須恵器	坏蓋	—	—	(0.8)	にぶい黄褐色		回転 ヘラケズリ	剥離	ヘラ記号	精良	頂部片 外面にヘラ記号あり	202115 000109
32 第15区	S D20 上層	須恵器	坏身	[10.4]	—	(1.8)	灰色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良 砂粒を含む	口縁部片 最大径：[12.4] cm	202115 000083
33 第15区	S D20 上層	須恵器	坏身	[10.6]	—	(2.2)	灰色～ 暗灰色	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良 砂粒を含む	口縁部片 最大径：[12.4] cm	202115 000084
34 第15区	S D20 上層	須恵器	坏身	[15.1]	10.2	5.25	褐灰色～ 灰褐色	にぶい 赤褐色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	精良 砂粒を含む		202115 000081
35 第15区	S D20 上層	須恵器	坏身	[14.3]	[8.8]	5.35	黄灰色		回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	精良 砂粒を含む		202115 000082
36 第15区	S D20 上層	須恵器	坏身	[14.2]	[8.4]	5.0	褐灰色～ 灰白色	灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	砂粒を含む		202115 000060
37 第15区	S D20 上層	須恵器	坏身	—	[8.4]	(3.35)	黄灰色	にぶい 赤褐色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ記号	精良。微砂粒を 含む	底部片 内面にヘラ記号あり	202115 000112
38 第15区	S D20 上層	須恵器	坏身	—	(11.0)	(3.5)	灰色	灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	精良。微砂粒を 含む	底部片	202115 000124
39 第15区	S D20 上層	須恵器	坏身	—	[7.8]	(1.7)	灰色	灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	精良。砂粒、微砂 粒を若干含む	底部片	202115 000113
40 第15区	S D20 上層	須恵器	坏身	—	—	(4.4)	灰色	灰白色～ 灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ	—	精良。雲母、黒 色粒子を含む	口縁部片	202115 000111
41 第15区	S D20 上層	須恵器	高坏	—	—	(4.9)	灰白色～ 黄灰色	黄灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	回転ナデ	ほぼ精良。砂粒、 微砂粒を含む	脚部片	202115 000087
42 第15区	S D20 上層	須恵器	高坏	—	8.6	(6.8)	灰色～ 黄灰色	黄灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	回転ナデ	精良。微砂粒を 若干含む	自然釉	202115 000086
43 第15区	S D20 上層	須恵器	壺	14.9	4.4	9.0	褐灰色	灰褐色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ ナデ	回転ヘラケズ リ、ナデ	精良 砂粒を含む	内面一部黒変	202115 000085
44 第15区	S D20 上層	須恵器	甕	—	4.8	(8.4)	灰色	灰色	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ 絞り痕	回転ヘラケズ リ、回転ナデ	精良 砂粒を含む	穿孔、ヘラ記号あり 胴部径：[9.6] cm	202115 000089
45 第15区	S D20 上層	須恵器	甕	—	3.0	(9.1)	灰色～ 黄灰色	灰色～ 黄灰色	静止ヘラケズ リ、回転ナデ	回転ナデ 絞り痕	静止ヘラケズ リ、ナデ	精良 砂粒を含む	穿孔、ヘラ記号あり 胴部径：8.0cm	202115 000118

第3表 今泉遺跡第8次調査出土遺物観察表2

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整			胎 土 石材・重量	備 考	登録 番号
				口縁径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	外面	内面	外面	内面	底面・高台			
46 第15図	S D20 上層	須恵器	壺	—	—	(1.6)	褐灰色～ 黒褐色	灰褐色	回転ヘラケズリ、 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良 砂粒を若干含む	肩部片 外面にヘラ記号あり	202115 000091
47 第15図	S D20 上層	須恵器	壺	—	3.4	(7.3)	黒褐色	褐灰色	静止ヘラケズリ、 回転ナデ、沈線	回転ナデ	ナデ	精良。細砂粒を 若干含む	底部若干上げ底 胴部径：[11.6] cm	202115 000090
48 第15図	S D20 上層	須恵器	壺	—	(9.3)	(8.5)	褐灰色～ 灰黄褐色	灰褐色	静止ヘラケズリ カキ目	回転ナデ	回転ナデ	砂粒、礫を含む	胴部径：[15.5] cm 胴部～底部	202115 000117
49 第16図	S D20 上層	須恵器	壺	—	—	(2.7)	黒色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片	202115 000123
50 第16図	S D20 上層	須恵器	壺	—	(9.0)	(9.2)	灰色～ 暗白色	にぶい 赤褐色	静止ヘラケズリ、 回転ナデ、沈線	回転ナデ	回転ナデ ナデ	細砂粒、砂粒を 含む	胴部径：[13.0] cm	202115 000093
51 第16図	S D20 上層	須恵器	平瓶	8.0	12.6	15.2	灰色	灰色	静止ヘラケズリ、 カキ目、回転ナデ	回転ナデ 接合痕	ナデ	砂粒を含む	最大径：16.8cm	202115 000119
52 第16図	S D20 上層	須恵器	平瓶	9.2	13.2	14.65	灰色	暗黄褐色～ 黄灰色	静止ヘラケズリ、 カキ目、回転ナデ	回転ナデ 接合痕	ヘラケズリ ナデ	砂粒を含む	最大径：16.65cm	202115 000120
53 第16図	S D20 上層	須恵器	平瓶	8.3	—	(11.9)	灰色～ 灰白色	灰色	回転ヘラケズリ、 回転ナデ	—	回転ナデ	細砂粒を含み、 砂粒を若干含む	最大径：18.0cm	202115 000092
54 第16図	S D20 上層	須恵器	平瓶	6.4	5.8	10.6	黄灰色～ 浅黄色	灰黄色～ 浅黄色	回転ナデ 沈線、絞り痕	回転ナデ	回転ヘラケズリ、 回転ナデ	精良。細砂粒、 砂粒を含む	最大径：12.4cm	202115 000094
55 第16図	S D20 上層	須恵器	平瓶	—	7.0	(8.2)	灰赤色～ 褐灰色	灰赤色	回転ナデ 絞り痕	回転ナデ	回転ヘラケズリ、 回転ナデ	砂粒、砂礫を 含む	最大径：[11.6] cm	202115 000095
56 第16図	S D20 上層	須恵器	横瓶	—	—	(14.2)	灰色	灰黄褐色	叩き、カキ目、 一部ナデ	青海波文叩き、 ナデ消し	—	砂粒、礫を含む	胴部片	202115 000116
57 第16図	S D20 上層	須恵器	横瓶	—	—	(27.0)	灰オリーブ色	灰褐色	細目文叩き、 カキ目、回転ナデ	青海波文叩き、 ナデ消し	—	砂粒、黒色粒子を 含む	頸部～胴部片	202115 000115
58 第16図	S D20 上層	須恵器	中甕	[22.9]	6.0	41.1	暗赤褐色～ にぶい赤褐色	赤褐色	並行文叩き カキ目	青海波文叩き、 ナデ	ナデ、青海波 文叩き	精良 砂粒を若干含む	口縁部焼け歪む	202115 000061
59 第16図	S D20 上層	須恵器	甕	[13.8]	—	(6.0)	黄灰色～ 灰色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片	202115 000114
60 第16図	S D20 上層	須恵器	甕	—	—	(8.6)	褐灰色～ 黒褐色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良 細砂粒を含む	口縁部片。61に類似 内面の一部剥離	202115 000096
61 第16図	S D20 上層	須恵器	甕	—	—	(6.4)	灰色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良 雲母を若干含む	口縁部片。60に類似	202115 000097
62 第16図	S D20 上層	須恵器	蓋	[1.2]	[9.6]	1.7	灰白色～ 灰黄色	灰白色	静止ヘラケズリ、 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良	内外面スス付着	202115 000088
63 第16図	S D20 上層	鉄製品	鉄鏃	(7.8)	0.4～ 0.5	0.25 ～0.4	—	—	—	鉄鏃	—	(8.08) g	基部のみ	202115 000141
64 第16図	S D20 上層	鉄製品	鉄鏃	(4.1)	0.5	0.4	—	—	—	鉄鏃	—	(3.76) g	基部のみ	202115 000142
65 第16図	S D20 上層	鉄製品	鉄鏃	(12.1)	0.45 ～0.9	0.35～ 0.45	—	—	—	鉄鏃	—	(12.05) g		202115 000143
66 第16図	S D20 下層	土師器	坏身	[20.0]	—	(2.8)	橙色～ 明赤褐色	橙色～ 明赤褐色	回転ナデ ミガキか	回転ナデ	—	精良	口縁部片 丹塗残る	202115 000125
67 第16図	S D20 下層	土師器	坏身	—	—	(4.0)	橙色～ 褐灰色	褐色～ 赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片 内面に丹塗残る	202115 000126
68 第16図	S D20 下層	須恵器	坏蓋	[9.6]	—	(3.4)	灰オリーブ色	灰色	回転ヘラケズリ、 回転ナデ	回転ナデ	—	精良。細砂粒を 含む	最大径：[12.0] cm 外面にヘラ記号あり	202115 000128
69 第16図	S D20 下層	須恵器	坏蓋	[14.0]	—	(2.2)	灰色	灰白色～ 黒色	回転ヘラケズリ、 回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片 内面に煤付着	202115 000127
70 第16図	S D20 下層	須恵器	坏蓋	—	—	(2.9)	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片。外面にヘラ 記号あり	202115 000129
71 第16図	S D20 下層	須恵器	坏身	[10.9]	—	(2.5)	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。砂粒を 含む	最大径：[13.0] cm 口縁部片	202115 000130
72 第16図	S D20 下層	須恵器	高坏	[10.6]	—	(3.5)	にぶい赤褐色～ 赤灰色	にぶい 赤褐色	回転ヘラケズリ、 回転ナデ	回転ナデ	—	精良	坏部片	202115 000132
73 第16図	S D20 下層	須恵器	壺	—	—	(6.8)	灰色	灰色	カキ目	回転ナデ	—	精良。砂粒を 含む	胴部径：[20.0] cm 胴部片	202115 000131
74 第17図	S D20	土師器	坏身	—	[10.2]	(2.5)	橙色	橙色	回転ヘラケズリ、 回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り ヘラケズリ	精良。赤色粒子を 含む	底部	202115 000133
75 第17図	S D20	土師器	高坏	—	[9.0]	(4.2)	赤色～ 橙色	明赤褐色	ケズリ ヘラミガキ	剥離	ケズリ 接合ナデ	精良	脚部のみ 外面丹塗り残る	202115 000135
76 第17図	S D20	須恵器	坏蓋	—	—	(2.2)	灰黄色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。砂粒を 含む	口縁部片	202115 000134
77 第17図	S D20	須恵器	甕	—	—	(6.2)	灰色	灰色～ オリーブ黒色	正格子目叩き、 回転ナデ	青海波文叩き、 回転ナデ	—	精良	頸部片	202115 000136
78 第17図	S D20	鉄製品	金具	(2.5～ 3.0)	0.35 ～0.5	0.3～ 0.35	—	—	—	鉄鏃	—	(3.73) g		202115 000144
79 第17図	S D20	ガラス 製品	ガラス玉	0.7	0.7	0.6	強い緑味の青色	強い緑味の青色	—	—	—	0.27 g	一部白色化	202115 000145
80 第17図	S I 1	弥生土器	甕	—	—	(5.2)	明赤褐色	明赤褐色	工具痕 刻目突帯	横ナデ	—	細砂粒、微砂粒を 含む	口縁部片	202115 000001
81 第17図	S I 1	弥生土器	甕	—	—	(1.9)	にぶい 黄褐色	灰白色	横ナデ 刻目突帯	横ナデ	—	雲母、角閃石、 砂粒を含む	口縁部片	202115 000002
82 第17図	S I 1	弥生土器	甕	—	—	(1.6)	にぶい 黄褐色	浅黄褐色	ナデ、剥離 刻目	ナデ	—	砂粒を含む	口縁部片 如意型口縁	202115 000003
83 第17図	S I 1	弥生土器	甕	—	—	(4.0)	褐色～ 暗赤褐色	にぶい黄褐色～ にぶい赤褐色	横ナデ 刻目突帯	摩耗	—	雲母、角閃石、 砂粒を含む	胴部片 突帯下半黒変	202115 000004
84 第17図	S I 1	弥生土器	甕	—	—	(4.1)	褐灰色	にぶい 褐色	横ナデ 刻目突帯	ナデ	—	雲母、角閃石、 砂粒を含む	胴部片 外面黒変	202115 000005
85 第17図	S I 1	弥生土器	壺	—	[6.5]	(2.4)	橙色	橙色	ナデ	指オサエ ナデ	ナデ	雲母、角閃石、 砂粒を含む	底部片 接合痕残る	202115 000006
86 第17図	S I 1	弥生土器	壺	—	—	(2.25)	浅黄褐色	浅黄褐色	横ナデ 刻目突帯	ナデ 調整痕	—	雲母、砂粒、 細砂粒を含む	頸部片	202115 000007
87 第17図	S I 1	石製品	石核	9.8	6.9	2.6	灰色	灰色	—	敲打痕	—	114.65 g	安山岩製	202115 000008
88 第17図	S I 1 掘方	石製品	打製石鏃	1.7	1.6	0.5	灰色	灰色	—	敲打痕	—	0.82 g	安山岩製	202115 000009
89 第17図	S I 1 掘方	石製品	石鏃 未成品	2.1	1.9	0.4	灰色	灰色	—	敲打痕	—	(1.36) g	安山岩製	202115 000010
90 第17図	S I 2	弥生土器	甕	—	—	(2.5)	にぶい 黄褐色	浅黄褐色	横ナデ 突帯	横ナデ	—	雲母、砂粒、 細砂粒を含む	口縁部片 口縁端部黒変	202115 000011

第4表 今泉遺跡第8次調査出土遺物観察表3

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整			胎 土 石材・重量	備 考	登録 番号	
				口縁径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	外面	内面	外面	内面	底面・高台				
91 第17図	S I 2	弥生土器	甕	—	—	(1.2)	にぶい黄褐色		横ナデ 刻目突帯	剥離	—	精良。細砂粒、赤色粒子を含む	口縁部片	202115 000012	
92 第17図	S I 2	弥生土器	壺	—	—	(1.5)	黒色		横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	雲母、角閃石、微砂粒を含む	口縁部片	202115 000013	
93 第17図	S I 2	石製品	石鏃 未成品	2.9	2.2	0.5	灰色		敲打痕			—	2.93 g	安山岩製	202115 000014
94 第17図	S I 4	弥生土器	甕	—	—	(8.3)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	調整痕 刻目突帯	ナデ 指オサエ	—	雲母、角閃石、砂粒を含む	口縁部片 外面煤ける、内面被熱	202115 000016	
95 第17図	S I 4	弥生土器	甕	—	—	(2.9)	にぶい黄褐色	浅黄褐色	調整痕 刻目突帯	横ナデ	—	雲母、角閃石、砂粒を含む	口縁部片 外面赤変	202115 000017	
96 第17図	S I 4	弥生土器	甕	—	—	(2.6)	にぶい黄褐色	暗赤褐色	横ナデ 刻目突帯	ナデ	—	雲母、微砂粒、細砂粒を含む	胴部片 刻目下半赤変	202115 000018	
97 第17図	S I 4	石製品	打製石鏃	2.3	1.8	0.4	黒色		敲打痕			—	(0.92) g	黒曜石製	202115 000019
98 第17図	S I 6	弥生土器	壺	—	—	(3.3)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ 沈線3条	ナデ	—	精良。雲母、砂粒、赤色粒子を含む	胴部片	202115 000021	
99 第17図	S I 6	弥生土器	壺	—	[7.1]	(1.8)	赤色～浅黄褐色	明赤褐色	横ナデ ナデ	ナデ	ナデ	精良。微砂粒、赤色粒子を含む	底部片 二次被熱により赤変	202115 000022	
100 第17図	S I 6	石製品	台石	(13.5)	(9.0)	(1.4)	にぶい黄褐色		使用面	—	—	(303) g	摩耗	202115 000023	
101 第17図	S I 8	弥生土器	甕	—	—	(5.4)	にぶい黄褐色	浅黄褐色	横ナデ、摩耗 刻目突帯	ナデ、指オサエ、摩耗	—	精良。角閃石、微砂粒を含む	口縁部片	202115 000032	
102 第17図	S I 8	石製品	砥石	(8.1)	(7.8)	(5.5)	灰色		使用面	使用面	—	(510) g	玄武岩製か	202115 000035	
103 第17図	S I 8 掘方	石製品	石錐	4.1	1.6	0.7	灰色		敲打痕、摩耗			—	2.77 g	安山岩製	202115 000036
104 第17図	S I 10	弥生土器	甕	—	—	(2.4)	浅黄褐色	浅黄褐色	横ナデ 突帯	調整痕 横ナデ	—	砂粒、微砂粒を含む	胴部片	202115 000037	
105 第17図	S I 10	弥生土器	壺	—	—	(2.1)	灰褐色	にぶい黄褐色	ヘラミガキ 沈線3条	工具痕	—	精良。角閃石、細砂粒を含む	胴部片	202115 000038	
106 第18図	S K 3	弥生土器	壺	—	—	(2.1)	浅黄褐色	にぶい黄褐色	横ナデ	横ナデ	—	精良。雲母、細砂粒、赤色粒子を含む	口縁部片	202115 000015	
107 第18図	S K 5	弥生土器	壺	—	—	(4.0)	明赤褐色	褐色	ナデ 沈線3条	指オサエか ナデ	—	—	胴部片	202115 000020	
108 第18図	S K 5	弥生土器	甕	—	—	(3.6)	にぶい褐色	にぶい褐色	横ナデか	横ナデか	—	雲母、砂礫、砂粒を含む	口縁部片	202115 000058	
109 第18図	S K 7	弥生土器	甕	[34.1]	—	(14.7)	にぶい褐色～明赤褐色	にぶい黄褐色～灰褐色	ハケ目 刻目突帯	工具痕 刺突痕	—	雲母、角閃石、砂粒を含む	最大径：[34.6] cm 内外面二次補熱	202115 000031	
110 第18図	S K 7	弥生土器	甕	—	—	(2.1)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	横ナデ 刻目突帯	横ナデ	—	雲母、角閃石、微砂粒を含む	口縁部片	202115 000024	
111 第18図	S K 7	弥生土器	甕	—	—	(1.2)	明赤褐色	褐色	横ナデ 刻目突帯	横ナデ	—	精良。雲母、微砂粒を含む	口縁部片	202115 000026	
112 第18図	S K 7	弥生土器	甕	—	—	(2.3)	褐灰色	黒褐色	横ナデ 刻目突帯	横ナデ 一部剥離	—	精良。雲母、微砂粒を含む	口縁部片 化粧土の可能性	202115 000027	
113 第18図	S K 7	弥生土器	甕	—	—	(2.1)	浅黄褐色	灰黄褐色	横ナデ 刻目突帯	横ナデ 剥離か	—	精良。雲母、微砂粒を含む	口縁部片	202115 000025	
114 第18図	S K 7	弥生土器	甕	—	—	(4.1)	明赤褐色～灰黄褐色	明赤褐色～灰黄褐色	ハケ目、横ナデ 突帯	ナデ 指オサエ	—	精良。雲母、微砂粒を含む	胴部片	202115 000028	
115 第18図	S K 7	弥生土器	甕	—	[9.4]	(5.3)	赤褐色	にぶい赤褐色	調整痕 摩耗	ナデ 指オサエ	ナデか 一部黒変	雲母、角閃石、砂粒を多く含む	底部片。二次被熱	202115 000029	
116 第18図	S K 7	弥生土器	甕	—	6.1	(7.4)	明赤褐色	灰褐色	ハケ目、ナデ、 指オサエ	ナデ 指オサエ	ナデ	雲母、角閃石、微砂粒を含む	底部片。上げ底 二次被熱	202115 000030	
117 第18図	S K 13	弥生土器	甕	—	—	(3.3)	褐色	褐灰色	ナデ 指オサエ	ナデ	ナデ	雲母、角閃石、砂粒を多く含む	底部片。接合痕残る	202115 000040	
118 第18図	S K 15	弥生土器	甕	—	—	(5.1)	にぶい褐色～浅黄褐色	にぶい黄褐色～褐灰色	横ナデ 刻目突帯	工具痕 ナデ	—	雲母、砂粒を多く含む	口縁部片 外面一部煤ける	202115 000046	
119 第18図	S K 15	弥生土器	甕	—	—	(3.4)	褐色	褐色	横ナデ 刻目突帯	横ナデ	—	精良。雲母、砂粒を含む	口縁部片 突帯下方黒変	202115 000047	
120 第18図	S K 15	弥生土器	甕	—	—	(3.4)	浅黄褐色	にぶい褐色	摩耗 刻目突帯	摩耗 一部剥離	—	雲母、細砂粒、微砂粒を含む	口縁部片	202115 000048	
121 第18図	S K 15	弥生土器	甕	—	—	(2.4)	褐色	灰褐色	横ナデ 刻目突帯	横ナデ 指オサエ	—	精良。雲母、微砂粒を含む	口縁部片。外面炭化材付着、内面一部黒変	202115 000049	
122 第18図	S K 15	弥生土器	甕	—	—	(5.6)	にぶい褐色	にぶい黄褐色	横ナデ 刻目突帯	ナデ 指オサエ	—	精良。雲母、角閃石、微砂粒を含む	胴部片。外面炭化材付着し、一部黒変	202115 000050	
123 第18図	S K 15	弥生土器	甕	—	—	(5.2)	浅黄褐色	にぶい褐色	横ナデ 刻目突帯	ナデ 指オサエ	—	雲母、角閃石、微砂粒を含む	胴部片	202115 000051	
124 第18図	S K 15	弥生土器	鉢	—	—	(11.4)	灰褐色～黒褐色	黒褐色～にぶい黄褐色	横ナデ、指オサエ、 ナデ消し	横ナデ ナデ	—	精良。雲母、微砂粒を含む	外面に炭化物付着	202115 000045	
125 第18図	S K 15	弥生土器	壺	[17.4]	—	(7.8+ 3.6)	浅黄褐色～灰黄褐色	にぶい黄褐色～灰黄褐色	ヘラミガキ 沈線4条	ヘラミガキ 指オサエ	—	精良。雲母、角閃石、砂粒を含む	口縁部から胴部の破片 一括	202115 000052	
126 第18図	S K 15	弥生土器	壺	—	—	(4.1)	にぶい褐色～にぶい褐色	にぶい黄褐色	ヘラミガキ ナデ	ヘラミガキ ナデ	—	雲母、砂礫、砂粒を含む	口縁部片	202115 000053	
127 第18図	S K 15	弥生土器	壺	—	—	(1.7)	にぶい褐色	灰褐色	横ナデ	横ナデ	—	雲母、砂粒を若干含む	口縁部片	202115 000054	
128 第18図	S K 15	弥生土器	壺	—	[9.2]	(5.3)	にぶい黄褐色～浅黄褐色	灰黄色～黒褐色	ナデ	ナデ 指オサエ	ナデ	砂礫、砂粒を大量に含む	底部片。接合痕残る 外面煤ける	202115 000052	
129 第18図	S K 15	弥生土器	壺	—	4.95	(1.8)	にぶい褐色～黒褐色	黒褐色	横ナデ	ミガキ	葉脈痕	精良。雲母を含む	底部片 内面黒変	202115 000055	
130 第18図	S K 15	弥生土器	無類壺	—	—	(4.7)	にぶい褐色	にぶい黄褐色	ヘラミガキ 沈線3条	ヘラミガキ 指オサエ	—	雲母、角閃石、砂礫、砂粒を含む	口縁部片	202115 000044	
131 第18図	表採	弥生土器	甕	—	—	(2.5)	黒褐色～褐色	褐色	横ナデ 刻目突帯	横ナデ	—	砂粒を多く含む	口縁部片。内外面摩耗、 突帯下方煤ける	202115 000137	
132 第18図	表採	弥生土器	壺	—	—	(3.0)	にぶい黄褐色	灰黄褐色	横ナデ 刻目	横ナデ	—	砂粒を多く含む	口縁部片	202115 000138	
133 第18図	表採	土師器	脚部	(14.3)	13.8	3.5	にぶい黄褐色～にぶい褐色	にぶい黄褐色	ハケ目、 指オサエ	—	—	角閃石、細砂粒を含む	口縁部片	202115 000139	
134 第18図	表採	須恵器	短頸壺	—	—	(2.1)	灰色～暗オリーブ灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片 外面自然釉	202115 000140	
135 第18図	床土 土山	ガラス 製品	ガラス玉	0.5	0.45	0.5	明るい緑味の青色					—	0.11 g		202115 000146

3. 総括

(1) はじめに

久留米市埋蔵文化財センターに保管されている埋蔵文化財包蔵地調査カードによると、調査地点は昭和49年（1974）に坂田健一氏の踏査で埋蔵文化財が発見された場所である。開墾時に「ほぼ円形に仕切られた黒色土層」が見つかり、土器片が出土したことから、弥生時代の住居址の存在が示唆されている。基本層序で述べたように、調査区の大半は水田床土の直下で地山に到達するが、その原因は開墾時の削平である可能性が高い。遺構の密度は低いが、縄文時代の所産とみられる落とし穴状遺構や、弥生時代の竪穴建物と土坑、古代の溝を検出した。以下、年代順に遺構の性格について述べておく。

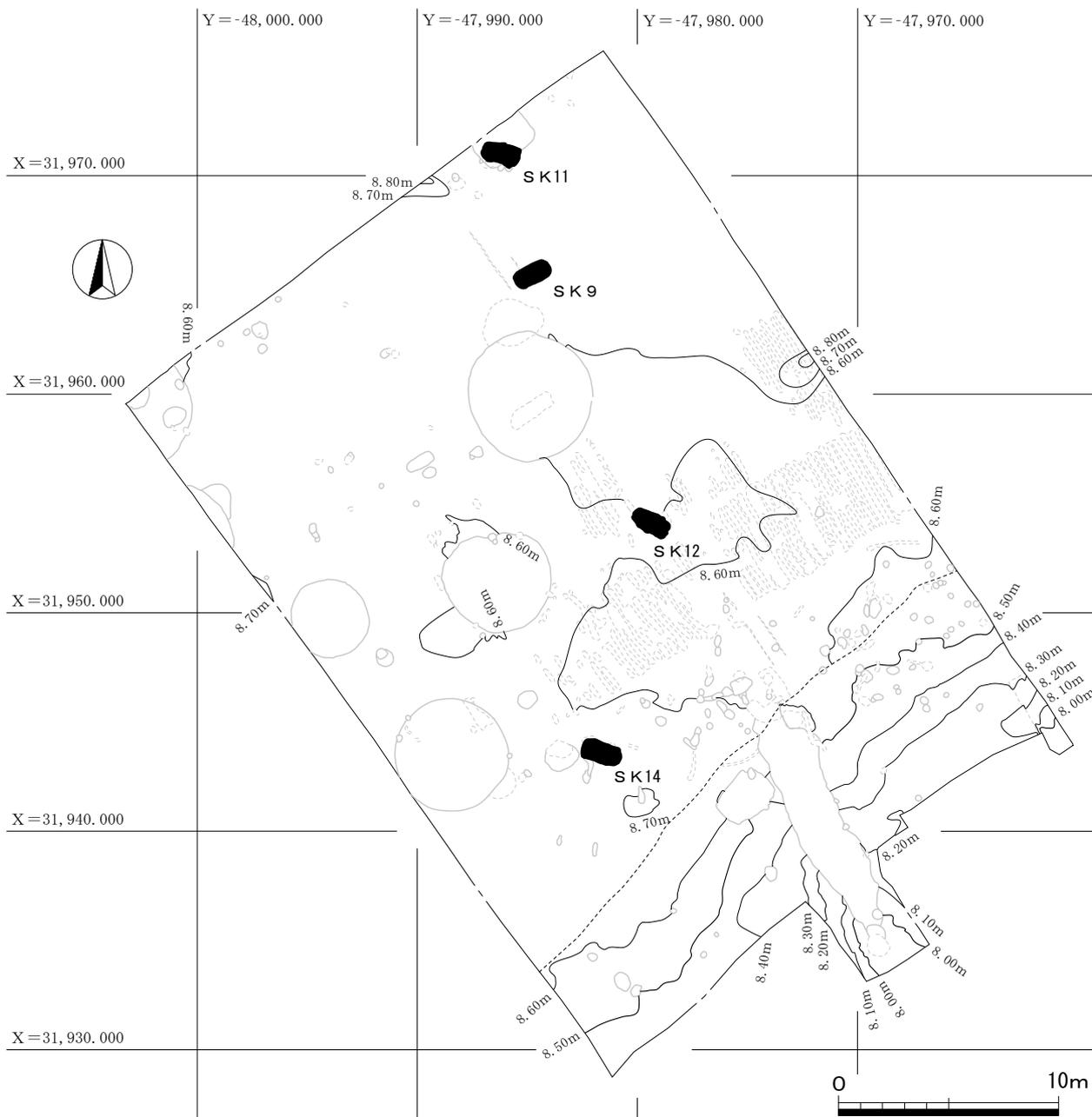
(2) 落とし穴状遺構について

落とし穴状遺構（以下「落とし穴」と略）は、SK 9・11・12・14の4基を検出した。いずれも隅丸方形もしくは小判形の平面形の土坑の底部に、2基のピット（SK 14）またはピット群（SK 9・11・12）を2ヶ所有する。これらは富永分類のC-1類（注1）にあたり、調査地点が位置する今泉台地で検出されている落とし穴で最も多い形態である（注2）。調査地点周辺でも、東約300mに位置する今泉遺跡第1～4次調査と坂本遺跡第4次調査では、直線状に配置された落とし穴が65基検出されている。これらの調査で検出された落とし穴の法量（平均値：長軸1.25m×短軸0.88m×深さ0.6m）（注3）と比べて、SK 9・11・12・14の平均値は長軸1.81m×短軸0.99m×深さ0.65mと、土坑の規模が一回り大きい傾向にある点が注目できる。

SK 9・11・12は、1ヶ所に複数のピットが前後関係を有して集中する。その理由について、木質の腐朽により逆茂木を刺し直した可能性が指摘されており（注4）、SK 9・11・12のピットも、逆茂木のピットが複数回掘り込まれた様相が示唆できる。ただし、今回の調査で検出したピットはいずれも深さが約0.5m前後と非常に深く、しかも礫が大量に詰まっていた。礫の用途を示唆させる例として、干潟向畦ヶ浦遺跡（小郡市）（注5）や道手遺跡（八女市）（注6）では、ピットの上端に礫を配置した落とし穴が検出されており、逆茂木を固定させる用途が想定されている。今回検出した落とし穴も、ピットが深いことも相まって、ピットの中で逆茂木の木杭を固定させるために用いた可能性があるが、ピットの底部まで礫が詰まっている落とし穴もある。これについては、改めて考えることにしたい。

遺構の法量や形態がほぼ同一で、蛇行しながら並ぶ点から、4基の落とし穴は同時期に掘削された可能性が高い。地形に目を向けると、調査区の南東部には南西-北東方向の段落ちがあり（第19図）、北西側にも同じ方向の谷状地形がみられる。南西側は小川に面することから、4基の落とし穴は、南北を谷に挟まれ、西方の小川に突き出た低台地を横切るように配置された様相が窺える。その配置は著しく蛇行しているが、同じ標高に沿って並ぶという落とし穴の傾向（注7）から、開墾により平坦な地形となる前の、起伏があった旧地形を反映している可能性がある。

落とし穴の時期については、出土遺物が皆無でSK 11にSK 3が後出することから、弥生時代以



第19図 調査区地形図 (1/300)

前である可能性が高い。周辺の過去の調査では、落とし穴の出土遺物は庄屋野遺跡で出土した押型文土器1点出土に過ぎず、九州島内の検討から縄文時代早期に比定されている(注8)。しかし、出土遺物のみで年代を決定した事に否定的な意見もあり(注9)、今回の調査でも、それ以上の細分は困難である。今回検出された落とし穴は、年代幅が広いが、縄文時代の遺構としておきたい。

庄屋野遺跡で検出された落とし穴の花粉自然科学分析から、落とし穴が掘削された縄文時代早期の安武町一帯は、ススキやタケ亜科が生い茂る開けた環境だったと考えられている(注10)。地元住民によると、調査地点付近は半世紀ほど前まで現在より起伏がある地形に雑木林が点在し、高良山からシカやノウサギが下りてくることがあったという。また、江戸時代には藩主有馬家が鷹狩に訪れるため、藩主の休息場になる庄屋の屋敷は、床の間を畳張りにして御成間にできるようにしてい

たと伝わる。さらに、小川を挟んで対岸に位置する東鳥遺跡でも落とし穴が1基検出されており(注11)、銚子塚古墳付近では、毎年11月28日にウサギ狩りを行う風習があったという記録がある(注12)。これらの証言や記録、見晴らしが良く水場に近い立地からも、調査地点が狩猟の舞台として格好の場所だったことが想起される。

(3) 弥生時代の遺構について

弥生時代の遺構は、竪穴建物と土坑に大別できる。

竪穴建物はいずれも円形の平面を有し、中央にピットが位置する「松菊里型住居」である。大部分が調査区外に及ぶS I 2・4も、埋土や出土遺物の特徴が類似することから、同様の形状である可能性が高い。これらの竪穴建物は、寸法や柱穴の数で二分できる。すなわち、①S I 1上層とS I 8・10のように直径約4.5～5.9mで5基の柱穴を有する建物と、②S I 6・23、さらにS I 1下層のように直径約3.5～4.2mで4基の柱穴を有する建物である。

こうした円形の平面を有する竪穴建物(以下「円形建物」と略)は、久留米市内各地で確認されており、先述した今泉遺跡第1～4次調査では18基の円形建物と4基の方形竪穴建物、約20基の貯蔵穴が直径約100mの空間を馬蹄状に囲むように検出されている。概報のみだが、第3次調査では円形建物の複数回の建て替えが認められ、柱穴が8～6基から4基へ減少すると指摘されている(注13)。しかし本調査地点の円形建物は、S I 1の柱穴の検出状況や、S I 23に後出するS I 10の柱穴の数から、逆に柱穴が4基から5基に増加し、建物の直径も大形化する様相が看取できる。円形建物の大形化と柱穴の増加は、近隣の三国丘陵の分析成果からも指摘されており(注14)、糸島平野(注15)や福岡平野(注16)を含む玄海灘沿岸(注17)、北九州市域(注18)でも同様の傾向が指摘されている。第1～4次調査の傾向と今回検出した円形建物の傾向の違いは、今後の検討課題である。

既に指摘されているように(注19)、円形建物の中央ピットは炉ではなく石器製作など別の用途を有していたと考えられている。今回検出した円形建物も、建物中央のピットで焼土や被熱による硬化面などは確認しておらず、建物内に炉があったとは考えにくい。S I 10における焼土の検出状況から、円形建物の屋外で火を使っていた可能性も考えられる。

また、安山岩の剥片が1点のみ出土したS I 23を除き、6基の円形建物からは黒曜石や安山岩の剥片が出土した点が注目できる。これらの石製品と剥片の点数および重量の計量から、S I 1・6・8は安山岩、S I 2・4・10は黒曜石が卓越する。もっとも、東櫛原今寺遺跡第1・2次調査の円形建物(注20)など、2,000点以上の出土例がある久留米市内の円形建物の中で、今回の円形建物で出土した剥片は、遺構の残存状況が悪いためか、最多のS I 1でも88点に過ぎない。剥片が硬化面直上に集中せず、埋土から万遍なく出土した点からも、剥片は円形建物の周囲から流入したと考えられる。

土坑はS K 3・5・7・13・15の5基が挙げられる。S K 5はS I 4が後出することから円形建物より古相、S K 7は底部上げ底の甕が出土しておりS I 2に後出することから、円形建物より後世の遺構である。S K 3・13は出土遺物が少量だが、弥生土器や黒曜石の細片が出土したことから、

円形建物と大幅な時期差があるとは考えにくい。SK15も、剥片が多数出土した様相や土器の形状から、円形建物と同時期である可能性が高い。円形建物に土坑が伴う様相は、先述した今泉遺跡第1～4次調査の遺構と類似し、第2次調査のSK200(注21)は本調査のSK3に平面形も類似する。

これらの遺構の年代だが、ほとんどの甕が刻目突帯を有する点や、平底の甕を伴う点、壺の頸部に細い沈線を巡らせる点などから、前期末に収まる可能性が高い。ただし、SK7は先述した上げ底の甕底部から、中期初頭の城ノ越式段階まで新しくなると想定できる(注22)。もともと、土器の形状に大きな違いはなく、短期間のうちに建替えられた可能性がある。この傾向は、第1～4次調査の集落遺構でも指摘されている。

元の土地所有者によると、調査地点一帯は昭和28年(1953)の西日本水害の際にも冠水しなかったという。南西側の川を挟んだ対岸に位置する東鳥遺跡第2次調査でも、2基の円形建物を含む22基の竪穴建物が検出された(注23)ほか、隣接する牧場でも円形建物発見の伝承が残る(注24)。台地の周縁部で水場に近く、しかも冠水しない好立地に集落が営まれたのは当然と言え、同時期の遺構が調査地点周辺、特に調査区の西側に分布する可能性は高い。

(4) 古代の遺構SD20について

調査区南部で検出したSD20からは、大量の須恵器が出土した。坏蓋と坏の形状や、甕と横瓶、平瓶が出土した点などから、牛頸窠跡群のV期にあたるが、坏蓋の形状から、遺構が最終的に埋没した年代は8世紀前半とみられる(注25)。

その用途だが、調査区南東側の谷部に向かって直行する点から、SD20は排水を意識した溝であることが窺える。集落に伴う可能性があるが、調査地点でSD20以外の同時期の遺構は確認できない。また、坏を中心とする大量の須恵器をはじめ、鉄鏃やガラス小玉など、古墳の副葬品を髣髴とさせる出土遺物が目立つ。第II章で述べたように、調査地点周辺には今泉古墳や坂本1・2号墳、立石古墳、追分古墳などの古墳が点在する。未知の古墳の存在も想定できるが、SD20からは石室の残骸とみられる石材は出土しておらず、石室の掘方とは考えにくい。平面形が弧を描かないことから、周溝とも考え難い。周辺での調査例の増加をもって、再検討する必要がある。

【注】

- (1) 富永直樹「九州のおとし穴遺構について」久留米市教育委員会『安武地区遺跡群II』久留米市文化財調査報告書第60集 平成元年
- (2) 久留米市史編さん委員会・編『資料編 考古』久留米市史第12巻 久留米市 平成6年
- (3) 久留米市教育委員会『安武地区遺跡群XI』久留米市文化財調査報告書第128集 平成9年
- (4) 菊池実「縄文時代の陥し穴調査法と派生する諸問題 —大原II遺跡・村主遺跡検出の陥し穴群分析から—」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『研究紀要』4 昭和62年
- (5) 小郡市教育委員会『干潟向ヶ浦遺跡 干潟工業団地造成事業関係埋蔵文化財調査報告3』小郡市文化財調査報告書第119集 平成10年
- (6) 八女市教育委員会『八女東部地区埋蔵文化財発掘調査概報3』八女市文化財調査報告書第47集 平成11年
- (7) 山崎頼人「独立丘陵谷部における空間構成原理 —三沢北中尾遺跡10地点ピット群調査における私考—」小郡市教育委員会『三沢北中尾遺跡10B』小郡市文化財調査報告書第212集 平成18年
廣木誠「三沢北中尾遺跡10地点における落とし穴状遺構の分類と検討」『三沢北中尾遺跡10B』
- (8) 注1・2文献と同じ。

Ⅲ. 今泉遺跡第8次調査

- (9) 高橋信武「九州の陥し穴の変遷」 龍田考古学会『先史学・考古学論集 熊本大学考古学研究室創設二十周年記念論文集』平成6年
- (10) 古環境研究所「プラント・オパール分析調査報告」 久留米市教育委員会『安武地区遺跡群Ⅱ』久留米市文化財調査報告書第60集 平成元年
- (11) 注3文献と同じ。
- (12) 浅野陽吉「下迫分の中塚古墳及三瀨北部の古墳群？」 筑後郷土研究会『郷土研究筑後』第7巻第5号 昭和14年（昭和50年再版、筑後復刻委員会）
- (13) 久留米市教育委員会『安武地区遺跡群Ⅸ』久留米市文化財調査報告書第99集 平成7年
- (14) 山崎頼人「筑後地域における弥生集落の成立と展開」 埋蔵文化財研究会『第55回埋蔵文化財研究集会 弥生集落の成立と展開』平成18年
山崎頼人・沖田正大・廣木誠・柿本慈「松菊里型住居の変容過程 筑紫平野北部三国丘陵における住居動態」九州古文化研究会『古文化談叢』第59集 平成20年
- (15) 角浩行「住居跡」 糸島市教育委員会『三雲・井原遺跡Ⅷ —総集編—』糸島市文化財調査報告書第10集 平成25年
- (16) 星野恵美「弥生時代中期の住居跡について」 福岡市教育委員会『松木田遺跡群 第2次・第3次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第578集 平成10年
- (17) 小澤佳憲「玄海灘沿岸地域の弥生時代前半期集落の様相 —住居形態の変遷を中心に—」 埋蔵文化財研究会『第55回埋蔵文化財研究集会 弥生集落の成立と展開』平成18年
- (18) 前田義人「北九州市域の遺跡」 福岡考古懇話会『福岡考古』第14号 平成元年
- (19) 中間研志「松菊里型住居 —我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究—」 岡崎敬先生退官記念事業会『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論集』中巻 同朋社出版 昭和62年
- (20) 横尾義明「弥生時代」 久留米市史編さん委員会・編『久留米市史』第1巻 久留米市 昭和56年
- (21) 注2文献と同じ。
- (22) 弥生土器の年代は、以下の文献を参考にした。
片岡宏二「弥生時代中期の土器編年について —特に三国丘陵の資料を中心に—」 小郡市教育委員会『大板井遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第14集 昭和57年
山崎頼人・井上愛子「小郡市域における板付Ⅰ式並行期前後の様相」 埋蔵文化財研究会福岡世話人会『板付Ⅰ式期の再検討』平成16年
- (23) 平成5年度調査（調査番号：HKR-002/199326）。下記の文献に概報を掲載している。
久留米市教育委員会『安武地区遺跡群Ⅷ』久留米市文化財調査報告書第87集 平成7年
- (24) 原口重吉・野口勝人『安武町の史跡』 久留米市安武校区公民館広報部 昭和63年
- (25) 土師器や須恵器の年代は、以下の文献を参考にした。
松村一良「筑後国府跡の調査」 (財)古代学協会『古代文化』第35巻第7号 昭和58年
大庭孝夫「堂畑遺跡周辺における7世紀後半～8世紀末の土師器の変遷」 福岡県教育委員会『堂畑遺跡Ⅲ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第23集 平成17年
大野城市教育委員会『牛頸窯跡群 —総括報告書Ⅰ—』大野城市文化財調査報告書第77集 平成20年

IV. 念仏塚遺跡第8次調査

1. 調査の目的と経過

念仏塚遺跡第8次調査は、試掘確認調査で検出した遺構の分布と性格の把握、特に周辺の既存の調査で確認された遺構・遺物との関係を確認するために実施した。なお、対象地の北辺は市道の拡幅に伴い削平されたため、対象地から除外した。

令和4年7月4日に調査区の縄張りを行い、台風4号に伴う荒天を挟み、7月7日から重機で表土剥ぎを開始した。地表下約0.2～0.7mで遺構面に達し、対象地内で排土置き場を確保する必要から、対象地の西半分を8日まで表土剥ぎを実施した。表土剥ぎと並行して、現場作業員を7月7日から投入し、7月11日まで遺構検出を行った。7月12日から、遺構の掘り下げと測量、写真撮影などの記録作業に入った。折からの戻り梅雨や7月18日の線状降水帯を伴う豪雨で進捗は芳しくなかったが、近代以降の遺構または重機の爪痕といった攪乱が大半を占めるため、遺構の掘り下げは7月25日までに完了した。調査区的全景は、7月26日に高所作業車を用いて撮影した。

この時点で近世以降の遺構しか残存せず、その分布も希薄で反転しても成果が得られる可能性が低い点、試掘で検出した遺構を把握し調査の目的を達成したと判断できる点、7月下旬に入り酷暑が著しく、作業中の熱中症のリスクが高い点などから、担当内の協議で調査区の反転を行わず、埋め戻して発掘調査を終えることにした。7月27日から重機で調査区の埋め戻しを始め、途中地震痕跡の断ち割り撮影、測量を行った。埋め戻しは翌28日まで行い、7月29日に調査器材を撤収し、現地での発掘調査を完了した。対象面積約540㎡のうち、調査面積は239㎡である。

2. 調査の記録

(1) 基本層序

調査地点の現況は防草シートが貼られた更地だが、以前は住宅が建っていた。地表は住宅取り壊しの際の瓦礫を含む表土が覆い、調査区南部では碎石の層を挟む。この表土直下の標高8.1～8.6mで地山に至り、遺構を検出した。地山は、鉄分や黒色粒子を含む浅黄色土や明黄褐色土で、いずれも砂質を帯び固く締まる。

(2) 検出遺構

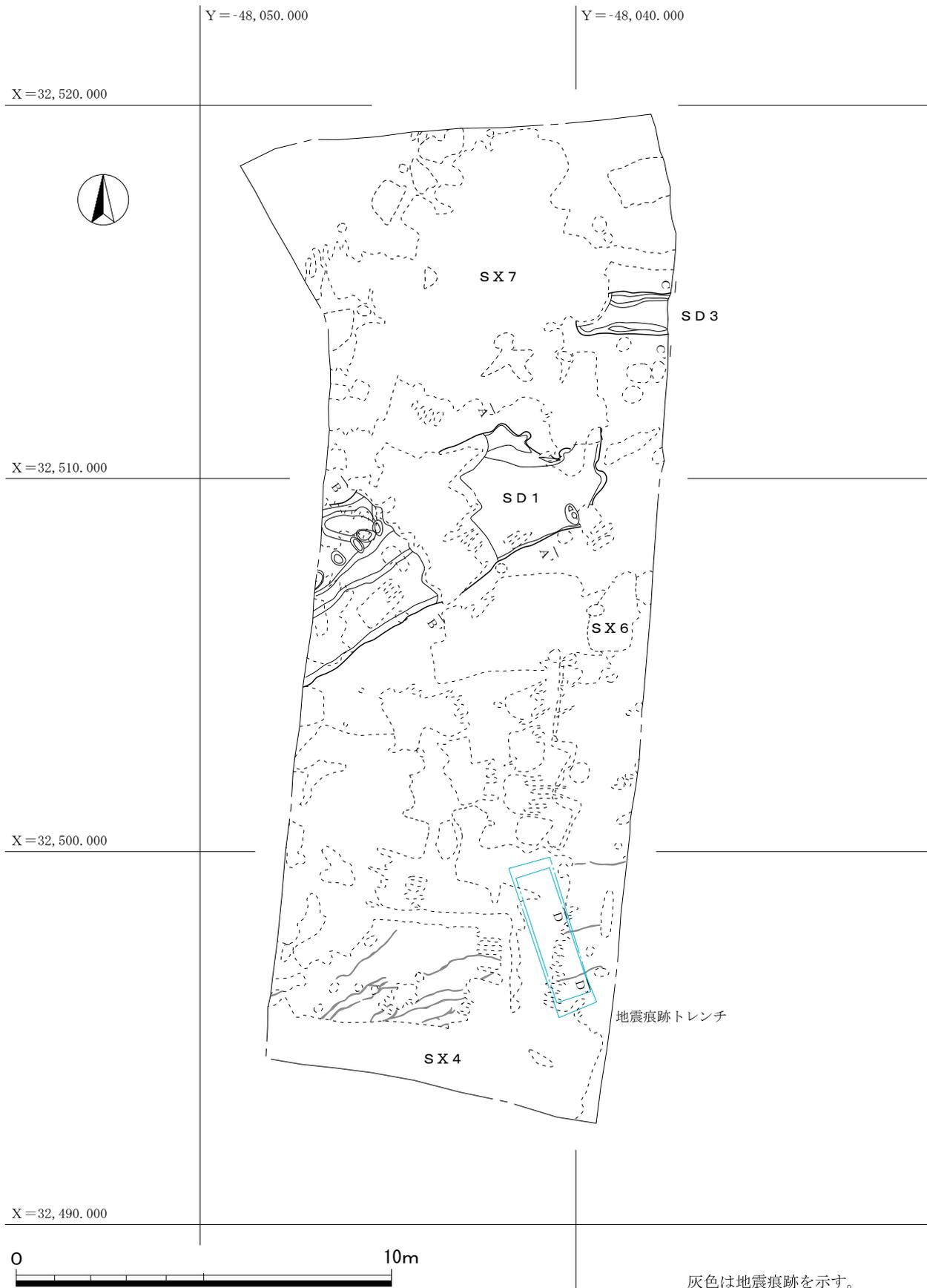
先述のとおり、近代以降の溝や廃棄土坑、住宅取り壊しの際の攪乱などが目立ち、遺構密度は低い。検出した遺構は、近世の溝2条と地震痕跡のみである。

溝

SD1 (第20・21図、図版19)

調査区中央部西寄りで検出した遺構である。遺構の東端は攪乱が後出し、西端は調査区外に及ぶ。検出したのは長さ10.65mで、主軸はN—59～62°—E、上端幅は最大で3.82m、下端幅0.30～2.55mを測る。底面は段や複数のピットを有し、南西に向かって深くなる傾向にあり、深さは最大

IV. 念仏塚遺跡第8次調査



第20図 念仏塚遺跡第8次調査遺構配置図 (1/150)

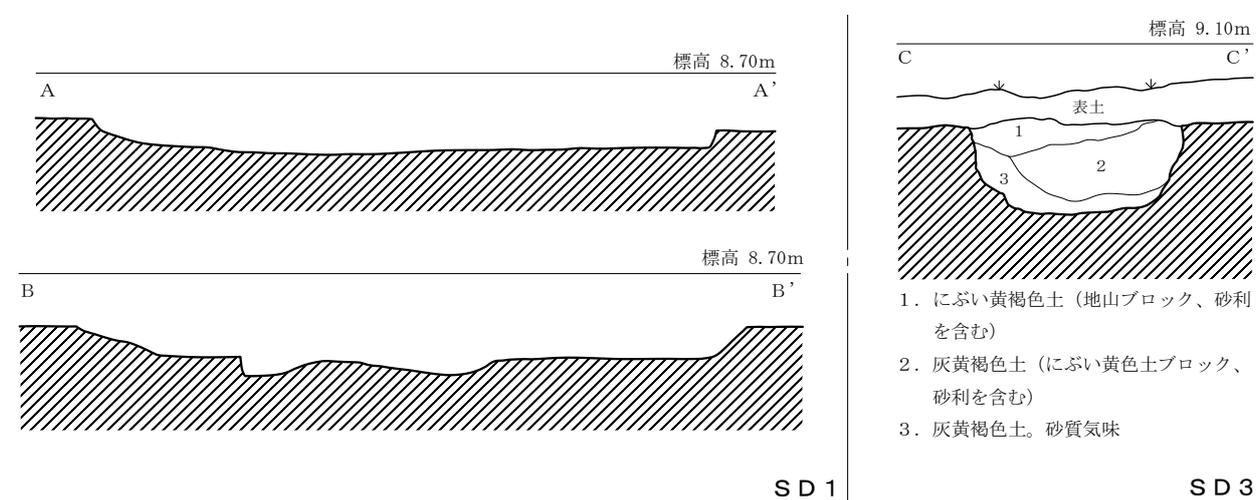
で0.34mを測る。埋土は黄褐色砂質土で、鉄分を含む。遺物は、土師器の壺や火鉢、黒色土器A類の細片、須恵器の甕や播鉢、染付の碗の破片、黒曜石や安山岩の剥片や片岩の礫が出土した。

SD3 (第20・21図、図版19)

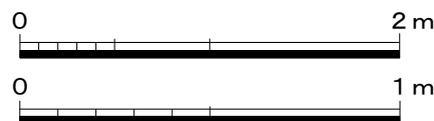
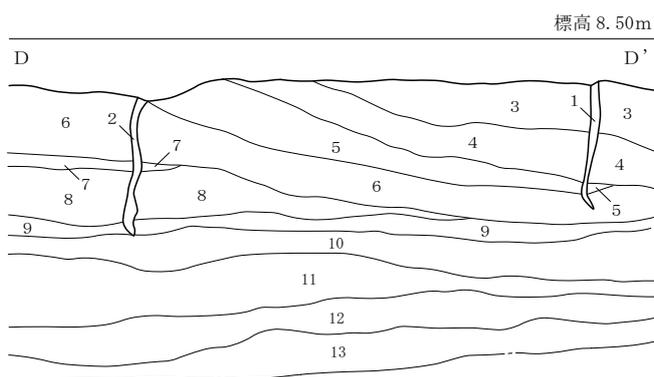
調査区北東部壁際で検出した遺構である。西端は攪乱が後出し、東端は調査区外に及ぶため、長さ2.53mのみ検出した。主軸はN-89°-Eで、上端幅1.12~1.16m、下端幅0.38~0.76mを測る。遺構の東に向かって深くなる傾向にあり、西部で深さ0.34mを測る。埋土は砂利を含む黄褐色土で、砂質気味で鉄分を含み固い。遺物は、土師器の坏や鉢の細片、丸瓦の破片が出土した。

地震痕跡 (第20・21図、図版19)

調査区の南部で検出した地割れ痕跡である。重複する全ての攪乱が後出する。主軸はN-51°~72°-Eで、検出時の長さは最大で2.30mを測る。トレンチで検出した箇所は深さは0.35mを測り、砂質土を含む暗褐色土で満たされていた。



1. 暗褐色土（灰褐色土、灰黄褐色砂質土を含む）地割れ痕跡
2. 暗褐色土（にぶい黄褐色砂質土を含む）地割れ痕跡
3. 明黄褐色土（黄色土、淡黄色砂質土、浅黄色砂質土、黒色粒子を含む）砂質
4. 浅黄色土（にぶい黄褐色土、黄色土ブロック、黒色粒子、鉄分を含む）砂質
5. にぶい黄色土（にぶい黄色土ブロック、浅黄色土ブロック、明黄褐色土ブロック、黒色粒子を含む）砂質
6. 明黄褐色土（黄色、黄褐色、浅黄色の砂質土ブロックを含む）砂質
7. 黄色土~明黄褐色粘質土（鉄分を含む）若干砂質。火山灰の堆積
8. にぶい黄色土（暗褐色土ブロック、黄色土ブロックを含む）砂質
9. 黄色土+灰白色土（暗褐色土ブロック、にぶい黄色土ブロックを含む）若干砂質。火山灰の堆積
10. 灰黄褐色土（明黄褐色土、黒褐色土を含む）砂質
11. にぶい黄色土（明黄褐色土、黒褐色土を含む）砂質
12. 灰黄褐色土（黄褐色土、黄色土を含み、礫を多く含む）鉄分集中する箇所あり、砂質
13. 灰黄褐色土、灰白色粘質土、黄色土、灰黄褐色土を含む、鉄分集中する箇所あり、砂質

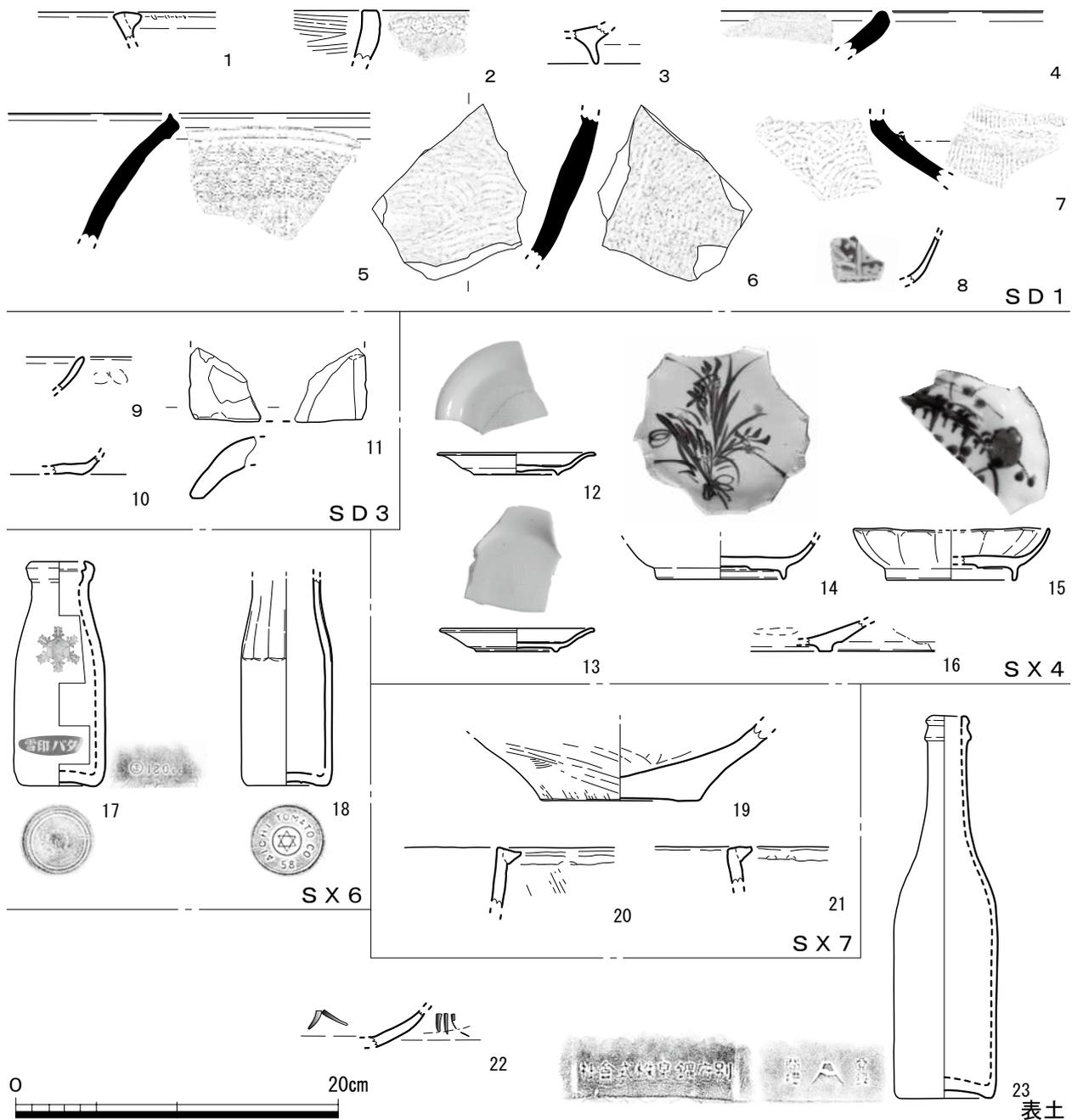


第21図 SD1断面図、SD3・地震痕跡トレンチ土層図 (1/40、1/20)

(3) 出土遺物 (第22図、第5表、図版19・20)

遺物の総量はビニール袋4袋で、大半が近代以降の遺構や攪乱から出土した。遺物の種類は多様で、弥生土器や古代から近世の土師器、古代の須恵器、中世の貿易陶磁器、近世以降の陶磁器、瓦や煉瓦の破片、黒曜石や安山岩の剥片と石核、近代のガラス製品からなる。個別の法量や色調、調整などの詳細については、第5表を参照頂きたい。以下、各遺物の特徴について簡単に補足する。

1～8はSD1出土遺物である。1は弥生土器の甕の口縁部片で、断面三角形の刻目突帯を有する。2と3は土師器で、2は菊花文の陰刻を伴う火鉢の口縁部片、3は埴の底部片である。4～7は須恵器で、5～7の甕は調査区隅からまとまって出土した。4は播鉢の口縁部片で、わずかに播目が見



第22図 念仏塚遺跡第8次調査遺物実測図 (1/4)

第5表 念仏塚遺跡第8次調査出土遺物観察表

遺物 No.	出土 遺構	種別	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整・文 様			胎 土 材	備 考	登録 番号
				口縁径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)	外面 (凸面)	内面 (凹面)	外面 (凸面)	内面 (凹面)	底面・高台			
1 第22図	SD 1	弥生土器	甕	—	—	(1.8)	浅黄橙色～橙色		横ナデ 刻目突帯	横ナデ	—	雲母、角閃石、 微砂粒を含む	口縁部片 摩耗	202206 000001
2 第22図	SD 1	土師器	火鉢	—	—	(3.2)	橙色～ 浅黄褐色	橙色	横ナデ 菊花文陰刻	横ナデ ハケ目	—	雲母、微砂粒、 赤色粒子を含む	口縁部片	202206 000002
3 第22図	SD 1	土師器	埴	—	—	(2.35)	橙色～黄灰色		回転ナデ	回転ナデか	回転ナデ	精良	底部片	202206 000003
4 第22図	SD 1	須恵器	掃鉢	—	—	(2.8)	灰白色～ 灰黄色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ ナデ、掃目	—	精良	口縁部片。わずかに掃 目あり	202206 000007
5 第22図	SD 1	須恵器	甕	—	—	(7.9)	灰色～ 黄灰色	灰色～ 暗灰色	回転ナデ 波状櫛描文	回転ナデ ナデ	—	雲母、微砂粒、 砂粒を含む	口縁部片	202206 000004
6 第22図	SD 1	須恵器	甕	—	—	(11.0)	暗灰色	灰色～ 褐灰色	平行文叩き	青海波文叩き 平行文叩き	—	精良 雲母を含む	胴部片	202206 000006
7 第22図	SD 1	須恵器	甕	—	—	(4.0)	オリーブ 灰色～灰色	灰色～ 緑灰色	平行文叩き 貼付突帯	回転ナデ 青海波文叩き	—	ほぼ精良	肩部片	202206 000005
8 第22図	SD 1	染付	鉢	—	—	(2.9)	染付		面取り 花唐草文	区画文 波文、梅花文	—	精良	底部片	202206 000008
9 第22図	SD 3	土師器	坏	—	—	(3.05)	灰黄褐色	にぶい 黄褐色	回転ナデ 指オサエか	回転ナデ	—	ほぼ精良 雲母を含む	口縁部片	202206 000009
10 第22図	SD 3	土師器	坏	—	—	(1.1)	浅黄褐色		回転ナデ 摩耗	回転ナデか 摩耗	糸切底 摩耗	精良 雲母を含む	底部片 摩耗著しい	202206 000010
11 第22図	SD 3	瓦	丸瓦	(4.6)	(4.5)	1.60	暗灰色	暗灰色 ～灰黄色	ナデ	布目 ナデ消し	ナデ消し	精良 雲母を含む	隅部片	202206 000011
12 第22図	SX 4	白磁	小皿	(9.4)	(5.2)	1.4	灰白色		回転ナデ	回転ナデ	寿文型押 高台砂目付着	精良	瀬戸美濃系。内面型押、 13と同形。明治以降	202206 000012
13 第22図	SX 4	白磁	小皿	(9.4)	(5.2)	1.45	灰白色		回転ナデ	回転ナデ	寿文型押 高台砂目付着	精良	瀬戸美濃系。内面型押、 12と同形。明治以降	202206 000015
14 第22図	SX 4	染付	小皿	—	7.8	(2.4)	染付	染付	回転ナデ	菖蒲文	ハリ跡5カ所 蛇ノ目凹型高台	精良	肥前系、底部片 19世紀後半	202206 000013
15 第22図	SX 4	染付	小皿	(12.0)	(8.1)	3.2	染付	染付	型押成形 口縁部具須	梅枝文	蛇ノ目凹型高台	精良	肥前系 19世紀後半	202206 000016
16 第22図	SX 4	陶器	小皿	—	—	(1.9)	灰オリーブ ～灰黄褐色	オリーブ 灰色	一部露胎 削り出し高台	施釉 砂目あり	高台に糸切痕	精良	肥前系。底部片 1610～1650年代	202206 000014
17 第22図	SX 6	ガラス 製品	牛乳瓶	3.2	4.4	14.0	無色透明		陽刻 「正 180cc」		陽刻「H 8」	精良	印刷「雪印バター」 1956～1968	202206 000017
18 第22図	SX 6	ガラス 製品	調味料瓶	—	5.6	(12.9)	無色透明		面取り	鉄分付着	籠目「AICHI TOMATO CO.58」	精良	口縁部欠損 1925～1957	202206 000018
19 第22図	SX 7	弥生土器	大甕	—	(9.8)	(4.8)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	ハケ目 横ナデ	ナデ	ハケ目か 摩耗	角閃石、砂礫、 砂粒を含む	底部片。甕柄か	202206 000021
20 第22図	SX 7	弥生土器	甕	—	—	(3.7)	明赤褐色～ にぶい褐色	橙色	横ナデ 貼付突帯	ナデ	—	精良。角閃石、 砂粒、礫を含む	口縁部片。外面黒斑	202206 000019
21 第22図	SX 7	弥生土器	甕	—	—	(2.3)	にぶい褐色 ～灰色	橙色	横ナデ 貼付突帯	横ナデ	—	精良。角閃石、 砂粒を含む	口縁部片	202206 000020
22 第22図	表土	貿易 陶磁器	碗	—	—	(2.3)	灰オリーブ 色	灰オリーブ 色	一部施釉 ヘラ描文	施釉 ヘラ描文	—	精良	底部片。同安窯系青磁 碗Ⅲ-1c類	202206 000023
23 第22図	表土	ガラス 製品	飲料瓶	2.1 ～2.2	5.5 ～5.6	23.8 ～24.0	濃緑色透明		「登録商標」 「別府薬果 株式会社」		擦痕	多量の気泡 を含む	全体的に歪む	202206 000022

られる。5は口縁部で、波状櫛描文を施す。6は胴部片、7は格子目叩きの上から突帯を貼り付けた肩部片である。8は染付の鉢の細片である。

9～11はSD 3出土遺物である。9と10は土師器の坏で、9は口縁部片、10はわずかに糸切の痕跡が残る底部片である。11は丸瓦の隅部の破片で、黒色を呈するが、表面が銀化していない。また、内面の布目はナデ消している。

12～16は、調査区南端の段落ちSX 4から、煉瓦や土管、ガラス瓶と共伴して出土した遺物である。12と13は同形の白磁である。瀬戸美濃系の型打成型の小皿で、内面見込みに寿文を施す。14と15は染付の小皿で、蛇の目凹形高台を施す。16は陶器の小皿の底部片で、内面に砂目が残る。

17～21は、攪乱からの出土遺物である。17と18は調査区中央部東寄りの攪乱SX 6から、大量の煉瓦やスレート、焼土と共に出土した。17は牛乳瓶で、雪印の商標と「雪印バター」の印刷から、雪印乳業(現・雪印メグミルク)の牛乳瓶であることが分かる。底部付近に昭和26年(1951)に公

布された計量法に基づき昭和31年（1956）以降のガラス瓶に施されるようになった「丸に正」の陽刻がある（注1）。底部に広島硝子工業の陽刻を有することから、昭和31年から昭和43年（1968）頃に使われた牛乳瓶である（注2）。18は底部に「丸に籠目」の商標と「AICHI TOMATO CO.」の陽刻がある。商品名の陽刻は無いが、大正14年（1925）から昭和32年（1957）まで愛知トマト産業（現・カゴメ）で用いられた、トマトケチャップのガラス瓶である（注3）。19～21は弥生土器で、調査区北部の攪乱S X 6から出土した。19は底部片で、法量から大甕、特に甕棺の可能性はある。20と21は、形状と色調から同一個体の可能性が高いが、接合しないため別個に報告する。いずれも甕の口縁部片で、突帯を有する。

22と23は、表土から出土した遺物である。22は貿易陶磁器の破片で、青磁碗の破片である。外面下部は露胎で、内外にヘラ描文を有する。同安窯系青磁碗のⅢ-1 c類にあたり、12世紀中頃から後半の年代が付与できる（注4）。23は調査区北西隅で表土剥ぎ中に出土した、緑色透明の飲料瓶である。全体的に傾く上に、気泡を大量に含み底部は厚さが不均等で、器壁が曲面を帯びずに平坦な箇所があるなど歪みが著しい。底部付近に「登録商標 別府鑛泉株式會社」と山の陽刻を有する。

3. 総括

既に述べたように、攪乱が多く検出した遺構は極端に少ない。第Ⅱ章で述べたように、念仏塚遺跡は過去7回の発掘調査（注5）と第8次調査後に実施した第9次調査で、縄文時代の落とし穴状遺構や9～10世紀の掘立柱建物、廃棄土坑を伴う鍛冶に用いられたとされる遺構が見ついている。しかし、これらの調査地点は今回の調査地点の北方から北東側、約1 m高い場所に位置する。地震痕跡トレンチの土層では、地山が南方に向かって傾斜して堆積しており、調査区が低台地の南端に位置することを示唆する。しかも包含層が残存しないことから、調査地点が削平されている可能性が高い。今回の調査地点は標高や遺構の残存状況から、遺跡の周辺域に位置し、削平も相まって遺構が少ない場所だと判断できる。

2条の溝のうち、SD1は須恵器がまとまって出土したが、近世の土師器火鉢や染付の破片も出土したことから、近世以降の埋没が想定できる。東西方向に走るSD3も、出土遺物が細片ばかりだが、土師器の胎土や瓦の色調などから、近世の遺構と考えられる。

地割れ痕跡は、第Ⅱ章で触れた地割跡や噴砂跡といった地震痕跡と同じ性格の遺構である。これらの地割跡は、いずれも走行方位がN-65～75°-Eに収まることが指摘されている（注6）。今回検出した地割跡は、N-45°-Eとほぼ東西方向の地割跡が各1条あるほかは、大半がN-70°-Eを測り、同じ傾向を示す。

攪乱と表土からは、弥生土器や須恵器、貿易陶磁器が出土したことから、周辺に弥生時代から中世の遺構があったことが想定できる。しかし、出土遺物の主体は近世以降の土師器や陶磁器などで、今日まで続く安武本の集落に伴う遺物と考えられる。瀬戸美濃系の型打成型の小皿（第22図12・13）は、同形品が久留米城外郭遺跡第1次調査で明治時代の土坑（注7）から、第2次調査で明治時

代から大正時代の土坑から（注8）、同遺跡第10次調査で明治時代のカマドから（注9）、京隈侍屋敷遺跡第7次調査で明治時代の土坑から（注10）出土しており、段落ちの埋没が近代以降であることの証左と言える。

このほか、複数のガラス瓶が出土したが、別府鉱泉の陽刻があるガラス瓶（第22図23）が注目できる。管見の限り、同形品は江古田遺跡（東京都中野区）（注11）や青柳河岸跡（山梨県南巨摩郡富士川町）（注12）で出土した。瓶に書かれた別府鉱泉株式会社は、大分県速水郡別府町（現・別府市）で別府温泉の鉱水や炭酸鉱水などを販売していた会社で、大正14年（1926）の広告が残る。当時の別府には、別府鉱泉のほかにも鉱水や炭酸水、サイダーなどを製造販売する会社が複数あったという。これらの会社の大正8年（1919）の売り上げは50円（以下、当時の貨幣価格）だったが、わずか3年後の大正11年（1922）には10万円を超え、大正14年（1925）には14万円に至った。その販路は日本国内に留まらず、朝鮮半島や中国大陸、遠く北米にも及んだとされており、今回出土した瓶は久留米もその範囲だった物証と言える（注13）。

【注】

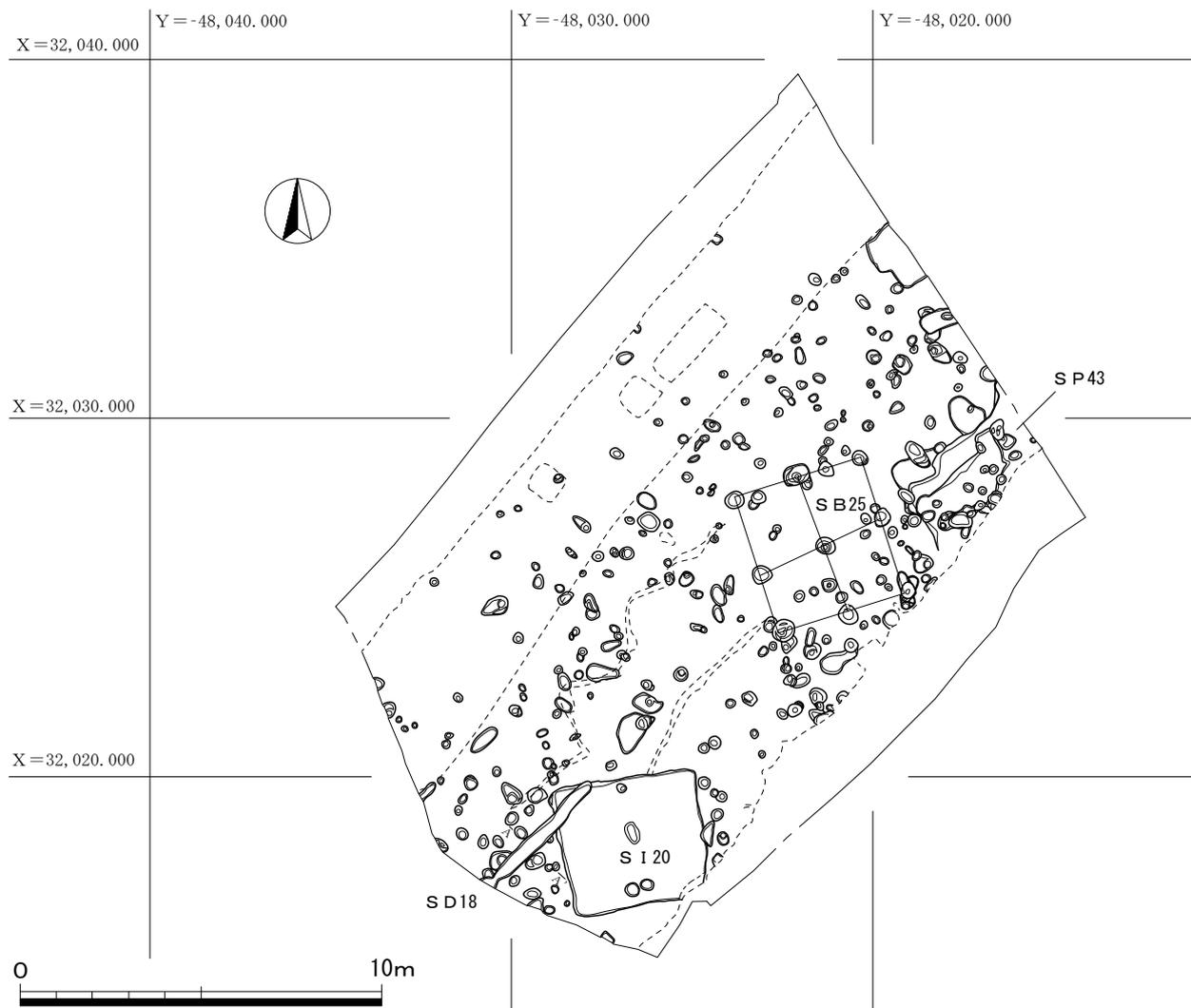
- (1) 桜井隼也『ガラス瓶の考古学』 六一書房 平成18年
森貴教「牛乳瓶の分類と編年 一福岡県を対象にして一」 神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第50巻第6号 平成29年
- (2) 雪印乳業『雪印乳業史』第三・四巻 昭和44・50年
- (3) カゴメ社会対応室100年企画グループ・編『カゴメ100年史』 カゴメ 平成11年
- (4) 太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV 一陶器分類編一』太宰府市の文化財第49集 平成12年
- (5) 久留米市教育委員会『安武地区遺跡群VI』久留米市文化財調査報告書第72集 平成4年
久留米市教育委員会『安武地区遺跡群X』久留米市文化財調査報告書第114集 平成8年
久留米市教育委員会『平成10年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第150集 平成11年
久留米市教育委員会『平成13年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第183集 平成14年
久留米市教育委員会『平成17年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第231集 平成18年
久留米市教育委員会『平成22年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第318集 平成23年
久留米市教育委員会『久留米市埋蔵文化財調査集報XVI』久留米市文化財調査報告書第369集 平成28年
- (6) 久留米市教育委員会『久留米市埋蔵文化財調査集報XI』久留米市文化財調査報告書第278集 平成21年
- (7) 久留米市教育委員会『久留米城外郭 佐々木家屋敷跡』第96集 平成7年
- (8) 久留米市教育委員会『久留米城外郭 松田家屋敷跡』第124集 平成9年
- (9) 久留米市教育委員会『久留米城外郭遺跡 第10次調査』久留米市文化財調査報告書第234集 平成18年
- (10) 久留米市教育委員会『京隈侍屋敷遺跡 一第7次調査一』久留米市文化財調査報告書第266集 平成20年
- (11) 旧国立療養所中野病院跡地遺跡調査会・中野区教育委員会『江古田遺跡Ⅰ発掘調査報告書』 平成11年
- (12) 山梨県教育委員会・国土交通省関東地方整備局『青柳河岸跡 一増穂地区築堤護岸整備事業に伴う青柳河岸跡発掘調査報告書一』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第259集 平成21年
- (13) 別府鉱水については、主に下記の文献を参考にした。
別府市教育会『別府市誌』 昭和8年

V. 今泉遺跡第9次調査

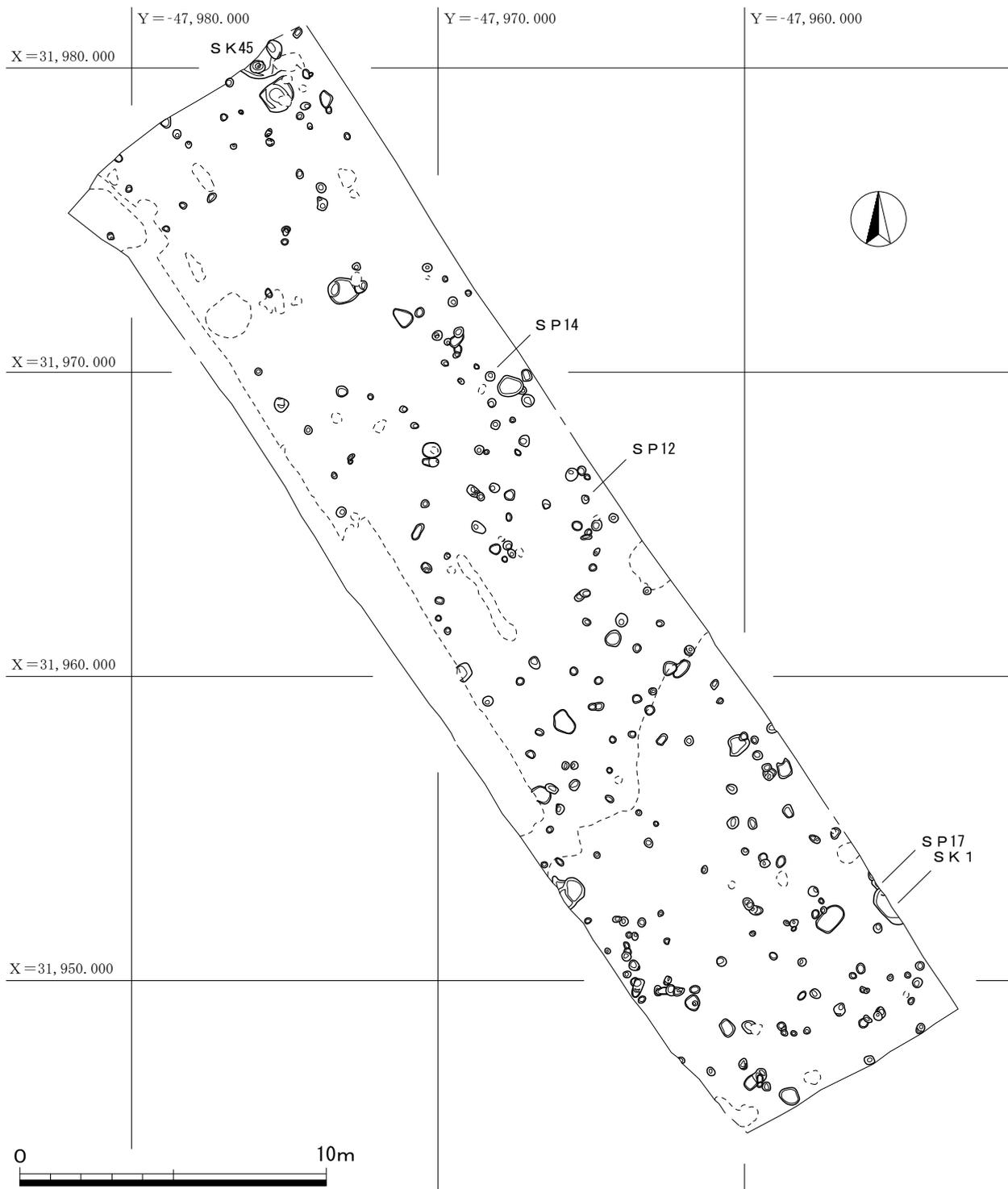
1. 調査の目的と経過

今泉遺跡第9次調査は、隣接する第8次調査や令和4年10月16日の試掘確認調査で検出した遺構の分布を確認し、その性格を把握するために実施した。なお、調査区は第3図のとおり、谷筋を挟み南北の2区に分けて設定した。11月11日、調査区の縄張りと駐車場の除草を行い、重機で南区の表土剥ぎを開始した。地表下約0.3～1.0mで遺構面に達し、週休を挟み14日まで表土剥ぎを実施した。現場作業員は11月14日から投入して、15日まで遺構検出を行った。同日から、遺構の掘り下げと測量、写真撮影などの記録作業に入った。遺構密度は非常に低く、南区の全景写真は11月22日に脚立を用いて撮影した。

追加の調査などを挟み、11月28日に北区の表土剥ぎを開始した。地表下約0.3～1.0mで遺構面に達し、30日から現場作業員を投入して遺構検出を始めた。同日、南区の北西側にある安武町安武本1458-3の表土剥ぎに入ったが、地表下約3.1mでようやく地山に到達する上に、帯水を伴う青



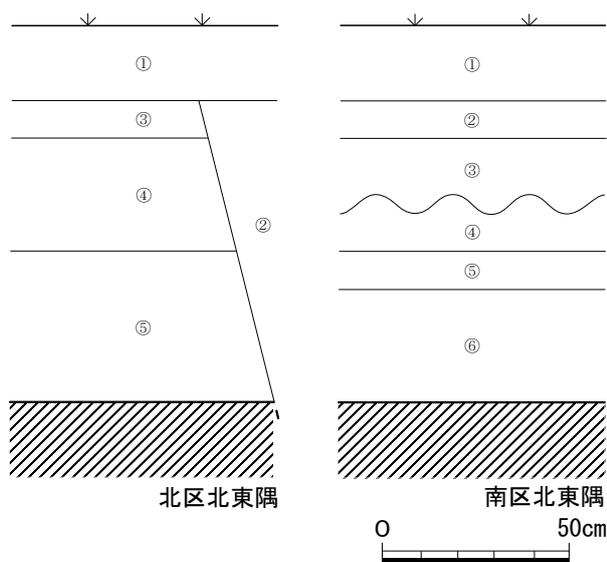
第23図 今泉遺跡第9次調査北区遺構配置図 (1/200)



第24図 今泉遺跡第9次調査南区遺構配置図 (1/200)

灰色土の地山には遺構が無かった。そのため、谷地形の底部で遺構は無いと判断し、同日の内に埋め戻した。北区の遺構検出は12月1日までに行い、直ちに記録作業に入った。12月9日に、ドローンを用いて南区と北区の全景を撮影した。

この時点で、北区の南東側に遺構が分布する可能性が高くなったことから、週休を挟んだ12月12日から13日まで重機で北区を拡張し、追加の記録作業を行った。併せて、南区の埋め戻しを12



第25図 調査区基本層序図 (1/20)

耕作土直下には、②砂利を含む黄褐色や灰色の水田床土が0.1m伴う。南北区ともに、調査区の北西部は床土直下の標高7.7~7.8mで地山に至る。南区北東端では、水田床土の下に③砂利と黒色粒子を含む灰黄褐色土が0.15~0.2m堆積し、④土器片を含む褐灰色土と灰黄褐色土からなる0.1~0.15mの層に至る。③層と④層の間は土層が波打っており、耕作に伴う畝跡と考えられる。④層の下層は、⑤砂利を少量含む0.1mの灰黄褐色土と⑥橙色粒子を含む0.25mの黒褐色土を経て、標高8.1~9.5mで地山に至る。⑥層は包含層とみられ、調査区の北西部では確認できなかった。

北区北東隅では、③水田床土の下層に④砂利や土器片を含むにぶい黄褐色土が0.3m堆積し、⑤砂利や土器片を含む0.4mの黒褐色土を経て、標高7.0~7.85mで地山に至る。なお、南東壁は②ビニールやアスファルトなどの破片を含む攪乱が水田床土に後出する。

遺構は地山で検出した。地山は、南区では橙色から淡黄色を帯びるやや砂質の粘質土で、北区では橙色から浅黄橙色の粘質土だった。

(2) 検出遺構

検出した遺構は、掘立柱建物1基と溝1条、竪穴建物1基、土坑2基、ピット多数である。

掘立柱建物

SB25(第26・28図、図版22)

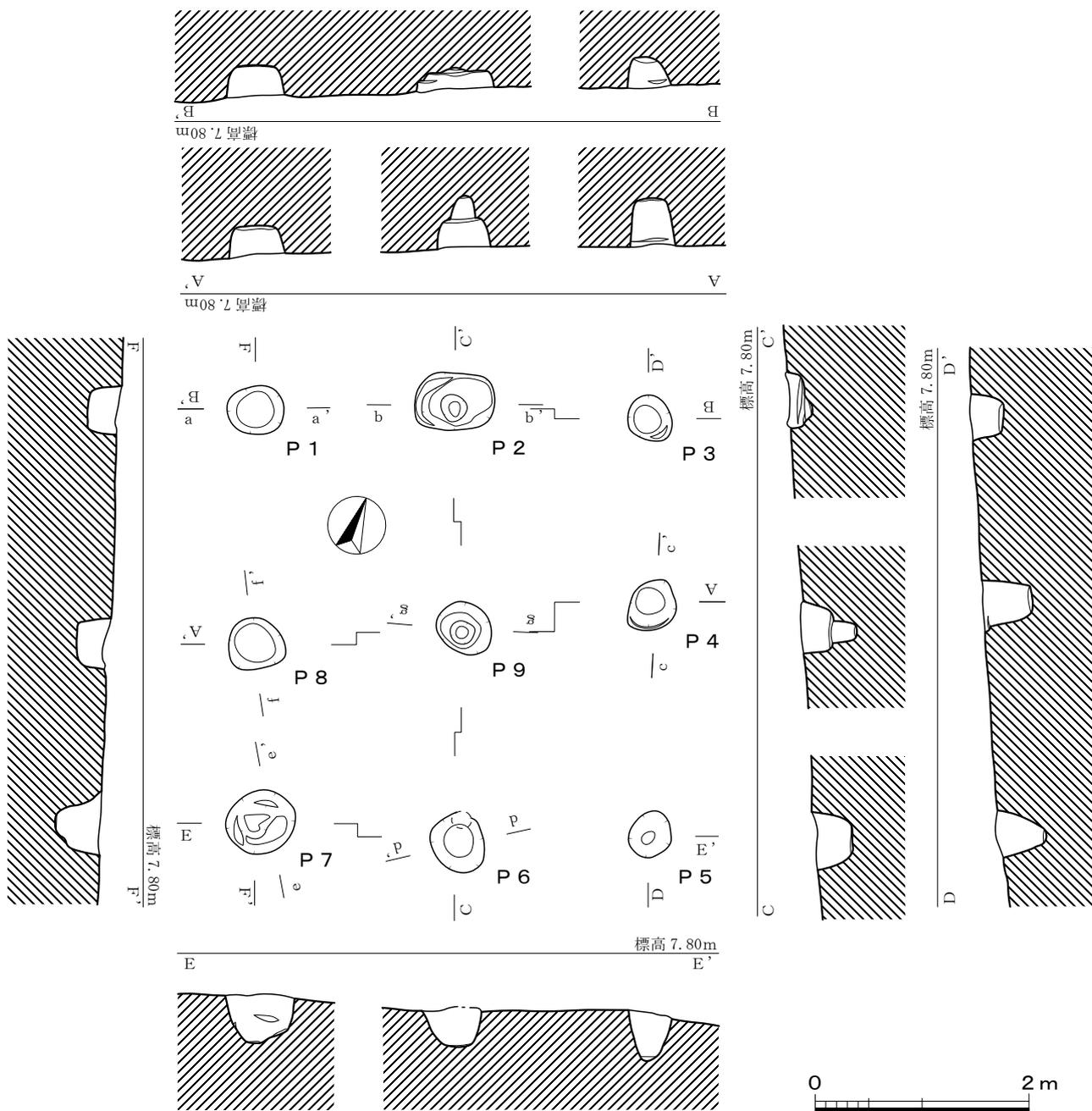
北区中央部の東寄りで検出した遺構である。検出したのは、南北方向と東西方向ともに2間分である。P1~P3とP5~P7の距離は3.9~4.0m、その他のピットの間の距離は3.7mを測る。柱間の間隔は、P1-P8間とP4-P5間で2.2m、P6-P7間とP4-P5間で1.9mを測るほかは、1.8mを測る。計画方位はN-19°-Wである。柱穴は歪な円形から隅丸方形の平面を有し、上面径0.39~0.72m、底面径0.10~0.43m、深さ0.24~0.51mを測る。P2~P4とP7、P9は、底面に複数の段を有する。埋土は第28図のとおりで、土層を観察したP1~2・4・6~9では、柱痕跡とみられる黒褐色土または黄褐色土系の埋土を確認した。掘方は、褐灰色土や

月13日から15日まで行った。拡張部を含む北区の全景は、12月20日にドローンで撮影した。12月22日から23日まで北区の埋め戻しを行い、12月26日に調査器材を撤収して、現地での発掘調査を完了した。調査面積は、北区が272m²、南区が339m²で、合計611m²に及ぶ。

2. 調査の記録

(1) 基本層序 (第25図、図版22)

調査地点の現況は、畔道と水田だった。いずれも地表は0.2~0.3mの①表土または耕作土が覆い、明黄褐色土や砂利を含む。南区北東隅の



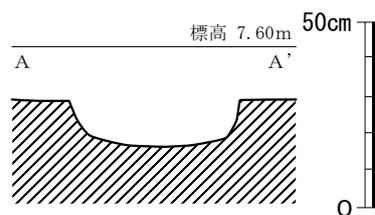
第26図 SB25実測図 (1/60)

黄褐色土が主体である。遺物は、土師器の坏や甕の細片、須恵器の細片、鉄製品が各1点出土したのみである。

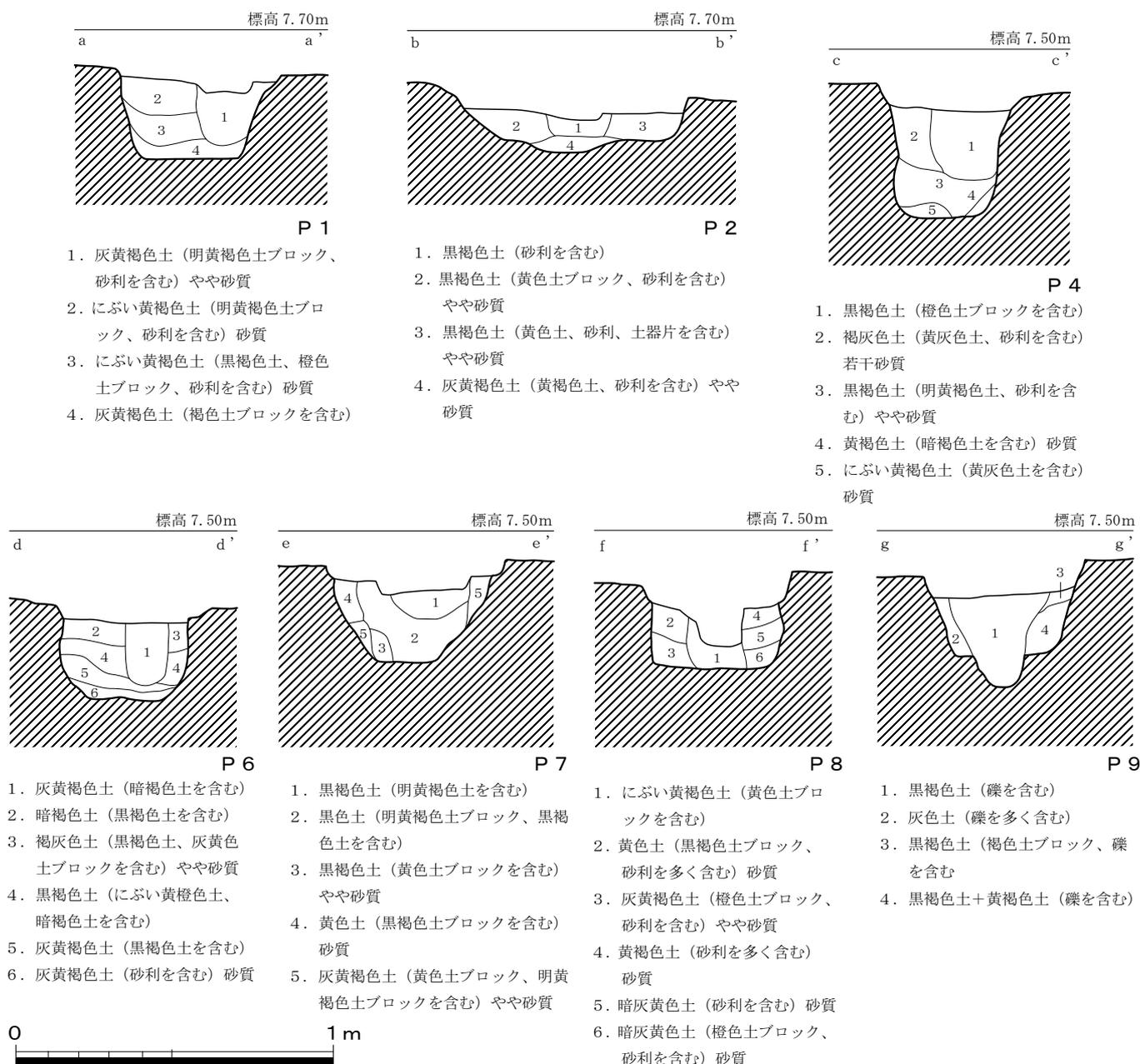
溝

SD18 (第23・27図、図版22)

北区南部隅で検出した遺構である。南端は調査区外に及ぶため、検出したのは長さ4.11mのみである。SI20やピットなど周辺の遺構に後出する。主軸はN-44~46°-Eで、上端幅0.20~0.45m、下端幅0.12~0.36mを測る。深さは最大で0.12mを測



第27図 SD18断面図 (1/20)

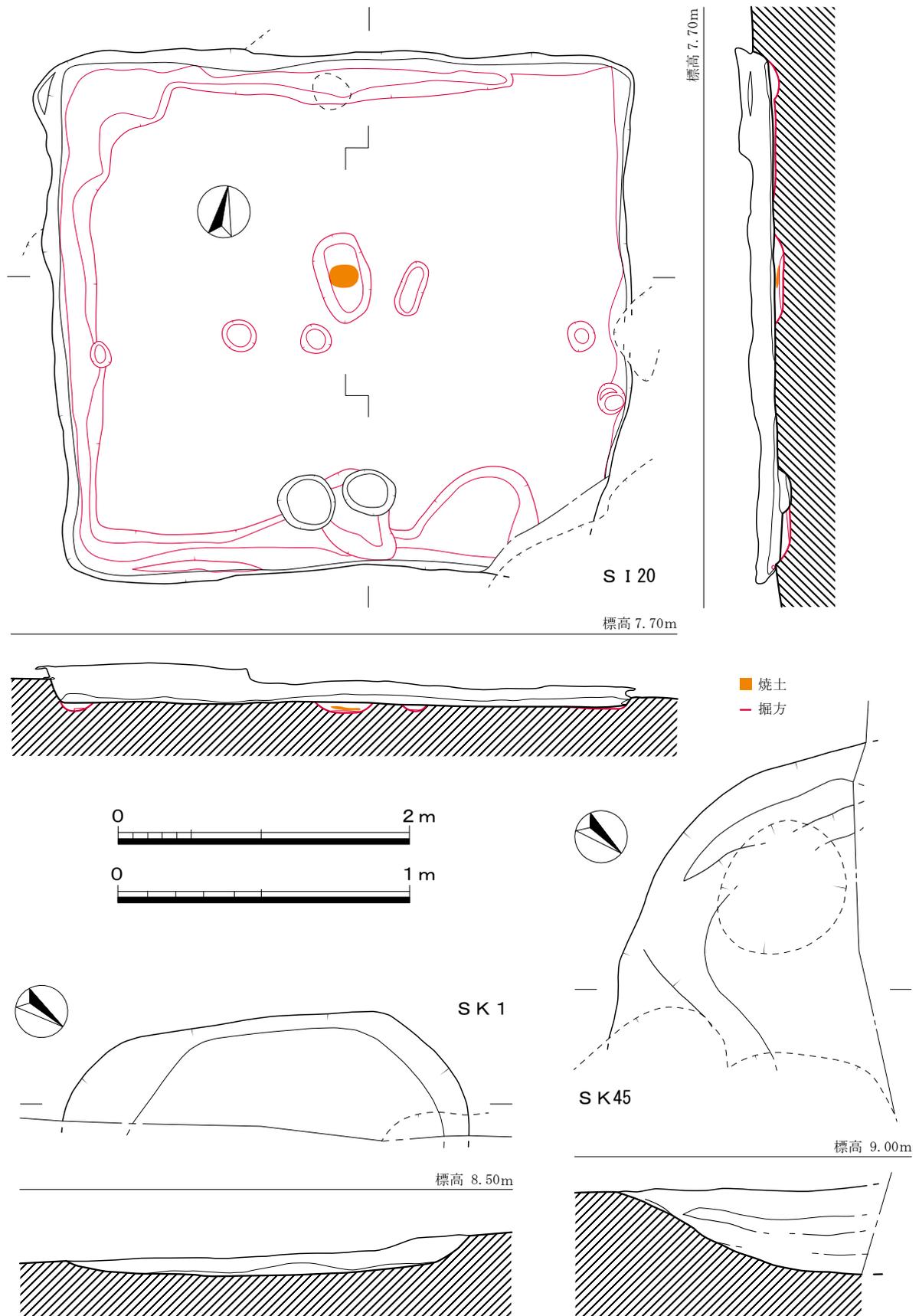


第28図 S B25土層図 (1/20)

る。埋土は、灰黄褐色土とにぶい黄褐色土を含む黒褐色土だった。出土遺物は、摩耗した土師器甕の胴部片3点のみである。

S I 20 (第29図、図版23)

北区南端で検出した遺構である。方形の平面を有するが、南東隅は石垣の掘方が後出し、SD18やピットが後出する。東西4.14m、南北3.60mを測る。東辺を除く三方では側溝を確認したほか、掘方を検出した。遺構の深さは0.28mだが、掘方を含む深さは最大で0.47mを測る。明瞭な柱穴は確認できなかったが、中央部には長さ0.62m、幅0.36mのピットを有する。ピットの深さは8cmにすぎないが、焼土を確認した。埋土は、黒褐色土や明黄褐色土のブロックを含む灰褐色土や明黄褐色土で、若干砂質を帯びる。遺物は、土師器の高坏や甕の破片、被熱した礫が出土した。



第29図 S I 20、SK 1・45実測図 (1/40、1/20)

土坑

SK1 (第29図、図版23)

南区北東部壁際で検出した。ピットが後出し、遺構の北半は調査区外に及ぶが、楕円形の平面を有するとみられる。検出したのは長軸1.39m、短軸0.45mで、深さは最大で0.14mを測る。埋土は、少量の砂利とにぶい黄橙色土ブロックを含む灰黄褐色土である。埋土からの出土遺物は無いが、遺構検出時に土師器の細片と須恵器碗の高台片が出土した。

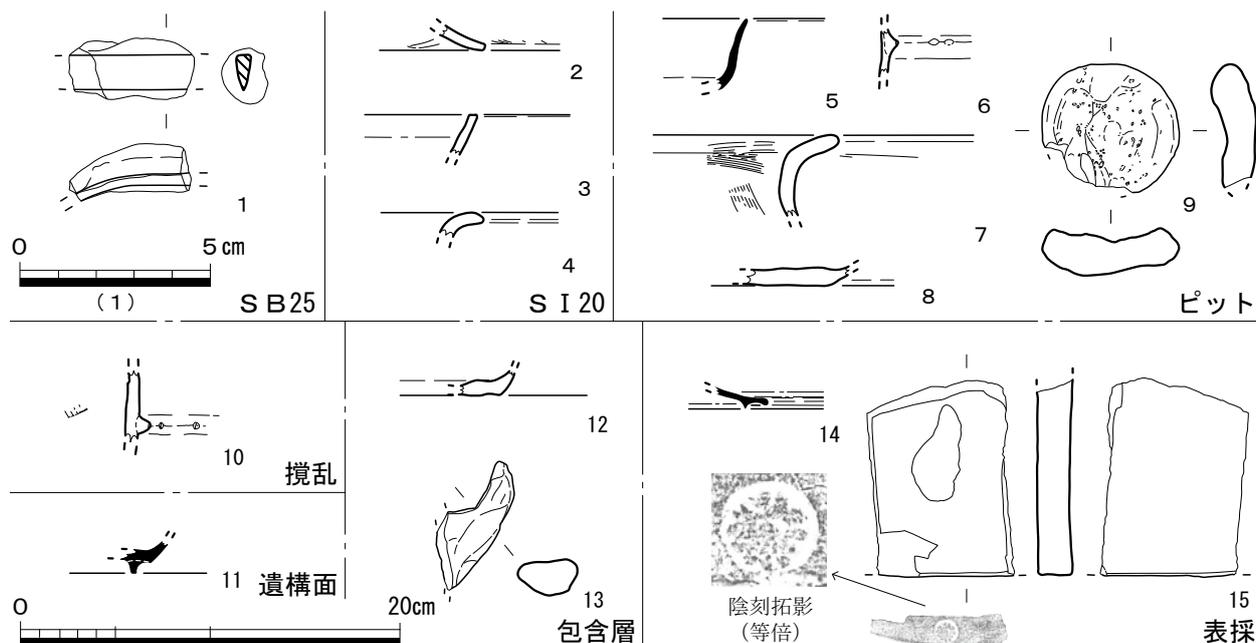
SK45 (第29図、図版21)

南区北西部隅で検出した土坑である。複数の攪乱やピットが後出し、北半は調査区外に及ぶため、平面形ははっきりしない。検出した箇所では長さ1.28m、幅0.95mを測る。底部は複数の段を有し、深さは最大で0.31mを測る。遺物は出土していない。

(3) 出土遺物 (第30図、第6表、図版23・24)

出土遺物の総量は、ビニール袋3袋分に過ぎない。土師器が大半を占め、弥生土器や須恵器、攪乱や表土から出土した近世以降の陶磁器、石製品、鉄製品が含まれる。個別の法量や色調、調整などの詳細については、遺物観察表を参照頂きたい。以下、各遺物の特徴について簡単に補足する。

1はSB25P4から出土した鉄製品である。屈曲しているが、折損面で楔状の断面を確認できることから、刀子や鉄鏃などの可能性がある。2~4はSI20からの出土遺物である。いずれも土師器で、2は埋土、3は堀方、4は検出時に出土した。2は高坏の底部片、3と4は甕の口縁部片で、4の外面には炭化物が付着する。5~9はピットからの出土遺物である。5は須恵器碗の口縁部片である。6は弥生土器の甕の胴部片で、刻目突帯を有する。7と8は土師器で、7はSK1に後出するSP17から出土した甕の口縁部である。8は坏の底部片で、摩耗が著しい。9は軽石製の石製品で、中央部が凹む。10は南区の攪乱から出土した弥生土器の甕の胴部片で、刻目突帯を有する。



第30図 今泉遺跡第9次調査遺物実測図 (1/2、1/4、等倍)

11は、南区中央部の遺構面から出土した須恵器坏の底部片で、高台を有する。12と13は、北区の包含層から出土した土師器である。12は坏の底部片、13は把手で、いずれも器面は摩耗する。14と15は、表採した遺物である。14は南区で表採した須恵器坏蓋の口縁部片で、受部を有する。色調や調整は、第8次調査のS D20で出土した須恵器坏蓋に類似する。15は南区で表採した平瓦である。表面が銀化した近世以降の燻し瓦で、小口面に円形の陰刻が確認できる。

第6表 今泉遺跡第9次調査出土遺物観察表

遺物 No.	出土 遺構	種別	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整・文 様			胎 土 石 材 重 量	備 考	登 録 番 号
				口縁径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)	外面 (凸面)	内面 (凹面)	外面 (凸面)	内面 (凹面)	底面 側面			
1 第30図	S B25 P 4	鉄製品	刃部か	(3.3)	1.6	1.35	青灰色 (折損面)		鉄錆			(7.60) g	屈曲する 断面楔形	202213 000015
2 第30図	S I 20 埋土	土師器	高坏	—	—	(1.3)	橙色		工具ナデ ナデ	ナデか 工具ナデ痕	ナデ	雲母、角閃石、 微砂粒を含む	底部片	202213 000005
3 第30図	S I 20 掘方	土師器	甕	—	—	(2.1)	橙色	橙色～ にぶい 橙色	回転ナデ	回転ナデ	—	雲母、角閃石、 細砂粒を含む	口縁部片。外面に炭 化材付着	202213 000006
4 第30図	S I 20 検出時	土師器	甕	—	—	(1.5)	橙色	にぶい 黄橙色	横ナデか	横ナデか	—	角閃石、細砂粒、 微砂粒を含む	口縁部片。摩耗	202213 000007
5 第30図	S P 12	須恵器	坏	—	—	(3.8)	暗灰色 ～灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。砂粒、 白色粒子を含む	口縁部片	202213 000001
6 第30図	S P 14	弥生土器	甕	—	—	(2.6)	浅黄橙色	淡黄色	ナデか 突帯	ナデか	—	雲母、砂粒、 褐色粒子を含む	胴部片 刻目突帯か	202213 000003
7 第30図	S P 17	土師器	甕	—	—	(4.25)	橙色		調整 横ナデ	ハケ目 横ナデ	—	雲母、砂粒、 砂礫を含む	口縁部片 内面胴部黒変	202213 000004
8 第30図	S P 24	土師器	坏	—	—	(1.0)	明赤褐色	にぶい 褐色	回転ナデか	回転ナデか	ヘラ切り 底か	雲母、角閃石、 微砂粒を含む	底部片 摩耗著しい	202213 000008
9 第30図	S P 43	石製品	軽石製品	7.2	(6.4)	2.4	にぶい 黄色	にぶい黄褐色 ～明黄褐色	敲打痕、研磨、一部擦痕			軽石 (38.07) g	断面黒変	202213 000009
10 第30図	攪乱	弥生土器	甕	—	—	(3.9)	にぶい 橙色	にぶい 橙色	横ナデ 刻目突帯	ハケ目 ナデ	—	雲母、角閃石、 細砂粒を含む	胴部片	202213 000002
11 第30図	遺構面	須恵器	坏	—	—	(1.7)	灰色～ 灰オリーブ色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	ナデ接合	精良。微砂粒を 若干含む	底部片	202213 000010
12 第30図	包含層	土師器	坏	—	—	(1.4)	橙色～浅黄褐色		回転ナデか	回転ナデ	摩耗	精良。雲母、微砂粒、 赤色粒子を含む	底部片 摩耗著しい	202213 000011
13 第30図	包含層	土師器	把手	(6.8)	(4.15)	1.9	橙色	にぶい 橙色	指ナデ	ナデ	—	精良 砂粒を若干含む	摩耗著しい	202213 000012
14 第30図	表採	須恵器	坏蓋	—	—	(1.1)	黒褐色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	細砂粒、微砂粒を 含む	口縁部片 かえりあり	202213 000013
15 第30図	表採	瓦	平瓦	(10.3)	(7.75)	1.8	灰色～ 暗灰色	灰色	ナデ	ナデ	陰刻	精良。黒色粒子を 含む	表面銀化	202213 000014

3. 総括

(1) 検出遺構について

南区は第8次調査の調査区に対し約0.3～0.4m高台に位置するが、遺構密度が希薄で、第8次調査で検出した落とし穴状遺構や弥生時代の遺構に関連する遺構は見つからなかった。出土した須恵器は、坏の形状から7世紀から8世紀に収まる。その他の出土遺物も土師器や須恵器が大半を占め、周辺に同時期の遺構の存在が示唆される。

北区では、S B25とS I 20の他に多数のピットを検出した。包含層の存在と検出状況から、傾斜地の遺構が削平されずに残存した状況が示唆される。S B25とS I 20は共に出土遺物に乏しいが、土師器の甕や鉄製品が出土した点から、その年代は古墳時代から古代に収まるとみられる。なお、北区の北東側に存在したと伝わる、今泉古墳に関する遺構は確認できなかった。

第II章でも触れたが、今泉遺跡を含む安武遺跡群周辺での古墳時代の遺構は、弥生時代や古代と比べて少ない傾向にある。集落遺構は、西烏遺跡第1次調査(注1)で古墳時代のもものとみられる掘立柱建物が検出されたほか、同遺跡第2次調査(注2)で5世紀前半の井戸、東烏遺跡第1次調査(注3)で6世紀後半の溝と井戸、城崎遺跡第1次調査(注4)で古墳時代中期の掘立柱建物と土坑群、

押方遺跡第1次調査(注5)で古墳時代後期の柱列と総柱建物、安武三反野遺跡第2次調査(注6)で古墳時代後期の竪穴状遺構や溝が確認されている。今回の調査で検出した遺構が古墳時代の所産だとすれば、今泉遺跡では初めての古墳時代の遺構で、低台地南端にも古墳時代の遺構が存在することを示す。

(2) 今泉古墳の位置について

ところで、今泉古墳の記述が初めて登場する文献(注7)は、古墳の位置を第3図の場所に図示しており、文化財保護課が編集した安武校区の文化財マップも踏襲している(注8)。その根拠は、第3図の場所で「石室の石材」が見つかり、安武本納骨堂の手水台に転用されたためとしている。そのため出土遺物は記録に無く、古墳の年代もはっきりしない。

また、地図の標高や空撮写真から分かるように、この場所は周囲に比べて標高が低く、現地を踏査しても南西-北東方向に谷状の地形を呈している。近隣住民によると、この場所は現在よりもより低地で、造成して現状まで嵩上げしたとのことである。実際、今回の調査でも北区南東部に瓦礫を含む攪乱が確認できた(第23・25図参照)。また、北区の南東側の水田で行った試掘確認調査では、地表下約2.5mまで掘削したが、なおも碎石が堆積しており、地山には到達しなかった。

以上の点から、谷状地形の底部に古墳があった可能性は否定できないが、地形などから高台に位置していた古墳が崩落し、石材が谷部に流れ込んだ可能性も想定できる。ただし、北区北方の台地は削平が著しく、試掘確認調査では遺構も遺物も見つかっていない。また、台地上で実施した今泉遺跡第6・7次調査(注9)では、時期不明のピットが検出されたのみで、出土遺物は皆無である。今回は可能性の提示に留めておき、試掘確認調査など、情報の増加を待ちたい。

【注】

(1) 久留米市教育委員会『安武地区遺跡群XI』久留米市文化財調査報告書第128集 平成9年

(2) 注1文献と同じ。

(3) 注1文献と同じ。

(4) 久留米市教育委員会『安武地区遺跡群VII』久留米市文化財調査報告書第82集 平成5年

(5) 久留米市教育委員会『安武地区遺跡群V』久留米市文化財調査報告書第69集 平成2年

(6) 注1文献と同じ。

(7) 原口重吉・野口勝人『安武町の史跡』久留米市安武校区公民館広報部 昭和63年

(8) 久留米市教育委員会『安武・津福校区の文化財マップ』平成14年

久留米市教育委員会『安武校区の文化財マップ』平成31年

(9) 久留米市教育委員会『安武遺跡群1』久留米市文化財調査報告書第424集 令和3年

今泉遺跡
第八次調査

念仏塚遺跡
第八次調査

今泉遺跡
第九次調査

写真図版

図版 1

今泉遺跡
第八次調査

今泉遺跡
第九次調査



今泉遺跡第8・9次調査全景（南東上空から、合成）

図版 2



今泉遺跡第8次調査全景（南東上空から）

図版 3



(1) SD20南部土層 (南東から)



(2) SD20北部土層 (南東から)



(3) SD20鉄製品出土状況 (南東から)



(4) SD20完掘状況 (南東から)



(5) SI1石核検出状況 (北東から)



(6) SI1硬化面検出状況 (北東から)



(7) SI1完掘状況 (南東から)



(8) SI2硬化面検出状況 (南東から)

図版 4



(1) S I 2 完掘状況 (東から)



(2) S I 4 遺物出土状況 (北東から)



(3) S I 4 完掘状況 (南東から)



(4) S I 6 木杭出土状況 (北から)



(5) S I 6 台石片出土状況 (北東から)



(6) S I 6 硬化面検出状況 (北東から)



(7) S I 6 完掘状況 (南東から)



(8) S I 8 土器出土状況 (東から)

図版5



(1) S I 8 硬化面検出状況 (南から)



(2) S I 8 完掘状況 (南東から)



(3) S I 10 焼土検出状況 (東から)



(4) S I 10 硬化面検出状況 (南東から)



(5) S I 23 硬化面検出状況 (南東から)



(6) S I 23 完掘状況 (南東から)



(7) S K 3 土層 (南東から)



(8) S K 3 完掘状況 (南西から)

図版6



(1) SK5完掘状況(東から)



(2) SK7焼土・土器出土状況(南西から)



(3) SK7土層(南東から)



(4) SK7底部完掘状況(南西から)



(5) SK15土層(南西から)



(6) SK15完掘状況(北西から)



(7) 落とし穴状遺構群完掘状況(北西上空から)



(8) SK9土層(南西から)

図版 7



(1) SK9ピット検出状況（北西から）



(2) SK9ピット礫出土状況（南東から）



(3) SK9ピット断面（南東から）



(4) SK11ピット検出状況（北から）



(5) SK11ピット礫出土状況（北から）



(6) SK11ピット断面（南から）



(7) SK12土層（南東から）



(8) SK12ピット検出状況（北東から）

図版 8



(1) SK12ピット礫出土状況（北東から）



(2) SK12ピット断面（南西から）



(3) SK14土層（東から）



(4) SK14完掘状況（北から）



(5) SK14ピット礫出土状況（北から）



(6) SK14ピット断面（南から）

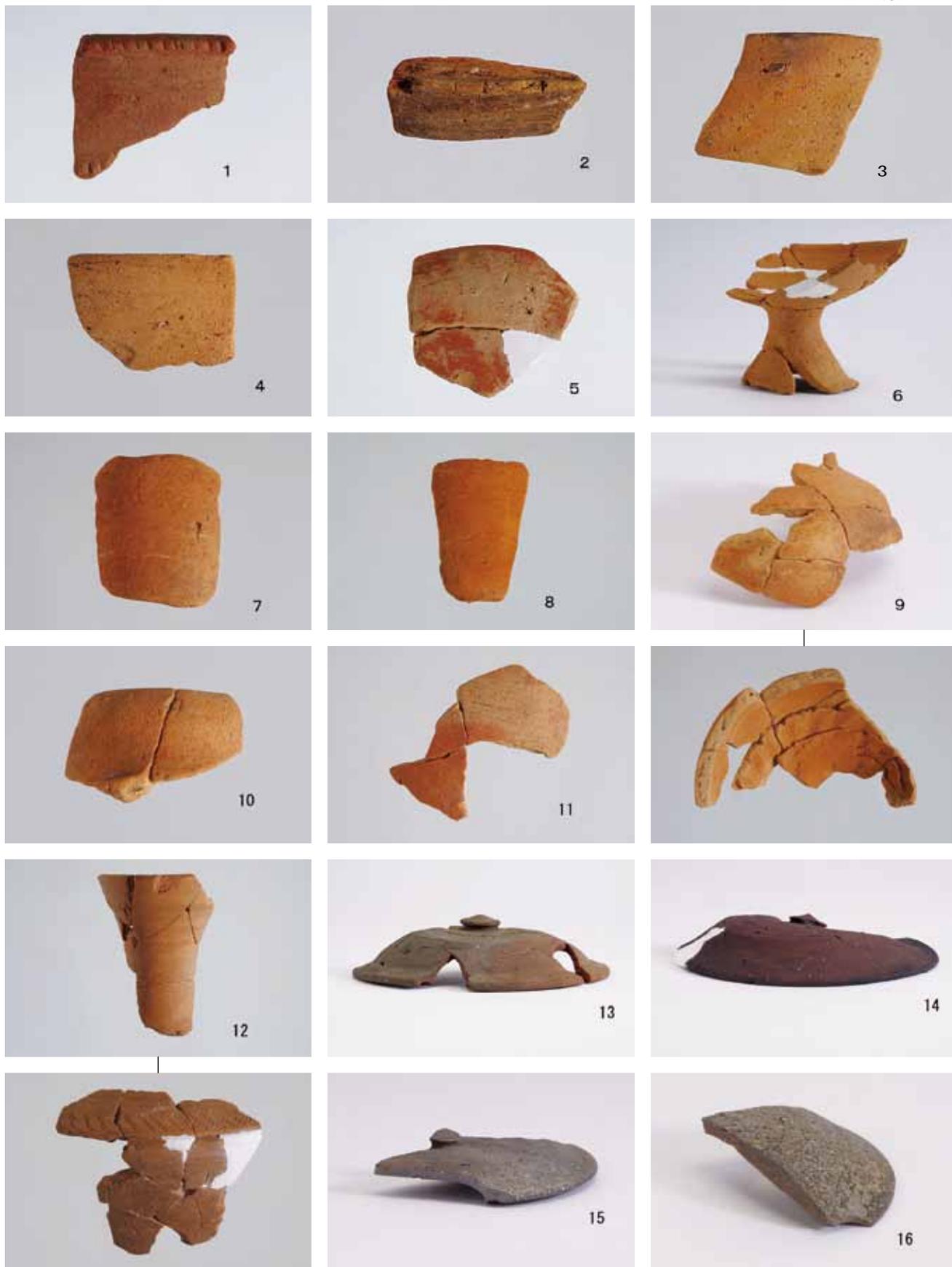


(7) 調査地点から第1～5次調査を望む（南西上空から）



(8) 調査地点から念仏塚遺跡方面を望む（南東上空から）

図版 9



今泉遺跡第8次調査出土遺物 1

図版10

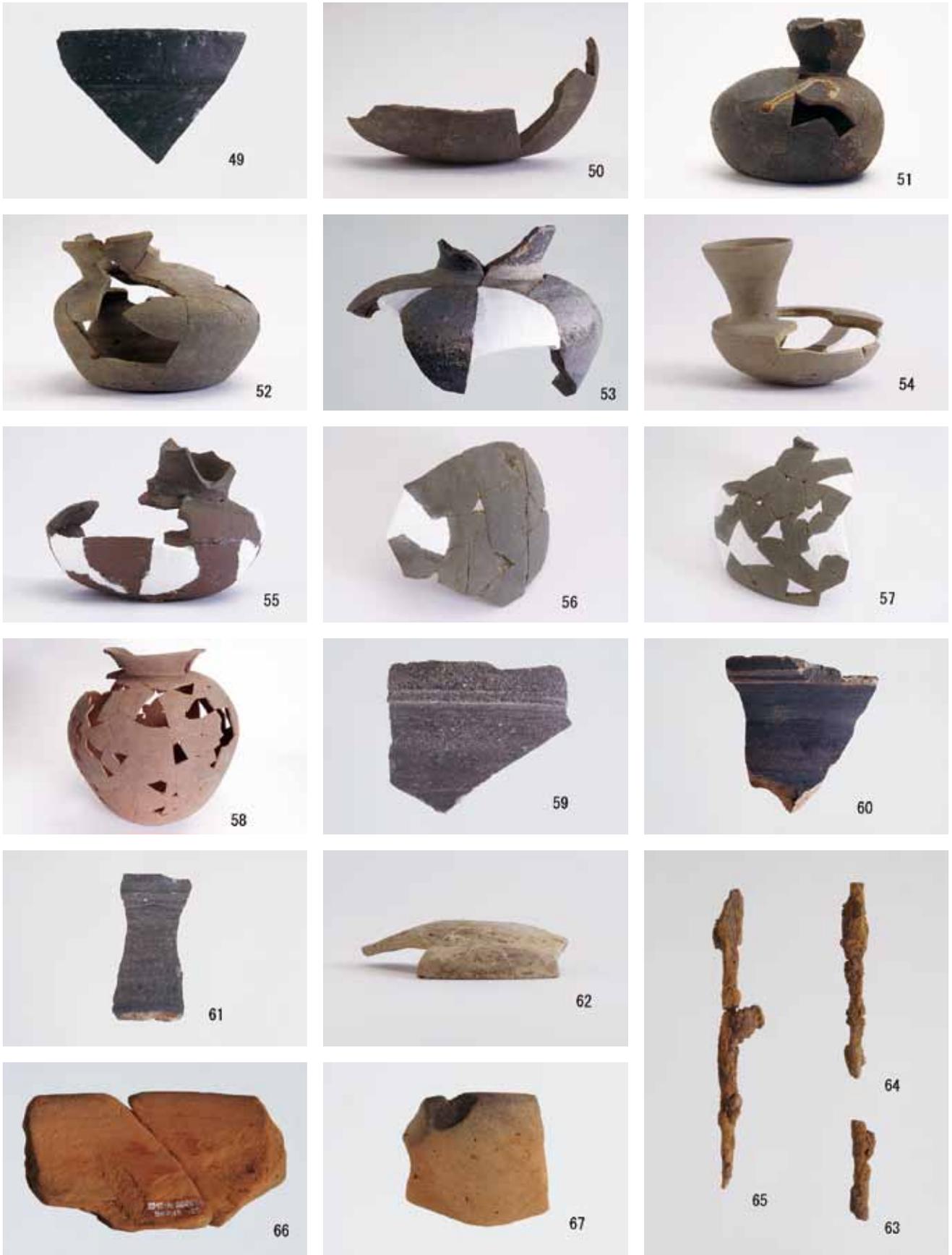


今泉遺跡第8次調査出土遺物 2



今泉遺跡第8次調査出土遺物 3

図版12



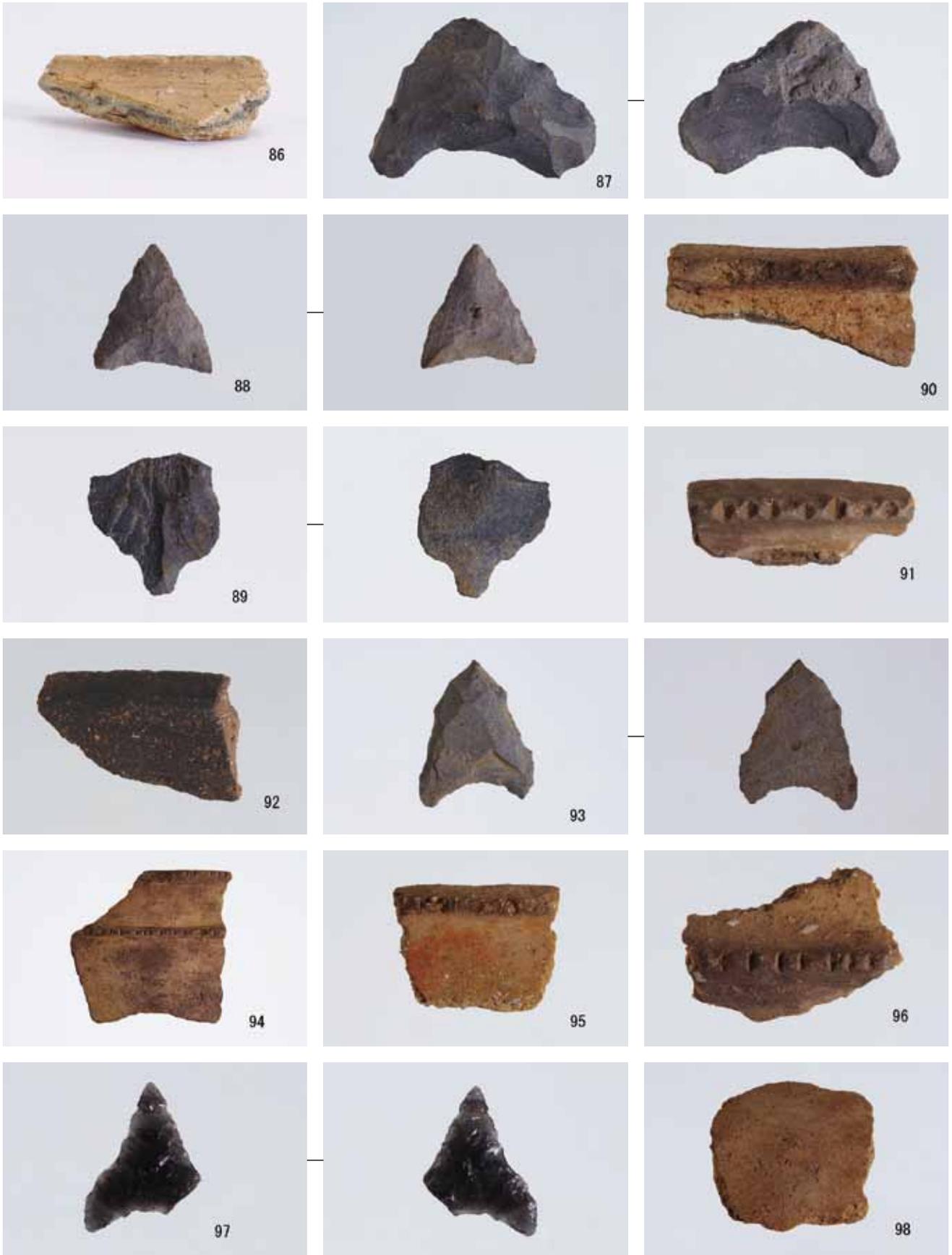
今泉遺跡第8次調査出土遺物4

図版13



今泉遺跡第8次調査出土遺物5

図版14



今泉遺跡第8次調査出土遺物6

図版15



今泉遺跡第8次調査出土遺物7

図版16



今泉遺跡第8次調査出土遺物8

図版17



今泉遺跡第8次調査出土遺物9

図版18

念仏塚遺跡
第8次調査



念仏塚遺跡第8次調査全景（南上空から）



(1) SD1土層 (南西から)



(2) SD1完掘状況 (北東から)



(3) SD3土層 (西から)



(4) SD3完掘状況 (西から)



(5) 地震痕跡検出状況 (南西から)

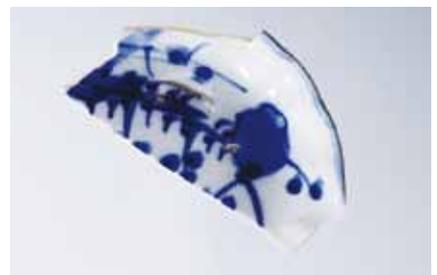


(6) 地震痕跡土層 (南西から)



(7) 念仏塚遺跡第八次調査出土遺物1

図版20



念仏塚遺跡第8次調査出土遺物2



(1) 今泉遺跡第9次調査北区全景 (南東上空から)



(2) 今泉遺跡第9次調査南区全景 (南西上空から)

図版22



(1) 南区北東隅土層 (南西から)



(2) S B25完掘状況 (南東上空から)



(3) S B25 P 1 土層 (南東から)



(4) S B25 P 2 土層 (南東から)



(5) S B25 P 4 土層 (南西から)



(6) S B25 P 5 土層 (南西から)



(7) S B25 P 7 土層 (北東から)



(8) S D18土層 (北東から)

第九次調査
今泉遺跡



(1) S I 20硬化面検出状況 (南から)



(2) S I 20焼土検出状況 (南西から)



(3) S I 20完掘状況 (北東から)



(4) S K 1完掘状況 (南西から)

今泉遺跡
第九次調査



(5) 今泉遺跡第9次調査出土遺物 1

図版24



今泉遺跡
第九次調査

今泉遺跡第9次調査出土遺物2

報告書抄録(1)

ふりがな	やすたけいせきぐん3 —いまいずみいせきだい8・9じちょうき、ねんぶつづかいせきだい8じちょうき—		
書名	安武遺跡群3 —今泉遺跡第8・9次調査、念仏塚遺跡第8次調査—		
副書名	主要地方道久留米柳川線久留米工区改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第448集		
編著者名	西 拓巳		
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課		
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3		TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 E-mail : bunkazai@city.kurume.lg.jp
発行年月日	2024(令和6)年2月29日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
いまいずみいせき 今泉遺跡 だい じちょうき 第8次調査	ふくおかけんくろめしやすたけまち 福岡県久留米市安武町 やすたけほん 安武本1460-1	40203	30599	33° 17' 13"	130° 29' 5"	20211122 20220125	995㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今泉遺跡 第8次調査	集落	縄文 弥生 古代	落とし穴状遺構 4基 竪穴建物 7基 土坑 5基 溝 1条	弥生土器、土師器、須 恵器、石製品、鉄製 品、ガラス製品	弥生時代前期末の集落 を確認した。

要約

調査地点は、住吉川の支流に面した低台地の標高約9mに位置する。北東約300mに位置する第1～4次調査では、落とし穴状遺構が65基、弥生時代の円形建物が18基検出されている。今回の調査でも同様の遺構を検出し、これらの遺構の分布が南方に広がることを明らかにできた。古代の溝からは、7～8世紀代の土師器と須恵器が大量に出土し、ガラス子玉の出土からも、周辺に点在していたという古墳との関連が想定される。

土木工事の届出日	平成29年8月7日	遺物の発見通知日	令和4年1月28日 (3文財第2852号)
----------	-----------	----------	--------------------------

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ねんぶつづかいせき 念仏塚遺跡 だい じちょうき 第8次調査	ふくおかけんくろめしやすたけまち 福岡県久留米市安武町 やすたけほん 安武本466-4、469-4	40203	31108	33° 17' 31"	130° 29' 3"	20220704 20220729	239㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
念仏塚遺跡 第8次調査	集落	近世 近代	溝 2条 地震痕跡	弥生土器、土師器、須 恵器、石製品、瓦、ガ ラス製品	地割れの痕跡を検出し た。

要約

調査地点は、筑後川左岸や金丸川、広川によって形成された氾濫平野に突き出る台地の南西端に位置する。今回の発掘調査で検出したのは、近世の溝と近代以降の段落ちや廃棄土坑、攪乱が大半で、遺構の密度は極めて希薄だった。これらの遺構は、安武本村の集落に伴うと考えられる。地割れの痕跡の年代は不明だが、市内各地で検出された地震痕跡と同様に、天武天皇7年(678年)の筑紫地震に伴う地震痕跡と想定できる。

土木工事の届出日	平成29年8月7日	遺物の発見通知日	令和4年8月3日 (4文財第1304号)
----------	-----------	----------	-------------------------

報告書抄録(2)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
いまいずみいせき 今泉遺跡 だい じちようさ 第9次調査	ふくおかけんくろめしやすたけまち 福岡県久留米市安武町 やすたけほん 安武本1458-3、1458- 4、1497-2	40203	30599	33° 17' 13"	130° 29' 6"	20221111 ? 20221226	611㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
今泉遺跡 第9次調査	集落	古墳 古代	掘立柱建物 1基 溝 1条 竪穴建物 1基 土坑 2基	弥生土器、土師器、須 恵器、瓦、石製品、鉄 製品		古墳時代から古代の遺 構を確認した。		
要 約								
調査地点は、谷部に面した2ヶ所に設定した。第8次調査に隣接する南区では、ピットや小規模な土坑のみ検出した。遺物のうち弥生土器は数点のみで、大半は古墳時代から古代の土師器や須恵器の細片が占める。谷部に面した傾斜地である北区では、2間×2間の総柱建物と方形の竪穴建物を検出した。いずれも出土遺物に乏しいが、土師器の甕や鉄製品が出土したことから、古墳時代から古代の遺構と想定できる。								
土木工事の届出日	平成29年8月7日			遺物の発見通知日	令和4年12月27日 (4文財第2687号)			

安武遺跡群 3

— 今泉遺跡第8・9次調査 —

— 念仏塚遺跡第8次調査 —

久留米市文化財調査報告書 第448集

令和6(2024)年2月29日 発行

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

発行 久留米市教育委員会

印刷 香和印刷株式会社

久留米市津福本町 2320-15